
よしざわはやみ

五線譜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よしざわはやみ

【Nコード】

N4347D

【作者名】

五線譜

【あらすじ】

同じクラスでもほとんど接点がない彼女。いつも窓ぎわの最後から一つ前の席を選ぶ彼女。一人で涼しげに歩く彼女。彼女のことが、なぜか気になる。

エピソード1

吉澤早美。

彼女の印象は、色でいうなら白。

雰囲気というなら寒い冬の朝の透明な空気。

そうはいっても、存在が薄いという否定的な意味ではない。いつも前を向いて涼しげに風をきって歩く姿から、俺の中で勝手にそうイメージづいている。

彼女はこの3年3組の副学級委員長という肩書きを持つ。その仕事のため、6限目の授業が終った直後、一気に騒がしくなる教室からするりと脱け出す。それは彼女の日課だ。

ショートカットの黒髪は、風に吹かれてサラサラと音を立てているようにも思える。残暑厳しいこの空気の中、そこだけ涼を感じさせられ、目が離せない。

廊下に出る一瞬の横顔は少し伏し目がちで、歩く後ろ姿はとても潔いから。

「かつたるいよなー、補習」

「おお……」

不意打ち……。俺が話し掛けられたということに気付かなかった。「悪い、なんだって？」

俺はいつのまにか隣にきていた井上俊太に聞き返すはめになった。

「カズ、なにぼーっとしてんだよ」

同じく隣にきていた高橋貴行のからかうような声に、俺はようやく自分の周りに人が集まっていたことに気づいた。

「ん、別に……ちょっと考えごととして」

俺、湯本一哉はすぐに反応できなかった理由の気まずさに、差し当たらない答えを返す。

理由なんて言えない……。

「俺、知ってるんだなあ〜こいつがぼけてた理由」

ふいに、右隣の竹内歩がにやりとしたので、俺はぎくりとした。

俺の焦りなど知らず、高橋・井上ことタカ・俊太は、完全に面白がりながらけしかけている。

「なんなんだよ、歩」

「あれ？ ひよつとしてえ？」

歩は勿体つけるように笑っている。

やばい……。

吉澤早美を目で追っていたことがばれたのか…？

「なんだよ。歩、言ってみろよ」

悲しいかな、俺はにやりと笑いながら「俺らしい」答えを返した。

本心からすれば、まったくもって虚勢である。正直言い当てられたら、最高のからかいネタとして、このクラスでの俺の立場はひどく惨めなものになっただろう。俺も含め、面白いことくだらないことと楽しいこと、つまり何でもいいから暇つぶしになることが好きなこいつらのネタの中心になることは、かなり避けたかったのだが…。

「8組のキラルーのことだろ」

歩が言った瞬間、3人からの爆笑が起こった。もちろん俺は本当にほっとしながら笑った。

キラルーとは、ケバいい化粧にありえない短さのスカート、きつい香水をつけて校内を闊歩する4〜5人のギャル集団のことだ。明らかに世間一般のギャルな恰好をしているくせに、そう呼ばれることをいやがって自分たちで「キラルー」などと名乗っている。

「キラルーの中の一番髪の色が派手なやつ、昨日の始業式でもお前の方見ながらなんか騒いでたぜ」

「おりよ？」

「それマジかよ」

二人が俺の代わりに食いついた。

「情報通な俺をなめんなよ。確か名前は…」

「あー、俺そいつら興味なし」

俺は年頃の男子には珍しくそこを遮った。別に女に興味がないわけではないが…むしろ逆だが…。

「だよな、あれはきついべ。男好きなオーラ出まくり」

「やりすぎたよな。見せりやあいいってもんじゃねーよな」

タカがさも愉快そうに舌をだして笑い、俊太もうんうんとうなずいている。

「好かれるなら、春野アリサくらいチラ見せのうまい可愛い子でないと」

俺はとても手の届かない人気のグラビアアイドルを引き合いにだし、その場を上手く笑いで収めた。

ピンチは無事、切り抜けることができた。

タカ、俊太、歩、そしてこの俺は、ここ3年3組の男子の中では中心的な位置にいる。くだらない話に花を咲かせ、女と遊びの話題に盛り上がり、勉強にはうんざり取り組みながら、時には部活動に燃え、時には純粹に悩みを打ち明け合っている。

普通の男子高校生なつもりだが、対外的にはいわゆる派手で遊び好きなグループに振り分けられるだろうか。

そんな評価をこれまでは気にしたことなかったのに、最近はいやに意識させられる。

「カラオケ行きてえ」

馬鹿話の続きの中で、歩が唐突に言った。

「行こうぜ。日曜日でいい？」

「いいねー、話が早い」

タカがすぐに乗る、俺もカラオケは好きなので続いた。こんな風に、勢いで色々なことが進んでいくのも、遊び好きな高校生のイメージには合うだろう。

「俺はパス、しかもその日模試あんだろ？」

「げ…そうだった？ まあその後で行けば都合いいじゃん、なんで

俊太はだめなんだよ？」

4人中唯一断った俊太に、他3人の視線が集まった。

「あー、ちよつと…先約が」

「はいはい、ゆかちゃんね」

したり顔で歩が言った。俊太はこの中で唯一の彼女持ちである。

紹介で知り合った2年の子と付き合っている。4人の中では一番背が高く、くしゃつとした顔で笑う爽やかなやつだ。

「コラ、付き合いわりーぞ」

周りからはブーイングが飛ぶ。

「仕方ねーだろ、いままでずっと部活で平日も休日も相手してやれなくて、部活終わったと思いきや補習に模試で、向こう拗ねてんだよ」
今は9月。二期が始まってたったの2日目だ。

4人とも、いや4人に限らずこのクラスでも半分ほどの人間が、この間まで部活の主力として活躍し、夏の大会を最後に引退したばかりである。

これからは嫌でも受験生で、せつかくの休日にはちらほら模試が入ってくる。昨日の学年集会では学年主任が今後の受験についての心構えの話をしたところだ。

クラスの雰囲気も受験モードにならねばというあがきは見えるが、夏休みが明けてまだ2日目、いきなりエンジンをMAXにかけるのは難しい…。もっとも、進学校なので夏休み中の特別補習はあったため、夏休みと新学期の始まりはHRがあるくらいで大差ない。

よって新学期でやる気がでないというのは単なる言い訳にすぎない…。

特進クラスでは、これから毎日6限目の授業とHRをした後、70分2回の補習授業が行われる。夏休みの補習同様任意参加で、さつさと帰って塾に行くやつもいるが、塾より金がかからない分、嫌々ながらも参加する人間は多いようだ。

「はいはい、せいぜい彼女と仲良くしてきてくださいね」

身内からは「女好き」のレッテルを貼られている歩が拗ねながら

言った。

「仕方ねーな、じゃあもう少し他のやつにも声かけとくな」

「ああ、タカ様、どうか可愛い女の子たちもよろしく」

調子良さそうに歩むが続いた。タカが声をかければ、男でも女でも何人かは集まるだろう。特にタカは人の中心にいる人物で、リーダー的な男だ。顔もおせじ抜きでカッコよく、成績だけはそこそこだが、スポーツは万能、ついで責任感もあつてサッカー部では部長、学校祭では応援団長を、さらには学級委員長も務めている。背も高く、モテる要素に事欠かない。

なぜ彼女がいないのか、周囲を不思議がらせている。本人は作らないだけだと言っているが、その本心はわからない。

俺もタカのようにもう少し髪を伸ばそうか…短い自分の髪を触りながら、そんなことを考えているうちに吉澤早美が戻ってきた。

手にはクラス分のノートの束と、いくつかプリントを持っている。HR前に職員室の前にあるクラスボックスに、プリントなどを取りに行くのは副学級委員長の仕事だ。学級委員長には号令やクラスをまとめるという仕事があり、副学級委員長はそういった雑務があるらしい。そう仕事振り分けられているので、タカが吉澤早美の仕事をするのは彼女が休んだ時だけである。

あの抱えているノートの束が2教科分になったときなど、タカが手伝ってやればいいのにと思ったりする。だが、タカはここにおいてHRが始まるまで他愛なく話をしているし、他のクラスメイトも友達とくだらない話で盛り上がっているだけ。誰も吉澤早美がそんな仕事をしているなんて知らないのだろう。もっとも、俺も最近ようやく気付いただけのことで、まったく人のことを言えた立場ではなかった。そして、気付きながらも、手伝いに行こうなどという勇氣はまったくない。

「ゆもくん、なんか今日ばーっとしてるね」

今度可愛い女子の声が俺を現実に戻した。

「なにに、ほんとに気になっちゃって恋わずらいしてるの?」

歩がまた余計なことを言ったおかげで、3人とまたいつのまにか近くにいた女子たちに笑われた。

「えー、恋わずらいって誰に？」

先ほど話し掛けてきた中井沙織ことなかいちゃんが、可愛い笑顔で話をせがんできた。俺は椅子に座っているのだが、立っている彼女はなぜか上目遣いである。

「なわけないって、ただ腹減ってるだけ！　ね、なんか喰いもんない？」

俺はあながち嘘でもないことを返した。

「ラッキー、ポケットにチョコあるよ」

「マジ、もらっていい？」

「あ、俺も下さい！」

「いいよー、はいどうぞ、ゆもくん、うつちーも」

なかいちゃんのポケットからよく隠れていたなというふうにチョコが出てきて、場は思いがけず甘く楽しい雰囲気になった。

俺たちの側にきていた女子は、なかいちゃん、石田昌子ことしゅうこ、上野玲奈ことレーナだ。この3人はキヤルーほど行き過ぎた感じもなく、ほどよく制服を着くずして、男心をよくわかっている明るく華やかなグループだ。このチョコやお菓子のように甘い印象で、仲良さげに話し掛けてもらえれば俺も悪い気はしない。他の男どもも同じ考えだろう。

「ほら、席つけよー」

担任が入ってきて、みんなはわらわらと席に戻っていった。それでも教室は近くの友達とのおしゃべりで騒がしいままである。

そうした間も、吉澤早美は最前列で黙々とノートとプリントを配っていた。じつとプリントの端を見つめながら数える伏し目がちな様子が清楚に見え、プリントを仕分ける細い指が、とても様になっている。ずっと引き締められた唇がほんのり赤くて…。

「カズってばずりー、なかいちゃんからチョコもらうなんてよ」

歩が突然話し掛けてきたが、今度はすぐに対応できた。

「お前だつてもらつたじゃん」

「俺のはついでもう感じだつたもん…」

歩は惚れっぽい性格で、大抵の可愛い女子には甘く、彼女たちの前では面白おかしく気を引こうと頑張るけなげで可愛いやつだ。当然クラス一可愛いなかいちゃんのことかなり気に入っているが、どこまで本気かはわからない。愛嬌はあるが、背も可愛いことが本人も気にしている。

俺も背は低くはないが、タカほど垢抜けてもおらず、俊太ほど素直にいいやつオーラも出せない。全体的な容姿は悪くないが、モテ男ぶるにも悪ぶるにも属せない、どこか中途半端な感じがコンプレックスとしてある。

「そう言うなつて。悪かつたつて、俺もさ…」

と愚痴りそうになったところを、教室全体に響く担任の声に遮られた。

「朝配つたアンケート、後から回収してくれ」

俺たちはがさがさと机の中を探り、かつたるそうに立ち上がった。昨日の長いHRで、新学期にあたつての係り決めや席替えが行われた。

俺と歩は最後尾の席をゲットし、今月の幸運を使い果たしたのではないかと舞い上がった。後の席と言うのは教師の目から遠く、席替えの時には最も魅力的で人気のある席だが、ただこうした回収の役目だけが面倒臭い。

回収し終えて戻るとき、ふと吉澤早美を探せばすでに席に着き、悠々と座つて窓の外を眺めていた。係りや委員会決めは学期ごとに行われるが、学級委員長と副学級委員長の任期は1年である。みんながやりたがらない役職なので、このクラスの担任の方針で、月に一回ある席替えの時に、席を自由に選べるという特権がついた。それによって、今回タカは廊下側の最後尾を取っている。タカが後方の席を転々としていたのと比べて、吉澤早美はほとんど毎回、その窓側の後から一つ前の席を選んでいる。

なぜだろう？　ここ最近生まれた、俺の小さな疑問だ。

俺の席は窓側から3列目で、吉澤早美を左端に捉えながら、担任の連絡事項を聞いていた。

なぜ彼女はある席を選ぶのだろう、なぜ彼女はめんどくさい副学級委員長をしているのだろう、なぜ彼女の周りだけ世界が違っている見えるのだろう、なぜ俺は…。

彼女のことを目で追うようになったのだろう。

エピソード1（後書き）

読んで頂いてありがとうございました。

エピソード2

吉澤早美。

彼女はあたしとはまったく人種が違う…もちろん同じ黄色人種の日本人だけ…。

まず服装。イマドキ制服を校則で着る人ってどう？

あたしたちの学校の制服は青いリボンだけが唯一の飾りで、冬服はただの紺のブレザーを羽織るだけ、全然可愛くない。

夏服のブラウスも、もっと可愛いデザインだってあるでしょう？ しかもリボンは襟元につけるっていうんだから…蝶ネクタイじゃあるまいし、本当にセンスがない。だからブラウスは第2ボタンまではずして、リボンを無理矢理そこまで下げる。もちろんスカートは太もものあたりまで短くする。これで決まり。

髪は染めるのは禁止されているけれど、真っ黒なんて重たすぎだから、それを守っている子は少ない。明るすぎるのは生徒指導のやつらに目をつけられて黒彩かけられるのがオチなので、ぎりぎり地毛って通せそうなくらいに染める。ストパーかけたり、ゆるくパーマかけたりもする。

ピアスは…以前すぐに見つかって没収されたから、今は透明なので穴がふさぐのを防いでいる。

化粧も、生徒指導の鬼婆に見つかるとコットン片手に追いかけられるんだけど、いつも抜かりはない。

でも、吉澤早美はあたしとまったく正反対。きっちりしかり、この制服を着こなしている。

「あ、夏休みの模試の成績が張り出されてあるよ」

「えー、あたし今回悪かったもんなー」

「…あたしいつも悪いからいまさら…」

中井沙織ことなかいちゃん、石田昌子ことしょうこ、そしてあた

し上野玲奈は、朝のSHが終ってから、吉澤早美が教室の掲示場所に張り出そうとしていたそれに寄って行った。掲示物張替えは副学級委員長の仕事らしい。

「吉澤さん、見てもいい？」

なかいちゃんが人懐っこく聞くと、彼女は少し微笑んでどうぞと場所を譲った。

吉澤早美はあたしたちと全然タイプが違うけど、別に仲が悪いとかそういうわけではない。一緒につるんだりしないけど、普通に話したりはする。

「悪いって言ったって、しょうこの名前ちゃんとあるよ」

長い髪をストパーで真っ直ぐにして下ろしているしょうこはけっこう成績がいい。今回は全体で12位だって。しょうこは勉強のほかに、けっこう色々と気がつくできる子だ。運動神経だけは残念ながらないんだけれど。

「んー、数学があんまりできなかったんだよね」

あんまりできないって言ったって、数学だけの順位でもちゃんと名前が載っているから、十分いいんだよね。この学校の模試の成績は、全体では50位くらい、教科ごとでは30位くらいまでの名前が載ることになっている。

「なかいちゃんもあるよ、あたしのはもちろんないけど」

なかいちゃんは全体で40位くらい。

なかいちゃんは背も小さくて可愛いし、いつもにこにこしていて、遊び心がある子だ。愛らしい笑顔も、ふわふわの髪も、全部あたしは羨ましく思っている。

あたしはけっこう背が高くて、印象はきついって言われるし、成績ははつきり言っでよくない。とりあえずの自慢できることは、永く付き合っているかっこいい大学生の彼氏がいることくらい。

なかいちゃんもしょうこも、あたしより全然可愛いのに、彼氏できないの不思議なんだけれど。

「ほんとだー。けっこうあたしたちのクラス名前あるよね。まあ特

進だし当然か」

担任がご丁寧はこのクラスの生徒の名前にマーカーを引くから、色々と一目瞭然だった。

「あ、やっぱり吉澤さんの名前あるね」

なかいちゃんが言った言葉に、あたしはまじまじと掲示物を見た。吉澤早美の名前は、全体で4位のところ。数学は3位、理系にも関わらず国語は1位だ。他の教科のところにもちらほら名前がある。あたしにとっては、ここでもまったく違う人間って感じる。

勉強なんて大嫌い。

特進理系クラスにはいるけど、残念ながら数学の楽しさなんてこれっぽっちもわかんない。

「数学なんてなくなれー！」

あたしがそう叫ぶと、しょうこが笑った。

「レーナは理系なのに、ほんとに数学苦手だよね」

「そうそう、どっちかって言えば文系タイプじゃない？ あたしもそんなに人のこと言えないけど」

なかいちゃんの言葉に、あたしはうつとつまった。文理コース分けがあつたのは2年に上がるとき。そのときもあたしはもちろん数学は苦手だった。でも、1年から仲良くしていたなかいちゃんやしようこと離れたくなくて、一応生物は得意だからって理系を選んだ。二人は特進理系に行くってわかっていたから、自分だけ普通理系に行かないように、ちよつとは本気で勉強もやった。

この学校は2年に上がる時の文理分けのクラス替えしかないから、仲のいい友達と別れたくなかった。

だから念願になってあたしはいまここにいるんだけど…。

「生物は好きだもーん。そう言えばさ、このクラスの女子で1年のときもクラス一緒なのって、あたしとしようことなかいちゃんと吉澤さんだけだよね」

あたしは思いつき話題を変えた。理系は女子が少ない。男子の3分の1程度で、たった10人だ。

「あ、そうだよなー」

「男子もだとけっこういるよねー」

二人はあたしのふった話題に乗ってくれ、男子のことも数え始めた。

女子が10人ってことは、けっこうグループとか難しい。あたしたちの3人グループの他に、けっこう仲のいいスポーティーな女子の3人グループがあつて、2人組にならなきゃいけないときは合体することが多い。あとはどちらかといえば真面目で地味なグループがあつて、吉澤早美は分けるとしたらそのグループ。

1年のときあたしたち3人のグループとつるんでいなかった吉澤早美は、仲のいい友達もなくまま、一人で特進理系を選んだ女子だ。自分の進路を、しっかり見据えての選択なのだろう。

女子の派閥は、とてもバランスが難しいし、うまく入れなかったり、はみ出したりしたら最後。

あたしが…きっと他の子も、抱えている不安じゃないかなって思う。

一人でなんて、絶対いられない。

でも、吉澤早美は一人で廊下を歩いたり、一人で本を読んでいたり、一人でも平気そうにしている。

信じられない。

「こら！ その3人、スカート短すぎだ」

唐突に、あたしたちの後、すぐその廊下から生活指導のガミガミオヤジの声が響いた。このクラスの副担任でもある。

あたしたち3人は顔を見合わせてから、しぶしぶ腰の辺りに手を持っていった。スカートを形だけ無理矢理下げて、長く見せるのだ。「センサー、セクハラー」

なかいちゃんが可愛らしく言う。

「馬鹿なこというな、もう授業が始まるから席につきなさい」

オヤジはムスツとしながらクモの子を散らすように手を振った。

正直、夏休みが明けたばかりで、やる気なんてでない…。

「あれ？ 次って化学だっけ？」

時間割表では英語のはずだ。

「ちゃんと見る。吉澤が訂正を書いてくれているだろうが」

あたしたちは黒板の隅を見た。確かに英語と化学が入れ替わったことが書かれていた。

「ほんとだ」

「ほら、みんな早く席つけ。それから、夏休みの課題のワーク、昨日係りに集めさせただろうが。ほんの数人しか出してないとはどいうことだ。ちゃんと出しなさい」

オヤジはすでに提出された数冊のワークを返しながら、夏休みの課題なんだから夏休みにやらないと意味がないぞなどと言っている。ただ、口やかましくいうくせに期限には甘いことをみんな知っていて、期限内に出す方が珍しいくらいなのだ。

長くみせたスカートをこっそり元に戻しながら席に着くと、机の上に自分のものではない化学のワークが置かれていた。後に回すように前から送られてきたのだ。

名前欄のところには「吉澤早美」の文字。自分の丸っこい文字とは全然違う。

あたしは、しばらくそれを眺めていたが、また送られてきた別の人のワークに我に返り、二つとも後に回した。

吉澤早美。

スカート長けも、ブラウスのボタンも、リボンのつけ方も全部校則どおりきっちりしていて、髪も染めずに化粧もしていない。

成績もよくて、真面目で副学級委員長もして、先生からの評判もいい。

友達がいらないわけではなさそうだけど、一人でなんでも平気なようにしている。

いつもずっと背筋を伸ばしている。

なんだか、雰囲気がある。

彼女にとって、おしゃれや友達ということより楽しいことってな

んだろう。

全然違う人種なのに、なぜか気になる。

エピソード3

あれから、俺の目は相変わらず吉澤早美を追った。

もうほとんど無意識のうちに、彼女の行動を目の端に捉えている。もちろんあからさまにはしないから、誰も、吉澤早美も気付いていないだろうけど…、まるでストーリーカーじゃないかと落ち込むこともあった。

あれから気づいたこと。

吉澤早美はとても優秀な生徒だ。

成績の良さはもちろん、授業中の態度も真面目で、教師の信頼が厚い。

いつも英語の和訳も古典の口語訳もしっかり予習されているし、提示された課題は必ず期限どおり出す。時折暇な教科担任が、縦がクラス名簿、横がこれまで出した課題の紙を掲示板に張り出すことがある。クラスの誰がどの課題を提出していないかが一目でわかるのだが、吉澤早美は一つとして漏れがない。竹内歩なんてほとんど空欄なのに、だ。俺、湯本一哉のところは、一つ置きくらいか…？「それじゃあ、23ページの1から4を黒板にやってみようか」

担任が受け持っているこの数学の授業は非常に退屈だ。

夏休みの補習からの続きで、もっぱら受験対策になっている。教師の解説を聞いていることもあるが、ほとんど自分で問題集を解いている。ちなみに吉澤早美も同じような手法を取っているようだ。

問題集にすらすら書き込む手、黒板を見る以外は伏し目がちな姿を、俺は斜め後からこっそり眺めているわけ…。ちなみに吉澤早美の右隣の荒川という男子は、机に突っ伏して眠っていることが多く、そうしていると特に彼女の姿が眺めやすい。

時折、窓の外を見ていたりする彼女。

何に心を奪われているのだろうか。

『カズーっ!』

隣の歩が、声をひそめて俺の名を呼んだ。

『やべえ、俺ら当たりそう、お前この問題わかる?』

『どれ?』

担任の話をまったく聞いていなかった俺は、歩が指しているページを探した。随分前にやってしまった問題だ。

「高橋が第一問、梅田が第二問、竹内が第三問、湯本が第四問だ」

『げ、やっぱり当たった…。わかんねーよ、こんなギリシヤ語』

慌てる歩の姿に、俺は不謹慎にも笑ってしまった。情け心が出て、自分の問題集を差し出してやる。

『いいよ、これ見てやれば。俺はなくてもできるから』

ちよつと得意げに言ってやると、歩むは感心したように素直にそれを受け取った。俺たちは狭い机の間をはいくぐって黒板の前に立った。

これくらいは楽勝だ。俺はさらさらとチョークを滑らす。途中、同じく指された高橋に、

『ここってこんでいいのか?』

などと聞かれながらも、スムーズに問題を解き終えた。

この板書から教師が解説していく。俺はわざと丁寧に条件など書いた。理系教科なら俺は自信があるから、少しだけアピールしてみたい。

席に戻る際、そつと吉澤早美を見た。

授業中の彼女を前から見られることは珍しい。いまは黙々とペンを走らせて問題を解いていた。明らかにページが違うから、この問題も彼女もすでにやってあるのだろう。

俺はほんの少し、自分ががっかりしていることに気付いた。もし彼女が、数学が得意でなかったら、俺の板書に関心をもってくれたかもしれない。もちろん、わからない問題はしっかり板書を写す真面目な生徒という前提のもで。

全員が席に戻り、教師の解説が始まった。

彼女は、時折黒板を見ていたが、相変わらず自分の世界で数学に向かっていた。

休み時間、トイレに立とうとした俺のところに、レーナがやってきた。

「カズつ、お願い、アレ貸して！」

「はあ？」

俺は怪訝そうに返してから、レーナが手にしていたものから、すぐに思い当たった。

「もしかして充電器？」

「そうそう！」

以前、すっかりケータイの充電をし損ねて、電池が切れてしまったことがあった。そのときはどうしてもケータイが必要で（合コンに行くはずだったのだ）、もったいないと思いながらもコンビニで電池式の充電器を購入したのだ。使った後もまだ何時間分か充電できるようになっていて、家においておいても使わないので、学校の机の奥にもぐりこませて置いた。

俺はあれ以来使う機会がないが、仲間内での緊急事態用として重宝がられている。この学校ではケータイ持ち込み禁止で、コンセントから堂々と充電すれば、発見されて没収される危険性が多いからだ。

「ほら」

「ありがとー、マジ助かる」

レーナは心底ほっとしたように笑った。少し釣った目元が細くなる。

「兄貴によろしく」

「なにそれ、いつも顔合わせてるくせに」

この会話を他の人間が聞いたら、何のことかと首をかしげるだろうか。

俺とレーナはいわゆる幼なじみである。幼稚園から、小、中、そして高校まで同じで、家も比較的近所だ。それを仲間内に言えば、「幼なじみ」というシチュエーションを羨ましがられたこともあるが、レーナとはそんな関係になったことはない。そして、そうなることはこれからもない。

理由は、俺の兄貴がレーナの彼氏だからだ。もちろん、言い訳なしに俺もそんな感情をレーナに持ったことはない。

2つ上の兄がレーナと付き合い始めたのは、俺たちが高校にあがったときで、かれこれ2年半。兄と幼なじみが付き合っているという近い状況や、昔はがさつで喧嘩っ早かったレーナが急に女らしくなったことに、当時の俺は驚いて距離をとろうとしたが、結局2年からクラスも同じになって、近すぎず遠すぎずの関係ができていく。「終ったら机の中にももぐらせておいて」

充電器をつけたまま廊下に背を向けてケータイを触るレーナに声をかけて、俺は当初の目的を果たすために廊下に出た。何となくの流れで、俊太も一緒になった。

「こないだのカラオケのメンバー、誰々だったんだよ？」
と俊太。

「俺ら3人と、小林と岸と、なかいちゃん、しょうこ、後は他のクラスの女子3人」

「5対5ね。女の子名前覚えてねーってひでえな、お前」

「確かあゆみちゃんとかあやみちゃんとかって子と、かなちゃん、まりちゃん…だったかな？」

「2組の子らじゃん。あやみちゃんだろ？　へー、女の子レベル高かったんだな」

確かに、と俺は日曜日のカラオケを思い出していた。可愛い子が多くて、けっこう盛り上がっていたな、と。

「さすがタカだな」

小林と岸も俺たちと比較的よくつるむから、男子のメンツは普通だが、その人数と同じ女の子を誘えたタカのネットワークには脱帽

する。

「で、その中で楽しい展開にならなかったの？」

俊太の期待する展開があったか、俺はうーんと考え込んだ。

歩がひたすら弾けていて、女の子を笑わせまくっていた。高橋の歌の上手さに女の子たちはきゃーきゃー言っていた。俺も色々女の子と喋って、短いスカートから除く太ももにラッキーとか思った。

用を足すために一旦会話は途切れ、手を洗いながら俺は結果を言った。

「そうだなあ、そのあやみちゃんって子はタカねらいみたいだったな。かなり積極的だったから」

俊太は呆れたように言った。

「俺はカズのこと聞いたつもりなんですけど。カズって、けっこう淡泊だよな。女に興味ないわけ？」

「そんなわけないだろ」

俺は即座に否定した。人並みには…まあ、いろいろとね。

俊太もちろん本気で言ったわけではない、すぐにだよなーと笑った。

「でもカズ、前の彼女と別れて1年くらい経つんじゃない？」

「そうだなー、もう10ヶ月か」

去年の11月まで、俺は一つ年下の彼女がいたのだが、すれ違いの結果あっさり別れてしまった。

「まあ、これから受験受験だけだよ。彼女、欲しくないの？」

俊太がその質問を投げかけてきたときには、もう教室のドアの前まで来ていた。

「そりゃあ…」

俺が答えようとしたそのとき、中からドアが開いた。すぐそこに誰かが立っていた。

「あつ…」

吉澤早美だ。

俺たちはぶつかる寸前、お互いに動きを止めた。どちらが引くか、

一瞬の間ができた。

彼女の視線と俺のそれと交わる。

何もかも見透かされているような真っ直ぐな目。

「…ごめんなさい」

動き出さない俺を見て、彼女が素早く廊下にすべり出ながら言った。

言いかけていた言葉が、「俺もごめん」だとか、「悪い」だとか、「どうも」だとかが出てこなくなった。

もしかしたら、俺の盗み見が気付かれているかもしれない…！
急激に後ろめたさや恥ずかしさが込み上げるが、彼女は超能力者かと、自分で自分につっこみを入れて、ようやく落ち着いた。

だが、そんな一瞬の躊躇のせいで、俺の喉元まで出かかった言葉は一生彼女が聞くことはなくなった。

俺の思いなどよそに、彼女は俺たちが来た方向とは逆に歩いていった。いつもの後姿のまま。

無愛想な男として、彼女の目には映っただろうか…。一言ぐらい謝ればいいのに…とか思っただろうか。いや、急いでいたみたいだから、そもそもそんな関心も持たないかもしれない…。

「おおい、カズ？」

「んん？」

「教室入らねえの？」

「…入る」

俺は気まずい思いに駆られながら、騒がしい教室に足を踏み入れた。

「で、そりゃあ…の続きは？」

俊太はよほどそこが気になるらしい。

「そりゃあ、欲しいよ」

確かに最近、俺はおかしいのかもしれない。

エピソード3（後書き）

湯本くんはどうなるのでしょうか。読んで頂いてありがとうございます。

エピソード4

「セーフ」

あたしは送信ボタンを押して、デコレーションで派手な色彩を放つケータイを閉じた。

これで一安心、パニックは過ぎ去った。

「彼氏？」

自分の席でケータイをいじっていたあたしの側に、いつのまにかしうことなかないちゃんが来ていた。

「そう。今日の予定のことメールしてる途中に電池切れちゃって焦った」

カズのおかげで助かったな。

今日は久しぶりのデート。9月いっぱいまで大学生は夏休みらしいけど、夏休みが稼ぎどころだって、修一はバイトばかりしているから、このところあまり会えていなかった。

「いいな」。カッコいい彼氏がいて。今日はどこ行くの？」

「さあ、どこだろ…。映画、かな」

なかないちゃんの言葉に、あたしは嫌味にならないように気をつけながら、なんでもないことのように答えた。

彼氏の話をするときは、みんな羨ましそうに聞いてくるけど、自慢にならないように気をつけないと何様って感じになっちゃうから…。

あたしの彼氏、湯本修一は湯本一哉ことカズの兄で、地元の大学の2年生だ。

中学生のころからずっと片思いしていて、あたしが修一を追っかけて同じ高校を受験して受かったとき、思い切って告白してOKをもらえた。大学も、同じところに行きたいなって思ってる。学科は違うけど看護科があるから、いまはそこ第一希望にしている。

「でも、受験だもんね、これからどんどん遊んでいられなくなるの

かなー……」

まだ全然受験モードになっていないけど、あたしは建前を言って苦笑いを浮かべた。

修一が通う大学はそれほどレベルが高いわけではいけど、正直いまのままではやばい。やらなきゃという思いはあるけど、なんだからまだ実感がないのだ。

「こないだの模試の自己採点した？」

「したよ、そしたら国語がひどくて」

「あたしもー、地理もすつごくやばかったの。38点だったんだよ」
「なかいちゃんとしてこの会話を聞きながら、最近の話題に「受験」関係の割合が増えているなと思った。もちろん、それ以外の話の方が断然多いけど。」

受験か……修一と同じ学校に通うためには避けられないけど、憂鬱な話題だな……。

「ねえ、昨日のカラオケどうだった？」

そういえば、とあたしは自分が行けなかった日曜日の話を二人にせがんだ。本当は行きたかったんだけど、あたしの家は商売をしていて、ときどきどうしても幼い弟と妹の世話を任されてしまう。

「楽しかったよ、レーナも来たらよかったのに。やっぱりタカは歌うまいよね」

しょうこが言うと、なかいちゃんもうんうんとうなずいた。

「だよね、かつこいい聞かせ方、しっかり心得てますって感じ。うちーがモノマネばかりしてて、あとゆもくんもけっこういい声しててびっくりしちゃった」

「タカと湯本くん、D & D 歌ってたもんね」

タカのうまさは有名だけど、カズもなかなかうまかったっけ。D & D は最近ブレイク中の2人組のアーティストで、確かに二人に雰囲気も合っている。

「カッコよかったよー。いいなあ、レーナは二人とも仲がよくて」
なかいちゃんの言葉に、あたしは曖昧に笑った。

あたしは修一筋だから全然眼中にないけど、タカは顔もいいしノリも良くてモテるらしく、カズはちよつと無愛想な感じがクールに見えて人気があるらしい。カズとは小さいころからの幼なじみで、タカとは中学校1、2年が同じクラス。ちなみにしうこは3年のとき同じクラスで仲良くなった。

こういう場合も、なんて返すかちよつと難しい。「だよね、二人とも中学校からけつこうモテてたんだ」か、「えー、そんなことないよ、二人とも馬鹿ばっかりしてるし」がいいか…。

結局あたしは、差し当たりなく答えた。

「いま二人とも彼女いないみたいだね。誰かと付き合わないのかな？」

なかいちゃん立候補したらー？　なんて笑いながら。

「えー、なに言ってるのよ」

なかいちゃんもころころと笑った。

「でもさあ、あやみがタカにラブ光線出しまくりで、あれはちよつと引いたわ」

しうこの一言で、話は予想される方向に流れ出した。

「思った、化粧もいつもよりケバかったね」

「えー、そうなんだあ」

あたしも相づちを打ち、大げさに驚きながら、内心はうんざりしていた。いい子ぶるつもりはないけど……苦手なんだよね、他人の悪口って。そんなこと、もちろん口に出さないけど。

女の子って大変…。

「かなこも、いつもよりスカート短くしてたし…」

「へー…」

幸か不幸か、話が過激になる前に授業開始のチャイムになった。教師はまだ来ない。二人は話を続けようとしていたが、

「あ、充電器返してこなきゃ…」

あたしはそう言って、その場をうまく脱け出した。

だしに使わせてもらったカズは席に戻っていて、なにやら一人で

物思いにふけていた。

「カズ、これありがと。…なんかさっきより元氣なくなってるない？」
「…そうかあ？」

考えごとをしているカズは、やっぱり修一と兄弟なんだなと思わせる。頬に手をつく様子が似ている。

「ついいま、あんたがカッコいいって話してたのに」

「そりゃあ嬉しいな」

って全然嬉しそうじゃないし。

カズとは長い付き合いのせい、修一と似ている部分があるせいか、けっこう自然と話せる。

「D & D、うまいらしいじゃん」

「だめなんだよ…いざってときになんの言葉も出てこない俺なんか…」

「は？」

カズは言うなり、机に突っ伏した。なんだかわからないけど、落ち込んでいるみたいだった。

ようやく教師がやってきて、自分も遅くなつたくせにさつさと席に着けと怒鳴る。あたしもしぶしぶ自分の席に戻ろうとした。

ところがなぜか、先ほどのようなことないちゃんがいたはずのあたしの席の前に、吉澤早美が立っていたのだ。二人はとくに自分の席に戻っている。

あたしの席は窓際の前から三番目、彼女の席はその二つ後なわけだ。まさか間違えてるとか…そんなわけないよね？

『上野さん』

彼女は小声であたしの名を呼び、机の上を指差していた。自分の体でそれらを隠すようにしながら…。

『あつ…』

あたしはようやく気付いた。机の上にケータイを置きっぱなしにしていたのだ…！

あたしは慌てて戻り、ケータイを鞆の中に滑り込ませた。

「どうした吉澤、早く席に着きなさい」

教師の不信そうな叱責が飛んだ。普段真面目な彼女の行動が遅いことに、クラスのみんなも興味本位に彼女に注目した。ケータイは…どうやら見つからなかったみたいだ。

「すいません、なんでもありません」

彼女は教師をふり返って答えた。少し静かになった教室に、彼女の声がいけず響く。

教師も普段の信頼があるのか、それ以上の追究はなかった。

「ありがと…」

席に戻ろうとした彼女の背中に、あたしは小さな声でお礼を言った。

『うつん』

彼女は一瞬振り返り、なんでもないように微笑んだ。

最悪の展開を免れたあたしは、ほっと一息ついてからこれ以上教師になにか言われないように急いで授業の準備を始めた。

この学校、ケータイははまだ持ち込み禁止。見つけても見過ごしてくれる教師もいるが、この現国担当の教師は厳しく、見つかったら絶対に没収されていた。そうなっていたら、一週間は帰ってこない。

ケータイが一週間も手元にないだなんて、生きていけない…！

思わぬところで吉澤早美に助けられたあたしは、彼女の印象を少し変えた。

いままで彼女のこと、真面目で何事にも無関心なロボットみたいに見ていたところもあったけど…。

全然違う人種かもしれないけど、けっこういい人みたい…。

エピソード5

俺と吉澤早美はほとんど接点がない。

最初からわかりきっていたことだが、その事実には落ち込んでいる自分に気がついた。

出身中学や部活の違いはもちろんどうしようもないが、共通の友人もいなければ席すらいまいち遠い。

趣味も…彼女の趣味はおそらく読書で、いつも文庫本や分厚いハードカバーの本を読みふけている。対して俺はせいぜい推理小説くらいしか読まない。

しいて接点、共通点をあげるならば、二人とも数学が得意で、理科と社会の選択が物理・化学と世界史だということくらいだろうか。だからといって、なにか楽しいイベントがあるわけではない。同じ教室にいる機会が多少、地理や生物を選択しているやつらよりは多い。

彼女は趣味の賜物か国語が得意で、俺は残念ながら苦手。

彼女の苦手科目はなのだろうか…。

一瞬、接点をもつ方法として、苦手科目を教え合うという都合のいいシチュエーションが浮かんだ。だが、そのとき自分が彼女とどんな会話を繰り広げるのか、まったくといっていいほど想像がつかなかった。

彼女はどんな顔をして俺と話すのだろう。

涼しげな感じ？ それとも真っ直ぐなあの目をして、目の前の彼女に氣をとられ、勉強に身を入れない俺を咎めるように見るのだろうか。

そもそも全般的に成績がいい彼女に、苦手科目などないかもしれない。俺の方が勝っている科目はあるのだろうか…？

「早く体育館行こうぜ」

歩のうきうきした声に現実に取り戻され、俺は一人歩きしていた自分の妄想に苦笑した。

「次って体育か」

隣の歩はすでに準備万端に着替えてある。受験対策の教科の合間にあるこの体育だけが、唯一息抜きができる時間だから自然とテンションもあがっているみたいだ。

「ほら早くしろよ」

悪い、といいながら俺は素早く服を脱いだ。体育館に行けば更衣室もあるが、面倒臭くてほとんどの男は教室で着替えて行く。

「今日はサッカーとバスケの方だっけ？」

「そ、確かもう陸上はしないって言ってた気がする」

タカと俊太も一緒に、俺たちは体育館に向かった。

まだ休み時間なので、何人かの男子がバスケをしている。それに交ざって、準備運動のつもりで軽く遊んだ。少し息が切れた。

「じゃあな」

「ああ」

チャイムと同時に、歩とタカが体育館の外に出て行く。二人はサッカーを、俺と俊太はバスケを選択している。

タカはサッカー部、歩は野球部、俺と俊太はともにハンドボール部を引退した身だ。ほんの一ヶ月前までは毎日走り回って体を鍛えていたのに、引退してからというものの運動の機会がまるでない。こうして体育の時間や、昼休みにお遊び程度にやる以外は…。

「しかしたったの一ヶ月でずいぶん体鈍っちゃったよな…」

俊太のしみじみとした言葉に、俺も大きく頷いた。

教師も、3年のこの時期からの体育は受験勉強の息抜きと考えている。2学期の最初の授業で、出席で成績をつけるからサボらないように、そして怪我をしないようにという注意があった。

体育は標準文系の8組と合同で行われる。教師がバスケ経験者をばらけさせ、後は身長順にチームが分けられた。10分後のゲーム開始まで各チームで軽くシュート練習をして過ごすことになった。

俺は同じチームになった小林と一つのボールを交互に使い、軽い調子でシュートを放っていった。

大きな体育館は前後で区切られ、校舎側では女子が平和にバレーボールをしている。

シュートを放ってこぼれたボールを取りに行き、待っている小林に投げ渡す…という動作を繰り返す合間に、俺は彼女の姿を探した。ごちゃごちゃ人が入り乱れた教室にいとあまり思わないが、彼女は背が高い。女の子たちの一団の中で、すらりと抜きん出て見えるのは、実際女の子の中では高い部類にはいるのだろうし、なににより背筋がいいから目をひく。レーナもけっこう高いが、同じくらいかもしれない。もしかしたら歩よりも高いかもしれないと、本人が聞いたら確実に凹みそうなことを思ったりする。

向こうは二人組みで、レシーブ練習をしていた。あっちこっちにいくバレーボールと共に、きゃーきゃーと楽しそうな声が体育館に響いている。彼女も同じクラスの木村さんと組んで、他の女の子と同じように楽しそうにボールを追っていた。

遠くから見る限りだが、彼女の動きは微笑ましかったりどん臭かったりするものではなく、やはりそれなりに様になっていた。そして短パンから覗く脚がきれいだった。

ボールキャッチ、シュート、ハズレ、ボール拾い、小林にパス…。

木村さんがはじいたボールが高く上がって、大きく斜めに逸れた様子が飛び込んできた。

しなやかに伸びた手脚を動かし、彼女は上を向いたままそれを追いかける。

結局追いつかず、ボールは床に転がって壁で跳ね返ってきていた。彼女はボールを拾い、髪を揺らして振り返った。

木村さん向けて……。

俺が見たことがない無防備な顔で笑っているように見えた。

「カズ、行ったぞ」

小林が投げたボールが頭に当たりそうだったぎりぎりで受け止めて、俺はその場で邪念を振り払うように思いっきりシュートした。

3ポイントラインより遠かったが、思いがけずボールはきれいな弧を描いてゴールに吸い込まれていった。

「ひょー、やるなあ」

小林の明るい声に応えるつもりが、俺はつい思ったことを正直に口走っていた。

「くそっ…この距離じゃ遠すぎる…」

「ん？ ちゃんと入ったじゃねーか」

なんのことだ？ と小林が首をかしげた。

「いや、なんでもない…」

女の子の手脚なんて見慣れたものだ。いつの季節にも限らず短いスカートから覗くそれに、ご馳走様と思ったことなど何回もあるし、…… 実際触れたこともある。

笑顔だって、大抵の可愛いと思う女の子はいつも笑顔でいるから、いまさら特別性なんて感じない…。

集合の笛がなった。ボールを返してからチーム分けされた時の場所に帰り、教師からゲーム方式の説明を受ける。4チーム総当り戦でゲーム開始である。

「最初はカズのところとか」

俺のチーム同様、1ゲーム目は見学の俊太がそばにやってきた。

並んで座り、あのチームはだれそれがうまいなあ…などと他愛もなく話す。

ハンドボールとバスケットボールはボールの大きさがかなり違うが、ゲームは少し似ているし、共に素早さとコントロールが必要な点ではバスケ経験者にも負ける気はしない。学校の授業や遊び以外でバスケの経験はないが、俺は割と活躍はできていると思う。俊太も同じくだが。

「カズさあ、さっきからなんかすげえ難しい顔してるけど、どうかしたのか？」

不意に、俊太が心配そうに聞いてきた。

「え…？」

「最近なんか考え込んでいること多いような気がするし。俺の気にすぎならいいんだけど。どっか具合悪いなら無理すんなよ？　なんかあったなら話聞くぐらいならできるし」

最近自分でも、調子がおかしいのは感じている。それは体調が悪いわけでもなく、ただ、心がざわざわして落ち着かない。この変化には自分自身戸惑っていた。

周りにばれてないと思っていたから、俊太の言葉には正直なところ驚いた。この自分でもわからないざわめきをどう言葉にしたらいいのか…。取り繕う言葉を発する前に、俊太の様子から単純に心配かけていたのだと気付いた。

「すまん…。でもいまは俺もなんだかよくわかんなくて……でも、もう少し整理ついたらなんか言うかも…」

俊太は他人の気持ちを察するのがうまく、適度な距離を保ちながら踏み込んだり見守ったりできる、優しいやつだ。

「そっか。カズがそういう風に悩むのって珍しいな。いつもは自分のこととか周りのこととか、客観的で冷静に見ている感じなのに」

「そうか…」

俊太から見ると、俺はそう映っているらしい。俺自身、割りと冷静な人間だろうなって自己分析していたから、間違ってないはずだけだ。

そのとき、ゲーム終了の笛が鳴った。

「もうかよ。試合時間短いなあ。負けねーぞ」

「それこっちのセリフ。……ありがとな」

俺は不敵に笑って言って、最後に素直な気持ちを付け加えた。俊太は照れたのか、何も言わず俺の背中を押した。

彼女のことになると俺はあまり冷静でいられないみたいだ。

見慣れたものが、彼女もとでは見慣れたものではなくなる。彼女のことは知らないことだらけで、俺が普段見ている彼女はほんの一

部に過ぎなくて…それがもどかしくて、なぜか気になる。
なぜだか。

でも、おそらくもう、理由はわかっているけれど。

エピソード6

10月になって変わることといえば制服。

男女共に長袖のブラウスの上にベスト着用をというスタイルを義務付けられ、あとは寒さに応じて自由にブレザーにシフトすればよくなる。

大抵の女の子は可愛くないベストはほとんど着ず、中にカーディガンを着込んでブレザーを羽織った姿になる。カーディガンの色は黒・グレイ・紺・白などといった地味な色しかだめで、派手な物を着込めば没収されてしまいかねない。でも、この制服はブレザーの前ボタンを閉じない方が可愛いので、カーディガンのちょっとしたセンスも重要だ。

あたしもさつそく9月には買っておいたグレイのカーディガンを着込んで登校した。

暑いと感じると、ブレザーの上着を脱いで椅子にかけておく。厳しい教師に見つかりと、ブレザーを着てボタンをかけるとうるさく言われるので、ゆるい教師の授業中だけ脱ぐ。夏服同様の青いリボンと、大きなカーディガンから覗く少しのスカートというスタイルが、野暮つたいこの学校の制服を可愛くカバーしてくれている。ブレザーがもっと可愛かったらよかったのに。

「レーナ、今年はグレイにしたんだ」

「うん。黒と迷ったけど、しょうこが黒にするって言うてたから」
「気にしなくてもよかったのに。へー、Kシヤラのだ、高かったんじゃない？」

「ちよつとね。買おうと思ってたマスカラ諦めたよ」

Kシヤラは女子高生に人気のブランドで、修一に付き合ってもらって買いにいった。あたしにはクールなグレイの方が似合うって言ってくれたから決めたんだけどね。

「なかいちゃんのカーディガン姿って、ちっちゃくて可愛くて子リスみたい」

なかいちゃんとあたしの身長さは15cmくらいある。なかいちゃんに抱きつきながら、あたしは彼女の頭をよしよしと撫でた。なかいちゃんは着こなすのが難しいベージュ色のカーディガンを着て、まるで森の小動物のようだ。

「うひゃ、レーナくすぐったいし。ね、レーナが買おうとしてたマスカラってモアの新作？」

「うん、そう」

化粧品は手ごろな値段の使い勝手がいいブランドの物が人気だ。

「あたしも同じシリーズの新しいライナー買いたいと思ってたんだ、今度買いに行かない？」

「行く行く」

あたしたち三人はじゃれあいながらそんな話で盛り上がった。受験の魔の手は刻々と迫っているけれど、それより楽しい話題の方が断然いい。

しょうことあたしは中学校3年からの友達だが、すぐに打ち解けて仲良くなった。しょうこはなにかと鋭くきれいで、なにか行動を起こすときは中心になることが多くて、本当に頼りになる。なかいちゃんとは高校からの付き合い。茶目っ気たっぷりで素直な性格、女の子らしい愛らしい容姿。あたしは全部羨ましく思っている。

「俺もまぜて！」

急に近くにいた男の子の団が絡んできた。

さっきのセリフはいまにも飛び掛ってきそうなうっちーだ。

「だめだよ。うっちーが女の子になったらいいけど」

なかいちゃんがべーっ舌を出して応えた。うっちーもあたしたちと1年から同じクラスで仲がいい。

「うっちーならカッラ被ればなれるんじゃない？ 目がくりくりしてて、化粧も栄えそうだし」

しょうこもそんなことを言う。

「レーナちゃん、ちよつと髪わけて下さい！」

うつちーはあたしの長い髪を指して真剣に言った。おかげで場の雰囲気はどつと明るくなった。

「歩、それだけじゃなくて大事なものも切り落さないとな」

タカがさらにからかつて、さらに男の子たちからはニヤニヤした笑いが、女の子たちからは控えめな苦笑いが加わる。

「それはだけは勘弁だわ」

男の子たち、タカとカズと井上くんが、次々にうつちーをからかう。彼はすっかりいじられキャラが定着していた。あたしたちもよくうつちーの野球部ならではの坊主頭を触らせてもらったりして、ノリが良くていじりがいいのあるキャラだと認識している。

でも、一緒にいると楽しいんだけど、恋愛には発展しないだろうキャラ。普段の行動からなんとなく思うに、彼はなかないちゃんのとが好きなんだろうとわかる。けれど、望みはないだろうな…。

「いいなータカは。今度はどの席を選ぶつもりだよ」

話題はいつのまにか席替えのことになっていた。そういえば帰りのSHですって担任が言っていたっけ。朝、タカと吉澤さんと目が悪くて前にいたいって人たちに希望をとっていた。

「いまと同じところ。マジでいいところだよ、寝ていてもばれないし」

「俺もあの場所動きたくねえ…。なあカズ」

「ああ。でも2連続も運はなさそうだな」

席替えは一ヶ月の学校生活のテンションを左右する、地味に大切なイベントだ。後の方の席でなかないちゃんやしようこのそばになるのが理想だけど、その確率は数学嫌いのあたしでもわかるくらい低い。理系クラスだから男子の割合が多くて、全然関わったこともないようなキモい男子に四方を囲まれてもしたら絶望的…。いまの席は、正直あまり話せる人がいない。せめて話せる男の子とか、なかないちゃんやしようこ以外でも女の子のそばになれたらいいんだけど…。

SHで担任の諸連絡が全部終わった後、すでに決まっている数名を除いたみんなは平等にくじを引いた。

一人ずつ引いていくので、徐々にクラスの雰囲気騒がしくなっていく。落胆の声や、友達のそばになれた喜びの声が入り乱れていた。

すでに引き終わったしようにことなかいちゃんがそばに来て、それぞれの感想をもらす。

「最悪、一番前になっちゃった。端っこだからまだ救いだけど」と、しようこ。

「でもあたししようこの斜め後だよ。ちょっとは話せるじゃん！」と、なかいちゃん。

「ほんと、よかった」。レーナもあたしの左隣かなかいちゃんの右隣だったらしいのに」

「あたしだつて行きたいよ……」

あたしの番までようやく回ってきて、選んですぐに番号と黒板を確認した。残念ながら望んだ場所ではなかった……。

「どうだった？」

「全然違つとこだった。24番」

「そっかあ。でも後の方だね、よかったじゃん」

しようこは残念そうにしていたけれど、あたしのためにすぐに明るくフォローしてくれた。

確かに後の方だからまだましだけど、あとは周りが誰になるか……。そこであたしは気付いた。24番：窓際から2列目の、後から1つ前……。

吉澤早美の隣だ！

担任の合図で、ガタガタという机を動かす音が教室を支配した。「やったー」とか、「またお前の前かよ」などといった会話が飛び交う。

あたしも机の上を整理して、そう長くない距離の移動のために動

いた。この騒ぎの中、机を動かす必要のない彼女は悠々と次の補習の準備をしていた。

この間のケータイ事件（？）以来、あたしは彼女の印象を少し変えていた。いままでは真面目で優等生でいい子ちゃんで…と、どこか否定的に見ていた部分もあった。それ以外に彼女のことを知らないし、いままであたしが親しくしている友達とは全然タイプが違うから、いろいろと驚くことが多かったんだけど…。

「上野さん」

彼女が隣にきたあたしに気付いた。彼女もむさい男子よりは、あたしが来てよかったと思ってくれているといいな…。

「よろしくねー」

「こちらこそ」

彼女はふんわり微笑んだ。あの時の笑顔と似ていた。いつも涼しい顔をしているってイメージだったけど、こんな風に普通に笑う子なんだと改めて思う。

左隣以外のメンバーを確かめると、右斜め後にまあまあ仲がいい女の子がいて、右隣、前、後はあまり話したことがない男子で…。

「カズ」

左斜め前に、カズがいた。

「いまさただけどよろしく」

あたしが声をかけると、彼は振り返って短く応えた。

気のせいかな？　なんだか普段のカズと違って、落ち着きがないように見えたけど。

すぐに補習開始のチャイムが鳴り、あたしも教科書やノートを準備した。隣の彼女をそっと伺うと、片肘についてノートをめくる綺麗な手と横顔が見えた。

彼女は美人だと思う。でも、特別美人だというわけではない。

ただ、彼女が纏う潔い雰囲気　他人に媚びたりしない強さが、彼女を特別に見せているような気がして、とても　惹かれる。

突然、わかった。

あたしはそんな彼女に憧れているのだと。

エピソード6（後書き）

ようやく3人が少し近づきました。
ここまで読んで下さった方々、本当にありがとうございます。

エピソード7

幸か不幸か。

俺は吉澤早美の前の席になった。

ここは望んでいた接点で、望める場所……なのだけれど……。

漠然と、これからも彼女を後から眺めることになるのだろうと思っていた。そのためには彼女より後の席にならなければならなかったのだが、そんな運はないだろうと本当に思っていた…。

だからこれは、いい運…なのか？

幸は近くの席になれたこと、不幸は彼女の目の前の席になったこと。

これから一ヶ月、授業をともに受けることができるのだろうか……受験生っ…！

自分でも驚くほど、俺はうるたえていた。

俺が普段見ていたように、彼女が俺の後姿を見ている…かもしれない。

そもそも彼女は俺に興味なんてないはずだと言い聞かせてみたり、少しでも背筋良く見せるようにと意識してみたり、アホか俺は…と自意識過剰さに呆れてみたり。

彼女の隣はレーナだった。レーナと吉澤早美　全然タイプの違う二人だが、席が隣になってから、ときどき他愛のないことを話しているようだ。レーナから質問したり話し掛けたりすることが多いときどき聴こえる会話の中から、レーナが思いのほか彼女に興味があるように感じ、俺は少し意外に思った。

「ね、吉澤さんっていつも朝早いよね。何時ごろ来てるの？」

「7時45分くらいかな。バス通なんだけど、込んでるバスに乗りたくなくて」

彼女の姿を見ることは叶わなくなってしまったが、代わりに彼女

の落ち着いた声が聴こえる。かすかな笑い声を聞く度、俺の心臓は別の生き物のように反応してしまう。どうにもできないので早く慣れろと自分の心臓に言い聞かす。

いまは休み時間で、レーナは珍しくないちゃんやしようこと絡まずにそこにいた。そう言う俺も、多少不自然だろうが自分の席から動かずにいた。

「あたしは家けっこう近いからいつもギリギリ。あたしならできるだけ長く家で寝てたいもん！」

「実は…ここで寝たりもするんだ。みんなが来るころには騒がしくなってくるから起きちゃうけど…」

俺は自転車通学だから、比較的登校するのは遅い。彼女が朝早くから来ているなんてまったく知らなかった。後の机で寝ている彼女……想像がつかない。

「おい、カズ。あれお前の番だぜ」

教室の隅にいる歩が大きな声で俺を呼んだ。歩が言うあれが何かも、歩の周りの様子でわかった。

「おお、いま行く」

9月は俺と歩の席の近くに集まるが多かったが、俊太とタカの席が近くなつたいま、集まる場所は自然とそこになっている。

まあ、これじゃあ盗み聞きだもんね…。

「カズが…」

俺が渋々立ち上がって歩き出したとき、俺の背中にその言葉が届いた。

一瞬、ぎくりと動きを止めてしまったが、明らかに俺を呼び止めたものではないとわかった。単なる話題の一部だろう。

でも、俺の話題か…？

何も聞いていない振りをして目的地に向かったが、すぐにでもUターンして戻りたかった。

俊太も言っていたけど、言い訳するわけじゃないけど、最初は今

つと冷静に彼女を観察できていたはずだ。観察して　いろいろなことが気になりだして、泥沼にはまってしまった。

タカや俊太や歩と馬鹿話するよりも、気になること…。

「これ、マジいい。絶対いい」

歩が大絶賛しながらそれを俺に差し出した。タカの持ち物で、ジヤンケンをして俊太へ、そして歩、次は俺の順番で、それが回ってきた。

待ちに待っていました！　と思うけれど、少々複雑…。

メジャーな書店の袋に入ったそのエロ本を、俺は慎重に抱えた。まだチャイムは鳴らなかったが、そろそろ授業が始まる時間に近づいていて、俺は集まりから抜け出し、念願かなって自分の席に戻っていった。ちよつと後ろめたい荷物と共に。

「あ、カズ」

席に着く直前に、レーナに呼び止められた。

「なに？」

自分なりの評価では、普通に応えられた。レーナを振り返ると、視界の隅に彼女の姿が映った。おそらく、俺を見ている。

「中学校のときあたしらのクラスだった春香っていたじゃん、苗字なんだっけ？　ど忘れしちゃって」

なぜレーナがそんな質問をするのかわからなかったが、俺はその答えを知っていた。

「あんたがちよつと付き合ってた子」

それは言わなくていいだろ！　レーナっ！

「鈴木原だよ…」

俺は力なく答えるしかなかった。

俺が勝手に気まずい思いをしている間に、レーナはそうだったと嬉しそうに笑いながら彼女に向かって頷いていた。

「それがどうしたの？」

俺は椅子に座りながら投げやりに聞くと、思いもよらぬところから返事が返ってきた。

「小学校のとき、ピアノ教室が一緒だったみたいなの」

声の方にゆっくり視線を移すと、そこにいるべき人がいた。少し切れ長な目と視線が合った。

言葉が、出ない。

「そうなんだって。春香ってほんとピアノうまかったもんね。吉澤さんは続けてるの？」

「ううん、あたしは小学校でやめちゃった」

彼女の視線はレーナに奪われ、レーナは彼女が少し恥ずかしそうに笑う様子を正面から見るようになった。

教師が来て、チャイムが鳴って、俺は英語の授業のために机の上を準備した。

このもやもやした感情を、どうしたらいいのかわからない。叫びたいような、泣きたいような、情けないようなよくわからない感情。授業が始まる。若い教師は前回の構文の復習をしてからいつものように生徒をランダムに当て、長文を訳させて行く。すらすらと完璧な答え、日本語的に少しおかしい答え、めちゃくちゃな答え

教師の訂正が入り、重要な熟語や構文を黒板に書き写してさらに説明が入る。

俺の英語の成績は特別良くはないが、英語の構造はそれなりにつかめていて、嫌いではない。長文の和訳の予習も、わからない単語を少し調べておけばそれなりに対応できる。だから英語の時間はそれほど苦労しない代わりに、いつも退屈だ。

「あなたはー…難しく考える必要はない。そう、それは、それを、するのは、道の、道端の…小石を拾うくらい、とても簡単なことだ…。もしかしたら、あなたも気付いている…はずだ？ あ…、気付いているのではないか、えーっと…」

運悪く長い部分を当てられたクラスメイトの一人が、間延びしながらたどしく和訳をしている。その声は秋の暖かな陽射しを浴びる教室に、確実にだるさと眠さを呼び込んでくる。

俺はここで何をしているのだろう。

なぜ吉澤早美を、こんなに気にかけてしまったんだろう。
それにしても、あいつは訳すのが遅すぎる。

冷静な俺に戻りたい。俺はこの席で、これからどうしたらいいんだ
ろう…。

これから俺は……。

「後を、見てみる。あなたのすぐその…そこにあるのは…答えだ
…？ ほんの少しの勇気を出せばいいだけ、だ。」

「山崎くん、御苦勞様。そうですね、ここは……」
教師がいつものように直訳、スマートな訳を言う前に、俺は自分
なりの言葉で訳していた。

そこに答えはある、勇気を出して振り向け
そうか…そうだ…、俺は運良く、彼女の前の席になったのだから。
俺は次のことを願った。

早く授業が終るように、レーナが次の休み時間もそこにいるよう
に、俺のうろたえぶりが彼女にバレないように。

どうか彼女が、俺と楽しそうに話してくれるように…。

エピソード8

チャイムの音に、あたしははっと我に返った。

正確には、浅い眠りから覚めた…。

教師が黒板を熱く指して、これは絶対覚えておくよう…みたいなことを言っている。よだれが垂れてないか、あたしは急いで周囲を確認した。

寝るつもりはなかったんだけど、思いのほか陽射しが気持ちよくて寝ちゃったみたい…。

「以前からいつておいたけれど、明日の1時間目の授業の最初に単語テストをします。しっかり準備しておいてください。範囲はTEXT365の90ページから121ページまでです」

教師の発言に、教室内がブーイングで満ちた。あたしももちろん盛大に加担していた。

一ページに単語は10個ほど書かれている。80点以上取れなければ再テスト、それでも80点以上取れないと、テストに出た単語をひとつにつき10回書いてこななければならない。サボると、評価点が5点下がる。勉強するのも面倒臭い。でも、書きとりはもつと面倒臭い。でも、評定点で5点下げられるともつと大変なことになる。

今日は修一とデートなのに…。勉強する時間あるかな…。

とりあえずやらなければならないことは確かなので、あたしはしぶしぶそのTEXT365を鞆に入れた。

「レーナ」

「なに？」

カズに不意に名前を呼ばれ、あたしは鞆から顔をあげた。斜め前のカズは真剣な顔をして、何か言おうと…….したらしい口元が、徐々に笑いに崩れていった。

「寝てたろ。痕ついてるぞ」

「えっ…！」

あたしは慌てて、カズが指差している額を手で探った。感触ではよくわからない。

「うそ、マジで？」

あたしの慌てた声に反応したのか、吉澤さんがこっちを向いた。彼女はカズみたいに笑ったりせず、状況を伝えてくれた。

「うーん、少し赤くなってる。心配しなくてもすぐ消える程度だよ」

「ほんと！？　よかった…」

あたしは笑ったカズをひと睨みして、わずかな慰めにと額を指でなでた。

「なんだよ、親切じゃん」

「笑ったくせに…。ところで用件なんだっただの？」

カズは一瞬、微妙な表情をした。気付いたのは、最近カズの様子が少し変だったからだ。

「や、ちょっと。鈴木原といまでも連絡取り合ってるのかなと思って」

「うっん、もう全然。なに、メアド知りたいの？　それは知ってるよ」

「それはいい、どうなのかなって思っただけ」

カズは曖昧に笑って、サンキューと言いながら前を向いた。なんだっただけ？

次の時間は生物で教室を移動しなければならなくて、あたしは準備をしてないちゃんとしてということ学習室に向かった。

放課後、あたしは学校近くのコンビニで時間をつぶしていた。

約束の時間をいかほどか過ぎたころ、修一がシルバーの何とかって車の運転席から手を振っているのが見えた。立ち読みしていたあたしは、急いでコンビニを出てその助手席に乗り込んだ。

「遅いよ、急がないと15分からの間に合わないじゃん」

「まだ大丈夫、絶対間に合うから」

修一は鷹揚に笑って、車を発進させた。会って一発目に文句を言っってしまったけど、あたしはその横顔に満足してシートベルトを締めた。

今日はずっと見たかった映画を見に行く予定だ。10月になって大学も始まり、バイトマニアの修一は土日のどちらかは必ずバイトしている。この車のローンを早いうちに頑張って返すそうだ。ちょうど彼のサークルのイベントも重なって、平日に時間をとるしかなかったのだ。

「修一、来週の土日もなんかあるの？」

「来週？ 来週は日曜がバイトで、土曜は予定ないよ」

「来週の土日、ピュームでREXのイベントあるんだって！ 一緒に行こ！」

「いいぜ」

修一は人好きのする顔で笑う人だ。カズと似ているけど、人を包み込むような暖かさは修一ならではのものだ。修一は感動屋で、素直で、優しく、明るくて、ときどき厳しい。

「いいけど…玲奈は一応受験生じゃん、大丈夫なの？」

あたしはうつと詰まった。

「…受験生だけど、受験生はデートしたらだめなの？ ちょっとくらいいいじゃん」

「もちろん、俺とのデートはちゃんとして下さい、切羽詰ってきたらもう少し考えるけど。でも、他の時間はちゃんと勉強してるのか？」

修一はあたしのためを思っ言ってくれているのだとはわかる。

あたしだって、修一と同じ大学に行きたい…。

「しやなきやいけないとはわかってるけど、なにをしたらいいかわかんない…。焦りだけはあって…」

受験生 半年以上前から受験生だけど、実感はいまいちわかな

くて、時間だけが過ぎてしまう。

「まずはさ」

修一が優しい声で話し始めた。

「やるべきことをやりなよ。授業はもういままでの復習だろ？ それをしつかり受けるだけでも違うし、出された課題とか、近いテスト勉強とか」

修一は運転しているから前を向いていて視線は合わない。けれど、真剣にアドバイスをしてくれているのは伝わった。

「大丈夫だよ、玲奈はやるって決めたらのめり込める子だから。俺も邪魔しないようにするし、息抜きは手伝うし、愚痴も聞けるぞ。地理なら得意だから、ちよつとは教えられるかもな」

「うん…」

あたしは鞆を漁って単語TEXT365を取り出した。

「いきなりやる気だしたな。酔わない？」

「平気。明日単語テストあるの。ちよつとでも覚えちゃう」

「映画は？」

「見る！ だってこれどうしても見たかったもん」

「はいはい」

修一は子どもをあやすように言って、あたしの頭をなでた。ちゃんと応援してくれる人の存在を噛み締めながら、あたしは映画館に着くまでに10個の単語を覚えた。

「そういえばさ、カズは勉強してる？」

あたしは気になっていたことを尋ねた。いまの時期、他のみんながどれくらい勉強をしているのか、知る手段がない。聞いても、「全然していない」と言われるだけで、本当のところどうなのかわからないのだ。あたしは本当にしていなかったのだけど…。

「まあ、前よりはしてるかな。あいつもエンジンかかりきってないみたいだけど、ぼちぼち勉強してるよ」

「そっか…」

最近のカズはちよつと変だ。カズとは仲が悪くないし割と話す方

だけど、今日なんか変な絡み方をされた。やたらと振り返りながら…。

とりあえず、この映画は素直に楽しもう…勉強は、帰ってから…！

「あ」

「あ、カズ」

次の日の朝、あたしは学校の玄関でカズと鉢合わせした。普段なら特別驚かないが、今日は驚くの理由があった。いま時間は、まだ8時前だ。

「こんな時間にどうしたんだよ。お前いつも来るのギリギリなくせに」

「カズこそ、似たようなもんじゃん。あたしは、単語覚えなきゃって思ってる…」

結局昨日、やる気は出たものの、映画で疲れて早く寝てしまった…。自分の意志の弱さに凹みながらも、せめて朝に勉強しようと思いい、なにかと誘惑の多い家を早めに出てきたのだ。

「カズも勉強するつもりだったの？」

カズはほんの少し間空けて、イエスと答えた。

修一が言っていた通り、カズはもう受験生つてことに自覚持つてるんだろうな…あたしも負けてられないや…。

自然の流れで、あたしたちは一緒に教室に向かった。いつもより30分早い朝の学校は、全然騒がしくなくて、まるで別の場所みたいだ。

「静かだね…」

「ああ。この辺の教室、まだ誰もいないみたいだな」

あたしたちの声と、上履きと床がこすれる音だけが響く。

吉澤早美　彼女はいつもこんな空間にいるのだろうか。独りぼっちになったような、でもどこか爽やかな気分になれるような静かな空間に。

あたしたちの教室、3年3組には予想通り彼女がいた。両手を組んで、そこに顎を乗せて、まるで彫刻のように机の上を見つめていた。

「おはよー吉澤さん」

あたしが声をかけると、彼女はあたしたちに気付いて、少し驚いたように目を見開いた。

「おはよう。珍しいね、こんなに早い時間に」

って、吉澤さんの方が早いけどね。

「今日の単語テストの勉強しようと思って」

彼女は納得したように頷いた。机の上にあるのは、あの冊子だ。

「昨日これの勉強した？」

「うん、少し。いまは確かめ中」

余裕っぽい。

いくら朝早く来たからといって、あたしに時間が無限にあるわけではない。その言葉に触発されて、あたしはさっそく残りの単語を暗記しにかかった。

ふと思った。

彼女が綺麗に見えるのは、余裕があるからなんだろうな…と。

「おはよ」

カズが少し遅れて席に来て、吉澤さんに向かって言った。

「おはよう」

彼女は微笑んで応えた。

その後、カズと少し話をしていたみたいだけど、あたしは必死だったので気にかけていなかった。

ただ、カズも勉強するって言うていたくせに余裕みたいだな…とは思った。

エピソード8（後書き）

なかなか話が進みません。未熟ながら頑張りたいと思います。

エピソード9

俺が勇気を出した瞬間。

彼女と初めて朝の挨拶を交わし、ほんの少しだけ話をした。

特に面白い内容があったわけでもなく、彼女が答えてくれやすそうな質問をいくつかした。「今回自信ある？」とか、「どれが出ると思う？」とか、テスト前の平凡な会話だった。

昨日はレーナをだしにしようと思って、結果的には一人で空回りをしただけに終わった。リベンジすべく、彼女が一人にいるであろう朝早くに登校して、レーナと鉢合わせしたのは予想外だったが、おかげ一番難関だった声をかけるタイミングを、レーナに便乗して突破できた。

俺から話し掛けられたとき、彼女は一瞬構えてわずかに意外そうな表情をしたが、すぐに丁寧に応えてくれた。

俺は家族からも、あまり物事に動じない人間だと言われている。可愛げがないだとか、淡泊だとか。

でも、吉澤早美を前にしたら、本当に、めちゃくちゃ緊張した…。それでも、一歩踏み出してしまえば驚くほどの達成感と安心感が得られた。いままでぐずぐずしていた自分の勇気のなさに反吐が出る。席替えをしてから、3日を無駄にした。

ようやく。やっと。それでもう、彼女が後ろにいても落ち着いて授業を受けることができそうだ。

「はい、ペンを置いてください。隣の人とテストを交換して、赤ペンを用意してください」

英単語テストも、難なくクリアできただろう。昨日それなりに勉強しておいたし、彼女と少し出そうな単語を予想していたのだから…。

教師が解答を配り、俺はそれを見ながら隣のやつのテスト用紙に

やxをつけていった。最後に名前の横に68と書いて、用紙を戻してやった。返ってきた俺の用紙には94と書かれていた。

「80点未満の人は明日の放課後学習室で再テストです。サボらないように。サボったらどうなるかはわかっていると思いますけど」
教室内の空気の一部が、鉛を取り込んだように重くなった。そしてだいに騒がしくなっていく。

今回は出題範囲も広くて似たような熟語も多かったから、半分くらいは再テストだろう。歩、タカ、俊太の様子をここから伺うと、表情が暗かったのでおそらくみんなだめだったのだろう。

後の方から大きなため息が聞こえた。俺が振り返ると、案の定レーナの残念そうな顔に出くわした。

「なによ…カズはどうだったの？」

俺は相手を下手に刺激しないように、用紙の点数を書かれた部分をチラ見せした。

「えー…朝全然勉強してなかったくせに」

「昨日ちゃんとやったの。いくらなんでもあの時間で全部やるのは無理だから」

レーナは恨めしそうに俺を見た。

リベンジに向けて余計な不安を持ち込みたくなかったので、俺も昨夜頑張ったのだ。逆恨みは勘弁してもらいたい。

「何点だったんだよ？」

「70点…」

「へー」

俺は少し驚いた。あの短い時間にしては、頑張った方だと思った。

「はあ…再テストって同じ問題じゃないのがほんと面倒臭いよ…もうやだー…」

レーナは頭を抱えて机に突っ伏した。どうやら本当に落ち込んでいるらしい。

「でも、40分やっただけで70点も取れるなんてすごいと思う」
彼女が、そんなレーナに声をかけた。

「あたしは何回も書かないと覚えられないもん。たぶんんだけど、再テストでもこれとこれは絶対も出ると思っただよね。このページからは特にtakeの熟語とか…」

「え、どれどれ？」

レーナを励まそうとしてか、彼女はヤマや覚えるポイントを伝え始めた。内容は的確だ。

「これと、たぶんこのページと…」

俺はそのままに彼女に話し掛けようとしていたところだったのだが、それはしばらく叶わないようだ。最近、レーナに助けられているのか、邪魔されているのかよくわからない。俺はにできることと言えば、恨みのこもった視線をレーナの横顔に投げ返すことだけだった。

そうしている間に教師は全員のテスト用紙を回収し、静かに自習をするようにと言い添えて教室を出て行った。

教師が完全にいなくなったクラスは、自習するやつもいれば喋り出すやつもいる。彼女とレーナは解答用紙とTEXT365を代わる代わる見ながら、ああだこうだと話している。

俺は黙って二人を 正確には彼女を眺めていた。あまり不躰にならないように気をつけながら。

目は、切れ長な二重。鼻はちょうどいい高さ。唇はほんのり赤くて、分厚すぎずに俺好み。髪はさらさらで、当たり前だけど以前より少し伸びている。

化粧は一切していない。

でも、綺麗だ。

「この辺りを1時間もやれば完璧だよ」

「そっか：そうだね、ありがとう！ 今日絶対勉強するよ」

レーナは急にやる気になって、単語を覚え直し始めた。この乗せられやすさは昔から変わらないなと思いつながら、彼女がいまフリーになったことによつやく気付いた。

よつやく訪れた機会を逃すまいと、俺は慎重に口を開いた。

「吉澤さんは、もちろん合格？」

彼女は俺を見て、まずは頷いた。

「合格だよ。予想したところけっこう出たからラッキーだったね」
勝手なイメージでは、彼女は合格しても無感動な態度を貫いているイメージだった。けれどそれはハズレで、少し得意そうに笑ったのは意外だった。それにがっかりするより、親近感を覚えた。

彼女は、俺が勝手に思い込んでいたほど人間味がないわけじゃない。自分を自尊しすぎたりも卑下しすぎたりもしていない。いつもスツと背筋を伸ばしていたり、一人でもくもくと仕事をこなしていたり、周囲に対して無関心に見えるような涼しげな態度でいる俺が見てきた彼女の一面も、無邪気に笑ったり喜んだり、人に親切にしたりする一面も、どちらも彼女の普段の姿だ。

「ちなみに何点だった？」

「98点。useに何を思ったか、dをつけてちゃった」

意外な抜けっぷりに、俺は思わず笑った。

「ちよつと意外。吉澤さんて、なんでも完璧そうだから」

俺の言葉に、彼女は心外そうな表情を返した。

「そう見える？ そっちの方があたしにとっては意外だよ」

彼女のいつも涼しげな目元が、含みを帯びて細まる。何も知らない俺を、もちろん俺のただの勘ぐり過ぎだが、面白がるような笑顔だった。

また、心臓がどくんと鳴る。ただ以前より、どこか冷静な高鳴り方だった。

不敵な笑みを浮かべることも意外で、でも意外も何も俺は彼女のことを知らなすぎだからそれは不適切な表現かもしれない。

昨日までは、話し掛けることもできなかった臆病者のくせに、一度近づいたら欲が出たらしい。一つ一つのこと新鮮で驚きで、その都度距離を感じる。

「吉澤さんて英語は得意？ 数学と国語が成績いいのは周知の事実だけ」

俺はたくさんの感情を押し込めながら彼女に話かけた。

「うーん…英語はあんまり。こうやって地道に覚えたりするテストはいいんだけど、長文とかが特に苦手かな」

「へー。他に苦手な科目ってあったりするの？」

あのときの妄想が、ほんの少し現実に近い。

「あるよ、実は化学が一番嫌い。有機とか全然だめ……。そう言う湯本くんは？」

彼女に話かけられた達成感、安心感の次にやってくるのは、貪欲な感情だ。

彼女のことを知りたい。

彼女のすべての言動が、俺だけにとってはまったく意外でないくらい。

他の誰も知らない彼女を、俺だけが知りたい。

彼女は優しいから、俺の質問には素直に答えてくれる。そして会話を築く上で、俺にも質問を返してくれる。

「俺はね……」

俺のことを知って欲しい。

そして俺のことを見て欲しい。

自分自身から生まれてくる複雑な感情に、俺は胸が苦しくなった。彼女の前にいる俺は誠実でありたいくせに、同時にとても凶暴でもある。

始めは小さな疑問に思っただけだった。面倒臭い副学級委員長をしている理由、その席を選ぶ理由、綺麗な空気を纏っているように見える理由。いつのまにか目で追うようになって、それでもただの観察者だったはずなのに…。

もう遅い。

俺は人から、冷静かつ欲求が薄くて淡泊に、それらが相俟ってクールにも見られるらしい。その評価はあながち外れていないと思うけれど、実は一度スイッチが入ってしまったらなかなか止められないだなんて、誰が知っているだろうか。淡泊に見えるだけで、全

然そんなことはない。

スイッチは入ってしまった。

彼女を手に入れたという貪欲なスイッチが。

エピソード10

ようやくあたしは、受験勉強にエンジンをかけることができたみたいだ。

再テストもクリアできたし、家でも修一とのメールの頻度も抑え勉強するようになった。内容は得意な生物がほとんどだけど、少しずつ英語のコツもつかめてきた。地理は修一が家庭教師のつもりになって、演習テキストを作ってくれることになった。

特に苦手な数学と現代文は……なかなか手がつけられない。

いまの時間は学活、もとい自習の時間。席を移動したり喋ったりと一部は騒がしいけれど、黙々と勉強している人もいる。あたしもこの間までは、しょうこやなかいちゃんの席に行ってお喋りに興じていたのだけど、いまは数学の復習課題に向き合っている。

吉澤さんは黙々とペンを動かしていた。彼女の机の上を見ていると、そう言えば古典の問題集数ページと、化学のプリントが課題で出されていたなとあたしは改めて思い出すのだ。

斜め前の席のカズも、後姿からなにやら迫力を感じる。今月末締め切りの数学の課題を、カズはとくに終らせたらしく、自分で新しい問題集を買ったらしいのだ。もともとカズは頭がいいけど、いままでは面倒臭いことにならなければいいという受身の姿勢だったのに。

「ね、ちよつと数学聞いてもいい？」

数学をあたしに聞くわけがないので、例え主語がなくてもすぐに誰に話し掛けたかはわかる。化学の参考書を片手にプリントを解いていた彼女は、ふと顔をあげてカズを見た。

「これってどうやって解くんだっけ」

カズはやっていった問題を彼女に示したのだが、あたしには目を背けたくなる数式が並んでいた。

「これは…kを移行して、左辺と右辺をそれぞれyで置くやつ」

「ああ、わかった。交点で場合分けしたらいいやつか」

吉澤さんは見た直後に解き方を言い、カズも最後まで聞かずに納得していた。

うわぁ…レベルが違う。

カズはもう一つの問題も彼女に問いかけ、「これは倍角の公式が」だとか、「こっちの判別のしかたの方が効率がいい」だとか、もう少しあたしの数学の理解度がよかったらためになるだろうことを話し合った。

「ありがと、すげえ参考になる。化学やってたのにごめんね」

「ううん、気分転換になった。本当は化学なんてやりたくないけど、家じゃあもつとやる元気出せないから」

そっか、彼女もあたしと同じように、科目にムラがあるんだ……っていうか数学が気分転換になるってどうなんだ…？

彼女の手元のプリントを覗き込んでいたカズは、にやつと笑った。「残念なお知らせだけど、間違ってる」

彼女は困った顔をしながら問題を睨む。

「嘘、どこ？ えっと……ちなみに正解は？」

「逆になってる。こっちがクロロホルム」

彼女も間違えたりするんだなってぼんやり思った。

あたしはそんな二人を眺めながら、あることに気付いた。最初は気のせいかなとか、そんなに勉強するのが好きなのかなって思ってたけれど、どうやら違う気がする。無駄に付き合いが長いので、カズについて知っていることは多い。

カズは普段割りとクールで あたし的には無愛想なだけだと思うけど 仲のいい男の子たちと盛り上がっていても、どこか一歩外からみんなを見ているような感じだ。修一が行き当たりばつたりなのに対し、カズは物事に慎重なタイプだ。だから、あまり他人に気を許さないというか、女の子と話していても、楽しそうに笑っているけど、絶対に中までは踏み込ませない。いつもは、そんな感じ

なのに。

カズが楽しそうに彼女と話している ……。
あたしは突然気がついた。

もしかして カズは吉澤さんが好きなのかもしれない。

そう思っで見ると、席替えしたところの不可解なカズの行動に説明がつき、あたしは一人で大いに納得することができた。

意外にも思っただけれど、なるほどと思っただ。なるほど思っただのは、カズを見直したからだ。

きつと彼女は、一部の女の子からは真面目すぎるのかつまらないとか、いい評価を得ていないかもしれない 実際あたしもこの間までそう思っっていたから。

でも、化粧もしていなくても、ダサイ制服を規定通り着ていても、彼女は綺麗に見える。

実際美人だけど、それだけじゃなく…。

彼女のように、人と違う行動をすることは、とても勇気がいる。みんなと同じ格好、同じ行動をしないとすぐに浮いてしまう。一度そうなってしまうえば、いまあたしたちが生きている小さな世界は、とても生きづらい場所だ。

あたしはそれが怖い。みんなと同じではないとレッテルを貼られ、一人になることが、こんなにも怖い。

それでも、一人でいることができる彼女に強い憧れを抱く。彼女はとても綺麗で、あたしにはない勇気を持っている。

だから、そんな彼女を好きなのかも知れないカズを、あたしは改めて好意的に見ることができた。

自分の手が止まっていたことによようやく気づき、自分の問題集を見下ろしてあたしは閃いた。

「吉澤さん。この問題の解き方、教えて欲しいな」

「いいよ、どれ？」

そのときのカズの表情から推察すると、たぶんこの予想はハズレていない。こんなことくらいしか、あたしの勘は当たらないのだけれど、自信はある。

彼女の丁寧な説明、時折入るカズの茶々……。

彼女が妹になるかも　そんな行き過ぎた妄想をして、あたしはこっそりと笑った。

「レーナ、どうしたの？　最近えらく真面目じゃん」

しょうこが驚いたように言ってきたので、あたしは苦笑した。いつものあたしを知るしょうこからすれば、あたしが勉強しているなんて雪でも降るんじゃないかって思っても当然だろうけど。

「ちよつとはやらないと、あたしみんなよりやば過ぎだから」

「えらーい」

なかいちゃんがあたしをキラキラした目で見つめた。でもきつと、しょうことかの方がまだ勉強していると思うけど。

しょうことなかいちゃんとお弁当を食べるいつものお昼休み、あたしはそんな話題の中に身を置いていた。いままでのやる気のなさからすれば、確かにあたしの変わりようは驚きだろう。

「でも全然ちよつとだよ、生物くらいしかまともにしてないし。周りが吉澤さんとかカズだから、影響されて少しくらいやらないやつて思っ」

「そうなんだ。あの二人、席近くなってからけっこう話すようになったみたいだね」

なかいちゃんの言葉に、あたしはぎくりと笑みを強張らせた。

恋の噂話は滑降のネタ。興味深い情報は喜ばれる……けれど、あたしはさつき気づいたことを誰にも話すつもりはなかった。たぶん、うまくいったらいいなとかズを応援する気持ちがあったからだろう。「二人とも頭いいからね。よく数学とかの問題のこと話してるよ。二人の会話はハイレベルすぎだけど、あたしもたまに便乗して教えてもらったりするの」

「湯本くんは理系科目全般いいもんね。吉澤さんは国語と数学はほとんどいつもトップだし」

「はい、
すーい」

しょうことないちゃんがそれ以上詮索をしてこなかったの
で、あたしは安心して卵焼きを頼張った。この間の模試の結果がもうす
ぐ返ってくるだろうから、上位者氏名の張り出しで二人の成績を確
認してみようと思った。

お弁当を食べ終え、あたしたちは購買の横の自販機に飲み物を買
いに行った。4時間目終了のチャイムが鳴った途端、購買は戦場に
なるらしい。自販機のあたりもかなり激戦区になるらしいけど、い
まの時間はもう人だかりもなく、あたしたちは余裕で目当ての自販
機にたどり着いた。

「あれ？ みんなで体育館行くの？」

自販機の前で今日の気分の飲み物を悩んでいたとき、なかいちゃん
の明るい声が聞こえた。

振り返ると、カズを含んだ例の4人が、階段を降りてくるところだった。

「バスケしようと思って。なかいちゃんは何飲んでんの？」

いつものごとく、真っ先に竹本歩が反応した。

「いちごミルクだよ」

「いいねー、いちごミルク俺も好き」

気持ちのベクトル　彼、うつちーの気持ちのベクトルに気付くのはあたしだけではないだろう。しょうこも、たぶんないちゃんも気付いていると思うけれど、そんなことはまったく気付かないというように振舞っている。

しょうこはタカと井上くんと、今度ある球技大会のことを話し始めた。男子はサッカー１チーム、バスケット３チームになるだろうって聴こえる。

あたしは飲み物を買ったその場所を動かず、甘い液体を喉の奥にやり過ぎしながらそれらを傍観していた。

うつちーとひとしきり会話を終えたなかいちゃんは、カズに話しかけていた。

「ゆもくんって頭いいよね。羨ましいなー…」

「特別よくもないよ、いつもヤマが当たって運がいいだけ」

ほら、カズは笑みを浮かべているけど、どこか表面的だ。なかいちゃんに話し掛けられた男子なんて、大抵だらしない顔になるのに。「じゃあそのヤマ、あたしにも教えて欲しいな」

最高の笑顔にプラスされ、気のせいかな、気のせいではないだろうけど……なかいちゃん声に、より甘さが加わった。

「ん…教師が解説した問題は、ほとんど同じものは出ないけど、類似問題は必ずでて、参考書のステップBから6割は出る…そんな感じかな。要領よくやれば、7割はとれるよ」

今日は、他人のベクトルに気付く　とことんそんな日なのかも知れない。

なかいちゃんはカズに、「もちろん！　今度のテストのときにでも…」というような返事を期待していたのだと思う。なかいちゃんの可愛さは周知のことだし、本人も自覚している。どう振る舞えば男が喜ぶのか、たぶん彼女はよく知っているのだ。

それなのに、カズは望む回答をしなかった。カズにとってなかいちゃんは、他の男子ほど興味がない存在らしい。

今日のカズの様子に気がつかなければ、あたしも信じられないと思っただろうけど……。

「おーい、休み時間終っちまうよ」

なかいちゃんの興味を得られなかったうつちーが、大声で男の子たちを呼んだ。しょうこやなかいちゃんと話していた3人は、それじゃあとあたしたちに手を振って体育館に走っていった。

しょうこが風が冷たいから早く戻ろうと提案し、あたしたちは教室に戻った。その間、あたしはなかいちゃんをそつと観察していた。なかいちゃんは、カズのことを好きなのだろうか…？

でも、なかいちゃんは普段からいろんな人に笑顔を振りまいてい

るから、カズが特別ってわけではないかもしれない……。

あたしたちはよく、恋愛話もする。大抵は彼氏持ちのあたしがかわかれ、他の二人に聞いても、ここしばらく特に好きな人はいないと返されていた。

その言葉を信じるしかないけれど、本当のところはどうなのかわからない。

ただ、もしないちゃんに協力してと言われたら…。

あたしはどうするのだろうか。

エピソード11

俺と吉澤早美は、以前の接触のなさが信じられないほど話すようになった。

この学校は1年から2年に上がる時にクラス替えがあるだけで、1年半も同じクラスで過ごせば、クラスの大半の人間のたまかなこととはわかるようになる。それでも、気の合う人間とはどんな仲良くなるが、一度無意識に距離をとってしまった人間とは、とことん関わらなくなる。中学校のようにグループ学習があるわけでもないので、例えば席が近くなっても、わざわざ新たな人間関係を築こうとは思わない。

俺もそう思っていた。

相手が彼女でなければ。

彼女と俺が新たに築いた関係は、席の近さと俺の積極性がもたらした産物だ。

例えば、お互い席から離れた場所で出会ったとき、俺の周りにはいつものメンバーのうちの誰かはいるし、彼女は一人か木村さんと一緒にいる。俺は自分に連れがいることに一瞬ためらい、おそらく彼女はそんな俺など気にも留めていない。俺から話し掛けなければ、彼女はあの空気を纏ったまま歩き去ってしまう。

席と俺の意志　そのどちらか一方で欠けてしまえば、まったくつながりはなくなってしまうほど儚い関係。

悲しい現実だが、彼女は俺に興味がない。

いまはもう10月の下旬。11月になってしまえば、条件の片方がなくなる可能性は極めて高い。受験も影響して、席が近いという理由もなければ、ただのうざい男に成り下がってしまう。

彼女から話し掛けてもらえるようになるためには、彼女が俺を見られるようになるためにはどうしたらいいか。

以前から1ランクアップしたいまの俺が抱える悩みだった。

そんな俺の思いなどこれっぽっちも知らず、今日も空は晴れ渡っている。

「天気もいいし、いよいよって感じだよな。腕が鳴るね、絶対優勝してやる！」

「サッカーのくせに腕鳴らしてどうすんだよ」

半袖短パンで何も動かなければ肌寒く感じる今日このごろ、高校生活最後の球技大会が行われようとしていた。

歩が肩を大きく回しながらやる気をみなぎらせているが、タカのつつこみ通りいささかの外れな動きだった。俺と俊太も手首など特に入念に、来るべき戦いに備えて準備運動をした。

「今年の3年の優勝賞品は学食の食券万円分だってよ。準優勝は消しゴム40個」

体育委員の俊太情報に、一瞬場は沸いたが……。

「……ん？ クラスで割ったら」

「250円ちよつとか。微妙すぎる……」

歩の言葉を引き継いだ俺は、正直な感想をもらした。つい、豪華賞品というフレーズに反応してしまったが、よく考えたら毎年『豪華賞品』とは名ばかりだったと思い出したところだ。

「それにしても2位も消しゴムってどうなんだよ」

「受験生だからあったらあったで使うだろって理由らしいぞ」

俊太の説明に、タカは複雑そうに唸った。どこにいつても、この肩書きからは逃れられない。

「賞品なんて関係ねーよ、燃え尽きるのみ」

「やる気あるのはいいけど歩、怪我すんなよ」

この時期、手を怪我するほど残念なことはない。

俺はこの最後の球技大会も、せいぜいいい息抜きになればいいと考えていた。

一体誰の思惑なのか、今日は朝の挨拶しか言葉を交わしていない。

試合の会場が違つのでそれから姿も見えていない。正直なところ受験勉強の圧迫以外に、吉澤早美との関係の現状を打破できない不満、純粋な思いとは裏腹な自然な欲求不満も溜まっているのだ…。

「バカヤロウ！」

突然、歩が大声を発した。

「この球技大会はなあ、勉強で輝けないやつ最後の晴れ舞台なんだよ！　ここで輝けないやつは受験もために決まってる。タカ、絶対サッカー優勝するぞ」

「…おお」

歩の勢いに押されて、タカはとりあえず頷いた。タカの頷きを確認し、歩は同じく驚いている俺たちに向き直った。

「カズ、俊太、お前らはほどほどに頑張れ。一回戦で負けてよし」

「わかつ…ん？」

言われた内容を、俺はしばらく頭の中で反芻して……。

「お前、一人で美味しいとこ持つてくつもりだろ！」

俊太のつつこみの方が1テンポ早く、結局準備運動の最後はいつものじゃれあいになった。

球技大会は男子はサッカーとバスケ、女子はバスケとバレーが目で、各クラスから4〜6チームが参加し、それぞれの競技で優勝チームを決める。3組は協議の結果男子がサッカー1チームとバスケット2チーム、女子はバスケ、バレーそれぞれ1チームで臨むことになった。俺が参加する男子バスケは14チームが出場し、4回勝てば優勝となる。

体育館に大きく張り出された日程表から、俺はたち一通りの動きを頭に叩き込んだ。自分たちの試合が男子バスケの第一試合で、その後バレーとサッカー、そして女子バスケと男子バスケを応援に行ったらいい。ちなみに初戦で負けたら、朝一で自分の出番はなくなる。

第1試合は10時から行われる。それまでの時間を俺たちはチー

ムでボールを回してウォームアップをして過ごしていた。

「頑張つてね！」

「優勝してね！」

俺が所属する3組Aチームは俊太、バスケット部の小林、残りの二人もバスケット経験者と野球部という、運動部所属経験のあるメンバーで構成されている。客観的に見ても、優勝を狙うとしたらこのチームだろう。

しかし、クラスの仲のいい女の子たちから笑顔で声をかけられても、俺はそのときまでなにが何でも勝とうという思いはなかった。ここぞという場面で、いまいちやる気が沸いてこない自分。いつもこんなものだが、やはり少し淡泊な自分が恨めしくなる。

別の要因もある。そのことを考えていたから、俊太からのパスに一瞬反応が遅れた。

「あっ……！」

ボールは俺の跳躍も虚しく頭上を通り過ぎていった。ボールは第2体育館への通行口の方へ吸い込まれ、激しいバウンド音が狭い空間に鳴り響いた。

「すまん、カズ」

「大丈夫」

俊太だけのせいではないとわかっていたので、俺は内心申し訳なく思いながら小走りでボールを追った。

ボールが転がった先に歩いてくる人影が見える。

「すいませーん」

ボール取ってください……と続けようとして、その言葉を飲み込んだ。

俺の数m向こうでボールを拾うために屈んだのは　俺がずっと探していた人だった。

こんなことで、いちいち胸が苦しくなるなんてガキっぽい。初め

ての感情とは言わない。そこまでウブじゃない。けれど、いままでのものなんて単なる錯覚だったと思ってしまえるほど、これは特別な感情だ。

「はい」

「…サンキュ」

彼女が差し出したバスケットボールを、俺は両手でしっかりと受け取った。

いま彼女は一人だった。こちらはあまり使われないほうの通行口だったので、他に人影はなかった。

「カズ、バックス！」

遠い後ろで俊太が俺とボールを呼んでいる。

俺が取るべき行動はただリターンすること。「じゃあ」って一言発すること。彼女の前から走り去ること……。

頭と心が戦って、勝敗はすぐに決着がついた。

「俊太のノーコン！」

浅ましい欲求に勝てず、俺はボールだけを向こうに戻した。

彼女と話がしたい。ほんの少しでも、同じ空間にいたい。俺のこ

とを、見て欲しい。

俺の手から飛んだボールは、ちょうど1バウンドして俊太の手の中に絶妙に収まった。ボールの行方を最後まで見届けてから、俺は彼女に話し掛ける話題を探しながらゆっくり振り返った。

彼女は女の子の中では背が高いけど、当然俺よりは小さい。

まずは「バレエは勝てそう？」でいいだろうか。

「湯本くんて」

俺が口を開こうとしたそのとき、彼女が俺の名を呼んだ。

「バスケ経験あるの？」

挨拶以外に、彼女の方から話し掛けてきたことは初めてだった。

「ないよ。学校の授業くらい」

俺の返事の声はひっくり返っていたかも知れない。震えてはいなかっただろうか……自信がない。冷たい返事だと思われたかもしれない。

ないと勘繰って、慌てて言葉を足す。

「でも、ハンドボール部だから」

だから、の先が続かなかったのは、俺のことを真っ直ぐ見つめてくる彼女に見とれていたからだなんてあまりに情けない。

「そっか。授業で見たときすごく綺麗な動きだったから、てっきり経験者だと思ったの」

彼女から話し掛けられたことですのでに驚いていた俺は、その言葉の意味に気付くのが遅れた。

いまなんて言った……？

俺の動きが、綺麗……？

彼女の口から、彼女が俺を見ていたという事実があることを知る。遠くに彼女の笑顔を感じながら齒がゆい思いでバスケットをしていたあるとき、彼女も俺を見ていた瞬間があったのかもしれない。

たとえ俺からの視線が彼女からのそれよりも100倍多くても、その一瞬があったと想像できただけで、俺は震え　心の底から歓喜した。

「ありがとう………すげえ嬉しい」

歓喜のあまり溢れそうになる色々な思いや行動を押さえ、俺は彼女に笑いかけた。照れくさくて視線をはずしそうになったが、そんなもつたいないことは絶対するまいと意地でも彼女を見つめた。

「ハンドボールって、ちゃんとした試合は見たことないんだけど、バスケットと似てるんだ？　確かに井上くんもうまいなって思った」

俊太の登場で俺のテンションは2割ほど下がったが、別の事実にも気がついた。

彼女は俺と俊太がハンドボール部だということを知っていた。俺はそこまで仲良くないクラスメイトが何の部活に所属しているかなんて知らない。特に優秀な成績を残して表彰されたわけでもない。些細なことでも、ほんのわずかな可能性でも、期待してしまう。

「俺のチーム、運動部のやつ多いんだ。だからけっこういけるかも」
数分前とはまったく違う気持ちで、俺は彼女の前に立っていた。

何が何でも、絶対に優勝してやる…！

同じクラスのチームは自分の試合が被っていない限り、応援に詰め掛けるのが原則である。試合数が多いほど、俺は彼女の視線の先にいれる可能性が増える。極めて単純な増加関数。

「応援してる。頑張ってる」

彼女から欲しかった言葉と……ずっと見たかった笑顔だった。

「ありがとう！」

一気に火がついた。中学生のような現金な自分の変化もどこか楽しめた。

体育館に戻った俺は遅いと文句を言われたが、素直に謝ってから自分のやる気を4人に伝えた。一番やる気がなかった俺からの発言ということでも多少驚かれたが、どうやら4人の気持ちもうまく動かせたようだ。

転がる。

うまく。

力が沸いてくる。

いよいよ球技大会の始まりである。

エピソード12

あたしは基本、朝は苦手。

しかも家は高校にけっこう近いたため、もう少しなら大丈夫と油断しがちになる。最近受験意識が高まってきたので、朝学習には遅れなくなっただけと……。

今日あたしは完全に遅刻してしまった。

「……受験生だというのに。センター試験は朝からあるのですよ。そんなことでどうするのですか。だいたい……」

生徒指導室の鬼婆の永い説教を、あたしはうんざりしながらも慎ましそうに聞いていた。そうしていれば少しは早く解放してくれるのではないかと期待を込めて。

「それじゃあ、これを担任の先生に渡して、サインをもらって。もうすぐ第一試合が始まる時間だけど、あなたそれには出ないの？」

「あ……はい」

しょうこからのメールで、自分が参加する初戦の開始時間は聞いている。その心配してくれるなら説教の時間をぜひ減らして欲しかった。結局、けっこうな時間を拘束された。

「そう。ならもう行つていいわよ」

「……失礼しました」

指導室を出て、あたしはそのまま教室に向かった。まずは荷物を置いて、着替えなければならぬ。

今日は不運だ。そもその遅刻の原因は、ケータイの充電がうまくされていなくてアラームが鳴らなかったからだ。始業時間には5分ほど遅刻しただけなのだが、3年の球技大会のため担当の教師や運動向きの教師は体育館に行っていたのか、いかにも運動と遠がな。あの鬼婆に掴まってしまった。

それに……今日は朝学習の時間をチームで球技大会のためのバス

ケの練習をする約束だったのだ。

平謝りするしかないけど、それが一番気が重い…。

シンと静まり返った教室であたしは誰の目も気にせず、大急ぎで服を着替えた。

「ごめん、ほんとごめん！」

第一体育館のギャラリーにクラスの女の子たちの一団を見つけ、あたしは謝りながらかけよった。どうやらクラスで一番始めに行われる男子バスケの応援のために詰めかけているようだった。

「遅いぞレーナ」

「朝学習ないからって気い抜いたでしょ」

あたしはひたすら、しょうこ、なかいちゃん、そして同じバスケットチームの二人に頭を下げまくった。

「いいよ、別に怒ってないよ」

「そう、あたしらの試合には間に合ったんだし」

「ほら、Aチームの応援しよ」

「…うん」

別にみんな、最初から本気で怒っているそぶりなんて見せない。最初の言葉も、からかうみたいな感じだ。すぐに許してくれる。でも、それが空気を悪くしないための表面上のことなのか、心から許してくれているのかはわからない。

そんなつまらないことをいちいち疑ってしまう自分にも嫌だ。

「あ、始まる」

しょうこの言葉に、あたしは振り返った。

ちょうど試合開始時間になり、審判と出場メンバーがコートの中央に並び始める。

ここは二階なので見下ろす形で眺めていると、こちらのチームにはカズを含めたクラスの運動神経のいいメンバーがそろっていることがわかる。雰囲気も華やかだし、向かいあった相手チームよりも断然強そうだ。活躍してもしなくても、なにかと女の子の目を引く

チームだろう。

「がんばって〜」

なかいちゃんの応援の声もいつそう元気がよくて可愛いらしい。やはり、あたしの勘は間違っていないのだろうか…。

あたしは探すまでもなく、吉澤さんの姿を見つけた。少し間はあいているが、あたしたちのグループのすぐ側で、木村さんと並んで同じようにコートを眺めていた。

相変わらず綺麗な横顔だ。涼やかな目で下を見つめている。

彼女の視線の先にいる人は誰だろう…。

試合が始まり、最初からAチームの優勢は見えていた。バスケット部の小林くんを中心に、うまくパスが流れ、素早い5人の動きが相手チームを完全に圧倒している。

小林くんがシュートを決め、相手ボールになる。パスを受けた相手チームの男子がゆっくりドリブルをしながら歩き始めたところに、カズが回り込んだ。相手が慌ててパスを出そうとするが、カズの方が早かった。

ボールを奪って、ドリブルして、そのまま走りこんで、シュート

…！

カッコいいじゃん！

「きゃー！」

「早い！」

チームのテンションも、ギャラリーのテンションも一気に上がった。

コートではカズが小さくガッツポーズしている。あたしの周りの女の子たちも、黄色い歓声をあげている。

その後もいくつか得点されたりしたが、すぐに倍以上反撃し、どんどん得点差はついていく。完全に、この試合は3組の勝ちだろう。あたしは周囲のテンションから浮かないように、同じような声をあげていた。一番気になる彼女を盗み見ると、みんなより少し大人しめだが、Aチームが得点を重ねるたび笑顔になっていた。

あたしはカズにもっと活躍してほしいと思った。

応援者の目はやっぱりボールを追う。カズが活躍すればするほど、きつと彼女の視線はカズに行く。

彼女にカズの雄姿を見てほしい。そして……。

難なく第一試合を突破した男子バスケットAチームは、周囲にプレッシャーを与える存在になった。次は女子バレーと男子サッカーがほぼ同時刻に始まる。話し合いの結果、サッカーの方が長時間になるので、先に第二体育館でバレーを応援することになった。

女子バレーは6人のメンバーで、女子の少なさゆえの特例で一人はバスケット掛け持ちである。

あたしたちは第二体育館のギャラリーで同じようにコートを眺めていた。先ほどのような独特の熱気はなく、ときどき平和に応援の言葉をかけるだけである。

「あ、お疲れさま」

途中、そのギャラリーに男子バスケットAチームのメンバーがやってきた。

「すごかったよ」

「圧勝だったね！」

その途端、応援そっちのけで先ほどの試合について楽しくおしゃべりが始まる。

「いや、相手が弱かったただだよ」

「そんなことないよ、絶対優勝できるよ！」

やはり一番ストレートに活躍していた小林は、女の子たちにおだてられて実に嬉しそうだ。普段はクラスの男子なんて子どもっぽいつて言っているしうこも、ニコニコと楽しそうに詰め寄っている。親しい男子が活躍する姿を見て、気持ちがときめくのがわからないわけではない。修一がいるにしたって、別のことを気にしていなければ、あたしもきつと同じようなミスターな反応をしていただろう。

隣の勢いに少しうんざりしながら試合を見てみると、ちょうど吉澤さんがサーブを打つところだった。

女子バレーと女子バスケットは授業を受ける体育館が違っているので、誰がうまいのだとかはわからない。ただ彼女は、ずっと立っているだけでうまそうに見えるし、実際打ったサーブにはキレがあつてナイスプレーだ。けれども、あいにく試合状況は思わしくない。3セット制だがすでに1セット取られていて、このセットも点差が開いている。

今度はカズを盗み見ると、女の子からは一線を引こうとしている様子が見えた。コートの中を、何気ない振りをしながら見ている。こうして一度気付いてしまうと、本当にベクトルはわかりやすい形で浮き彫りになってくる。彼の目はずっと彼女を追っている。ボールを真剣に追う様子とか、点を取って素直に喜んでる様子とかを見ている。

あ、いま彼女が綺麗な笑みを浮かべていたけど…カズは見ていたかな？

「ゆもくんがあんなにバスケットうまいなんて思わなかったよ」

「まあ…ちよつと頑張ろうかなって思つて」

残念ながら、女の子たちはカッコよくて十分に活躍したカズも放つておかない。彼はなにかいちゃんに愛想笑いを浮かべながら失礼にならない程度に応えていた。

結局女子バレーは2セットを連続で取られて負けてしまった。あたしたちはそのままサッカーの応援に繰り出そうとギャラリを下りていった。

「第一試合お疲れさま」

あたしも一言くらいと思つて、カズに声をかけた。

「どうも。あれ、朝いたっけ？」

適当に返事をしたカズは、ふと首をかしげた。痛い過去をついてくれる…。

「いない。遅刻したの。第一試合には間に合つたよ」

あたしは誰のためにこんなに心を砕いているのかと、勝手に恨めしく思った。

「はは、そりゃ災難だったな」

「うん、まあ。……バレー、残念だったね」

笑って言うので、あたしはちよつと意地悪そうに返してやった。

「そうだな」

カズは一瞬ぎくりとしたみたい。もちろんあたしは影ながらの応援者なので、それ以上つつこんでカズを困らせるつもりはなかった。あたしたちはバレーの女の子たちと合流して「お疲れさま」、「惜しかったね」などと言いながらグラウンドに向かった。外は風が強くて砂埃がひどい。みんな口々に文句が出た。

今日あたしは、ずっと傍観者になるつもりで周囲を観察していた。カズはずつと彼女に話し掛けたそうなんだけれど、別の女の子に話し掛けられたり、男子に絡まれたりと忙しそうだ。彼女はすぐ斜め後ろにいるのに……かわいそうに。

すでに始まっていたサッカーは、3組が1点を先取していた。女の子の応援のテンションは再び上がる。

現金なものだなあと思いながら、あたしも声を張り上げて応援した。そのくらいすれば、寒さも気にならなくなった。

男子サッカーも初戦を突破し、いよいよあたしたちの試合。

あたしは中学校の時バスケットで、けっこう頑張ったのだけれど……相手が悪かった。相手チームにはバスケットが2人もいて、それでもかなり粘ったけれど、体力の差で負けてしまった。高校に入ってからほとんど運動しなかったから……。

「あっさり負けちゃったね」

「ほんと。もう少し朝にパス回しの練習しておいたらよかったかな」
「なかいちゃんが無邪気な言葉に、あたしはひっそり傷ついた。本人は気付いていないのか、それともわざと言っているのか……。暗に、あたしの遅刻を責めたように聞こえるのは被害妄想だろうか。」

見極めはとても難しい。

「ごめん、あたしが遅刻なんかしたから……！」

聞こえない振りをすることもできず、あたしはもう一度謝った。

「うっん、レーナのせいじゃないよ。相手が強過ぎたんだもん」

「あたしもシユートはすまくつちゃったしね」

しおれているあたしを慰めるように、二人から言葉がかけられる。
やはり、行き過ぎた考えだったのかな……。

友達といえるのはとても楽しい。でも、ときどきとても疲れたり面倒臭かったり、辛かったりする。

「男子バスケットBチームは負けちゃったらしいよ」

「やっぱり。じゃあAチームとサッカーだけかあ」

「次はAチームの試合があるよ」

「応援しがいがあるう」

元気な二人の後をあたしは気まずい気持ちのまま付いていった。

もともと3人というグループは難しい。2人ペアにならなきゃいけないときとか、狭い通路を歩くときとか　　こういう組み合わせになるかはその場の流れだったり、話し合いだったり、とにかく一瞬微妙な空気が流れる。なかいちゃんとうこだったり、しょうことあたしだったり、あたしとなかいちゃんだったり……。今日はあたしが朝出遅れたせいもあって、しょうことなかいちゃんはずつと一緒にいて、あたしは2人の付属品になりがちだ。

2人ともずいぶんこの球技大会を楽しみにしていたみたいだけれど、あたしはその理由を知らない。ただの推測だけど、なかいちゃんはずを好きなんじゃないかとか、しょうこもそれを知っているんじゃないかとか、あたしだけ仲間はずれなんじゃないかとか、色々と思ってしまう。

単なる被害妄想かもしれないけれど……。

結局3組の女子は両チームとも一回戦負け。これからの仕事といえば、男子チームの応援だけだった。

こうなったら……とことん応援してやる。もちろん男子バスケットを、

カズを　彼女とカズを…！

第一体育館に足を踏み入れたとき、視界の隅に映った光景に、あたしは大切なことを忘れていたことに気付いた。

いま彼女に好きな人はいないのだろうか…？

エピソード12（後書き）

最近更新が遅くて申し訳ありません。できる範囲で頑張ります。

エピソード13

頑張るべきときに頑張ってみるのも悪くない。

理由は邪だけれど…。

第二試合を15分後に控え、俺と俊太は更衣室で水分を取っていた。体育館は飲食禁止でここ外でしかドリンクが飲めないのも、他のクラスのやつらもぼちぼちいる。

残念ながら俺たちとサッカー以外は一回戦負けしてしまった。しかし、これでかえって俺の単純な計画は実行しやすくなった。サッカーと試合時間が被らない限り、応援のために彼女は第一体育館のギャラリーにいる可能性が高くなる。

「前の試合が早く終わったから、練習していてもいいってよ」

小林からの伝言に、俺たちは軽くシュート練習でもするつもりで重い腰をあげて更衣室を後にした。

一回戦は圧勝できたが、次の二回戦からが重要だ。一度は別チームを下してきたチームが相手なのだから。

油断はできない…！

体育館に足を踏み入れたそのとき テンションが激下がりする場面を見つけてしまった。

吉澤早美が 男という。

体育館のギャラリーに上がるための階段の前で、2人は向かい合って話していた。俺の位置からは彼女の表情はわからないが、相手の男の表情はよくわかった。実に楽しそうな顔をしている。

あれは確か…。

男の名前を思い出そうとして、俺はしばらく考え込んだ。同じクラスになったことはないが、見たことがある顔だ。理系。おそらく隣のクラスの……。

「誰だっけ」

「ん？」

俺の独り言に、俊太が反応した。俊太にしてみれば、急に立ち止まった俺を不審に思っただろう。

「誰が？」

いつもの俺だったら、「なんでもない」と笑って返していたかもしれない。想いがバレてしまうかもしれないから。ただ、もう少しのところでは思い出せないもどかしさと、聡い俊太に余計な心配をかけたくないという思いが絡み合って、結局俺は素直に疑問を口にした。

「あの…吉澤さんと話しているやつ、誰だったかなあって思っ
て。顔は見たことあるんだけど。名前思い出せなくて、急に気になっ
ちゃって」

自分でもわかるほど、随分言い訳めいた口調になってしまった。
言葉を足すほど、余計に怪しく聞こえる。

俺はそつと俊太の表情を伺った。俺の本心を見抜いたかどうか
んの反応も見せない俊太は、なんでもなしのように答えた。

「ああ、佐倉だよ、4組の佐倉悠介」

「あ…そうか」

直接関わったことはないが、何度かすれ違ったことはある。そう
いえば選択授業の世界史では3組に来ていた。

「お前と、どういう知り合い？」

彼女とどういう知り合い？ という言葉を飲み込んで、俺は踏み
込んで尋ねた。相手の名前がわかってからいつそう込み上げてくる
感情を抑えようと、静かな声を出そうと努めた。

「ん、2年のとき委員会で一緒になって、ちよつと喋るようにな
ったくらい」

「どんなやつ？」

「話してみるといいやつだよ。いい意味でよく人に構われるやつ
ていうかさ」

俊太の丁寧な説明を聞きながら、俺は気付かれないであろうこの

位置からもう一度佐倉をまじまじと見た。背は高いけれど、どこかひよろつとしている。笑った顔が歩とは違った意味で可愛いらしく、俺は女装が似合いそうなやつだとだと勝手に結論付けた。

「なんでそんなに気になるんだよ」

「え……っと、吉澤さんていつも一人でいるイメージだし、男と話しているのって珍しいなと思って……」

俊太のもっともなつつこみに、取り繕った言い訳が口について出る。

「そうか？ けっこう吉澤さんと佐倉が話しているところ見るけど？」

思わぬ反論を受け、俺はプチパニック状態に陥る。

「そ、そうなのか？ 俺はいつも木村さんと一緒にいるところしか見たことなくて……。あ、いつもっていうか、たまに……」

もはや自分の言っていることに収集がつかない。いつも彼女を見ていることを、なにげに暴露してしまっている。

落ち着け俺……！

何を思っているのかまったく読めない俊太は、さらに続けた。

「あの2人、一時期付き合ってたんじゃないかって噂もあったし」「は……」

俺は一瞬呆けた。

言われたことをようやく理解できた途端、素手で心臓をつかまれたような痛みが走った。

まったく、予想していなかった事実だった。

お互い高校3年生なわけで、これまでに付き合った人がいてもなんらおかしくない。むしろ、そのことをお気楽にも考えてもみなかった自分がどうかしている。俺だけが彼女の魅力に気づいたのだと、何の根拠もないうぬぼれを抱いていた。

彼女が誰からも好かれたいはずがない。

そしていまさら気付く。

いま現在、彼女に好きな人がいるかもしれないという現実。

いまさら、心が締め付けられる。

「ごめん、追いつめたかったわけじゃないんだけど」

その俊太の言葉に、俺は少し落ち着きを取り戻した。

「えっと……その……」

言い訳を考えている間に発せられた次の言葉に、俺は一気に緊張した。

「吉澤さんのこと、好きなんだろ」

張り詰めた空気が2人の間に走った。

顔が火照るほどの気恥ずかしさが込み上げる。と同時に、不思議な安堵感も生まれてきた。

もう、言えばいい。

俊太なら大丈夫と、誰かに背中を押されたような気がした。誰でもない、俺の判断だろうけれども。

「……ああ」

俺がやっと絞り出した声で肯定すると、その場の空気はもとに戻った。

不思議な気持ち。誰にも言わなかった想いを知られてしまったけれど、誰にも言えなかった苦しさから解放された。

いまの俺は、ものすごくほっとしている。

俺は彼女のことを好きなのだと、単なる自己満足の妄想ではなかったのだと、変な実感が持てた。

「そっか、やっぱりな。ごめんな、無理矢理聞き出すまねして」

俊太が心底申し訳なさそうに言うので、俺は逆に笑みが込み上げた。俊太はこういうやつだ。真剣な想いを汲み取ってくれて、からかうようなまねは絶対にしない。

「いや、言えてすっきりした。ありがとな」

いつものように和む笑みを見せた俊太は、俺よりも照れくさそうにその話題を続けた。

「意外だけど、なんか嬉しいな。そっかそっか、カズにも春が来そうなのか」

「なんだよそれ。……でも、なんでわかった？ やっぱり俺、わかりやすい？」

誰にも言わなかったし、誰にも気付かれないように気を張っていた。

でも、その苦労は無駄だったのだろうか…？

「そんなことないよ。俺だってさっきの会話がなかったら確証持てなかったし。ただ、さっきのカズはすげえ殺気立っていたし、動揺しすぎだったから」

「確かに……」

そこは否定できない。醜い嫉妬心を隠し切れなかった。そして、本当に愕然としてしまった。

「さっき言っていたことは本当なのか？」

「あくまで噂だし、そんなにすぐ知れ渡っていた噂でもないし…。その手の噂ってごろごろしているわけじゃん。俺も確証はもてないけど…。実際、よく佐倉と吉澤さんは仲はいいみたいだよ。ほら、1年のとき同じクラスだったみたいだから、元2組のやつに聞いたらもう少しわかるかも」

元2組 咄嗟に脳内に浮かんではレーナだった。すぐに、俺の周りには元2組のやつが多いことに気付いた。レーナ、タカ、歩、しょうこ、なかいちゃん だが、これ以上誰かに知られたくないという消極的な思いもある。

「ぼちぼち…探してみる。あんまり、知られたくないから…」

信用していないわけではない。でも、まだこの不安定な気持ちを、言葉にしてこれ以上誰かに聞かせたくない。

「だから俊太、お願い、しばらく黙っていてほしい」

俊太はゆっくり頷いた。

「カズから何か言ってこない限り話題に出さないよ。まあ、彼女持ちの俺としては、もしかしたらなんか相談に乗れるかもしれないし」「先輩、頼りにしてるぜ」

「うそうそ！ 俺なんか全然恋愛相談とか無理だから！」

「いやいや、先輩、頼みますよ」

佐倉という余計な登場人物も現れたが、心強い味方も得ることができた。俺の狭い視界に映った彼女の世界が、もう少し広がっていきような気がした。

まだまだ、俺は彼女のことを知らなさすぎる。

もっと知りたい。

けれど、きつと知るほど苦しくもなるのだろう。

「おい、ちょっとは体動かしておかなくて大丈夫なのかよ」

なかなか動き出さない俺たちを小林が呼びに来た。第二試合の開始時間がすぐ迫っている。

「悪い、すぐ行く」

急いでチームメイトが集まっているところまで走る間に、観戦者も続々と集まってきていることがわかった。彼女も、佐倉と別れてギャラリーに登り、クラスの女の子たちと合流したようだ。

「もしかして、急にやる気になったのはそのせいだった？」

シュート練習を始めたころ、思い出したように言った俊太を、俺は気まずくて無視した。

「はい、もう言いません。あんまり力になれないだろうけど、応援はするからな」

俺は何か言う代わりに、絶妙なパスを俊太に出した。俊太は滑らかにボールをゴールに運んで、周囲の拍手を買った。

残りの数分を俺たちは体を暖める程度に動いた。

「ところで、次の相手ってどのチームなんだ？」

やる気の割にいまいち状況を把握していない俺だが、近くにいた別のチームメイトに聞くと、シードのチームだと教えてもらえた。

「4組のやつらだよ。あつちは初戦だからどんなチームかはよくわからないけど、バスケ部のやつは2人いるから要注意だな」

4組……。

どつという因果か、相手チームにはあの佐倉悠介がいた。

噂だから、嘘かもしれない。本当でも、過去のことだ……。どちらにしたって、あいつは彼女と仲良さげに話していた。彼女の、視線の先にいた。

それだけで、俺は嫉妬できる。

もしかしたらあの場所で、彼女は3組を応援しながら心の中で佐倉を応援するのかもしれない。

自分の豊かな想像力を呪う。俺は思いのほか、その噂に打撃を受けているようだ。

胸が苦しいというのは、こういうときに使うのか。

「カズ …」

俺の雰囲気を感じたのか、俊太が落ち着けよと肩を叩いてきた。

直後、試合開始の笛が鳴る。

心は全然落ち着かないけれど、頭は冷静だ。体は、心の叫びと頭の指令とを受けて勝手に動く。

子どもみたいな競争心 でもこの試合、絶対に負けられない。

俺とは全然タイプの違う佐倉の顔を睨みつけた。相手には、単なるやる気の表れだと思われればいい。

俺の想いは変わらない。

だから、どのみち答えは彼女の中にしかない。

けれど、これは単なる意地だ。

エピソード13（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません。どうしても忙しい次期で……。時間をみつけて更新していきたいと思いますので、よろしくお願いします。読んでくださる方々、本当に本当にありがとうございます。もしよろしければ感想、評価等頂けたら幸いです。

エピソード14

彼女に好きな人がいたら、あたしはとても自分勝手なことを願っていたことになる。

彼女が男子と仲良さげに話している姿を見て、あたしは自分の中のとんでもない思い込みと矛盾に気がついた。

彼女はいつも一人でいるイメージだから、男子とも話したりする機会もほとんどないのだろうと、勝手に思い込んでいた。もつと言え、吉澤早美は誰かがそばにいるよりいないほうがいいと思う人なのだと、一人でも平気なくらい自立している人なのだとよってそこら辺の男なんかに興味はない人なのだと、あたしの中で偏った方向に神聖視されすぎていたのかもしれない。

たぶん、彼女の自分の世界を持っているような潔いイメージは、悪く言えば他人に関心がなさそうに見えるのだ。

ここ最近の彼女とあたしの距離は劇的に縮まった。まだ苗字をさん付けで呼ぶくらい遠い関係だけれど、なんだか悪くない距離感だ。彼女のことは知り始めたばかりだけど、彼女の飾らないナチュラルさには早くから気付いた。だから彼女に、普通に普通に普通という言葉の方も変かもしれないけれど好きな人がいても、全然おかしくないと思えたはずなのに……。

彼女にとって随分失礼な思い込みだ。かつ、随分力ズ彙蹙な思い込みなわけで、いろいろなところであたしの思いは矛盾していた。

あたしはずるい。

あたしの中の弱いあたしが、彼女を特別な存在だと思っていたがつている。あたしとは全然タイプの、人種の違う人それが彼女が一人であられる理由だと思いたかった。

あたしが、彼女のようになれるはずがないから……。
「どうしたのレーナ？」

いきなり立ち止まったあたしに、しょうこが怪訝そうな表情を向けてきた。

いま向き合った感情は、誰にもいえないただのひがみだ。

「うっん、なんでもないよ。ねえ、もうギャラリーあがつちゃっていい場所とおこうよ」

提案は拒否されるわけもなく、あたしたちは彼女とある男子が話しているのとは別の上り口からギャラリーに登った。

なかいちゃんやしょうこは練習風景を見ながらきーきー色めきだっている。ちょうど真下からカズたちが走り出してきたのと同じに、周囲のテンションはいつそう高くなった気がする。

いつのまにか彼女もギャラリーに登ってきていて、あたしたちと少し離れたところでコートを見下ろしていた。

ごめんなさい……勝手に思い込んでいた……。

あたしは心の中で謝っておいた。

まもなく、試合は始まった。ようこ情報によれば、相手チームにはバスケ部が2人いるが、その2人以外はたいしたことはないそうだった。

そして、どんな巡り合わせか、彼女と話していた彼も相手チームにいた。背が高く、細くて、笑顔が子犬のようにかわいい男子。

あたしは彼を知っていた 佐倉悠介、1年生のとき同じクラスだった。

ほとんど接点はなかったから、覚えている印象をあえて挙げるなら、いい人だなという漠然としたものだ。ただ、彼の周りには様々なタイプの男子が集まってきていて、いつも彼はニコニコと笑っているイメージだった。

当時のあたしはそれほど彼女に関心を持っていなかったのかわからないけれど、彼女と彼はときどき話していたような気がする。

たったそれだけの情報で、彼女が彼を好きだとか、あるいは彼女が彼女のことを好きだとか、そんなことを考えるのはあまりに短絡的だけれど……。

もしカズが見ていたら、ショックを受けただろうか。

「がんばって」

「きゃー！」

カズが佐倉くんからボールを奪った。思わず、彼女の様子を伺ってしまっただが、大した変化はなかった。カズがシュートを決めた瞬間は、彼女も笑顔になった。

彼女の横顔は、人を惹きつける。

真面目な表情のときも、笑顔のときも、ずっと眺めていると吸い込まれてしまいそうで、ときどきする……。

カズのためと言うのは、都合のいい言い訳だ。

いまならあたしがカズと彼女をくっつけたい本当の理由が思い当たった。たぶん、あたしに近い人の中で、カズが彼女の魅力に気づいた最初の人だからだ。

あたしは彼女に憧れていて、彼女のことをもっと知りたくて、彼女に近づきたい。それなのに新しい一步を踏み出す勇気が持てないから、まどろっこしいことをして接点を持つとしているのだ。

試合は接戦で、周囲の応援の声も張り詰めている。でもあたしの耳には、遠い世界の出来事に思える。でも、カズには頑張っただけいい。

勝手ながら、彼女のために　勇気のないあたしの代わりに。

結局試合は、1点差で3組が勝った。カズが決めた3ポイントシュートのおかげだと、なかいちゃんたちは騒いでいたのであたしも肯定しておいた。実際カズは、珍しく執念を感じる活躍を見せていた。何が彼を突き動かしているか、知っているのはあたしだけかもしれない。

次のサッカーの試合までの時間を、あたしたち3人は女子更衣室で時間をつぶすことにした。この激しい風の中、無駄に寒いグラウンドに出る気はなかった。

一番のびのびできる奥の椅子を陣取った2人は、さきほどの試合

の熱が冷めないのか、ずっと喋りっぱなしだ。いつもより、かなりテンションが高い。

「トイレ行ってくるね」

あたしは立ち上がり、一応声をかけてから歩き出した。いつもなら、「あたしたちもついて行くよ」という方向になり、「いいよいいよ、待ってて」というふうに収まるのだが、いまは話が盛り上がっているせいか普通に流された。

別にかまわない。いまは独りになりたい気分だ。

更衣室の入り組んだ衝立を横目に、あたしは足を鳴らして更衣室を出た。女子トイレはすぐそこにある。

そのわずかな間に、あたしに声をかけてきた人がいた。

「あのさあ、なかいちゃん、呼んでくれない？」

「え？」

そこにいたのは、髪を精一杯今風にしているのに、どこか垢抜けない男子だった。

「なかいちゃん？」

「そう。そこにいるだろ？　俺が女子更衣室に入っていくのはまずいだろうから」

その男子はいやらしい笑い方をしながら、なれなれしくあたしに寄ってきた。

なにこいつ？　なかいちゃんの知り合い？　気持ち悪っ…。

「…わかった」

あたしはしぶしぶ更衣室にUターンした。面倒臭いが、さつさと頼まれごとを済ませて、あの男子と関わり合いになるのを避けようと思ったのだ。

衝立のこちら側からでも呼べば聞こえる。あたしは奥まで行かずにそうしようと思った。

「……いい気になってんのよ」

その会話を聞く前に、「なかいちゃん、呼んでるよ」と、声をかけてしまえばよかったのに。

今日は厄日なのか…？

「自分は彼氏いるってのに、ゆもくんやタカくんに色目使って、マジうざいよね」

聞こえた。

聞いてしまった……。

「あの子も相当な男好きだからね」

「だよー。それにしても鈍いよね、しょうこがタカくんのこと好きだって気付きもしないんだから」

全身が凍ったみたいに、あたしは身動きが取れなかった。

血の気が引くように、体の中心がぐつと冷える。そのせいか、頭は妙に冷静だった。

確かに、しょうこがタカのこと好きだったなんて全然わからなかった。あたしは彼女たちの言葉の通り、鈍いのもかもしれない。でも、いまの会話が誰のことを言っているのかわからないほどは鈍くない。色目なんて使った覚えはない。あたしは男好きなんかじゃない。ずっとずっと修一筋で、他なんか目に入らなかったのに……！

あたしはそんなじゃない…！

悲しさや悔しさが入り混じり、あたしは発狂しそうになった。その通りに、非難すればいい。乗り込んで、つかみかかれればいい。すればいいことは、簡単だった。

この口と足を動かせばいい。なのに、あたしにはできなかった。代わりにできたことといえば、わざと足音を立てて歩き出しながら間延びした声で名前を呼んだこと。

「なかいちゃん」

「あれ？ 早いね」

同じ口から発せられたとは思えないとぼけた声が答えた。

「なんか、誰かがなかいちゃんを呼んでほしい言ってるんだけどー」

「えー、なんだろ」

あたしはいつも通り笑えたと思う。あたしが聞いてしまったとは

考えなかったのか、なかいちゃんは笑顔で衝立の向こうから現われ、一緒に更衣室を出た。あたしはそのままトイレに向かった。

用を済ませて鏡の前に向かうと、あたしは冷静に考えた。

あたしは何に一番ショックを受けているのだろう。

男好きだって言われたこと？ 仲のいい二人に陰口を言われたこと？ それとも……？

最近のあたしは冴えている。自分の気持ちを隠そうと思わなければ、すぐに真実にたどり着ける。

しょうくに好きな人がいたことを教えてもらえなかったのもショックだけど、それはしょうこの気持ちもわからなくはない。彼女の言葉のように言えば、しょうこも相当プライドが高い子だから。男好きって陰口は過去にも言われたことはある。だから、実は気をつけてモテるタカなんかとは距離をとるようにしてきた。女子のグループがその場にはいないメンバーの陰口を言うなんて珍しくない。そういうものだってわかってるつもり……。

あたしは、何に傷ついたか。

あたしは陰口を言うような友達だと知りながらも、離れることができなかった。離れたら、独りになってしまう。独りでいることなんてできない。

あたしはこうして、独りにならないために自分を殺して合わせていくしかできない。

あたしは、とても弱い。

弱さを知りながらもなにもできないあたしは、彼女に憧れる資格もないかもしれない……。

「具合悪いの？」

不意に声がし、鏡越しに心配そうな顔が見えた。横顔ばかりじゃない、まっすぐ見つめてくる表情も、綺麗だ。

「吉澤さん……」

「顔色が悪いね。大丈夫？」

彼女がそつとあたしの顔を覗き込む。彼女の顔が間近にあり、あ

たしは不謹慎にもドキリとした。

「うん……ちよつと、頭痛くて……」

あたしはでまかせを言つたけれど、嘘には聞こえなかったと思う。確かに、いまのあたしはひどい顔をしている。

「保健室、行こうか？」

「うん……行きたいかも」

いろんな感情が混ざりあつて、あたしは参つていた。誰かに縋りたかった。それは誰でもいいわけではなく、彼女のような人を求めていた。

彼女は同じクラスの女の子に担任への伝言を頼み、あたしに付き添つて保健室まで来てくれた。

保健室の養護教諭は優しいおばちゃんで、生徒からの人気は高い。あたしを手際よくベットに寝かせ、いくつか質問をしながら体温計を差し出した。

「熱はないみたいね。ここ最近急に冷えてきたからね、体育館は寒いかしら。運動したあとはちゃんと汗を拭かなきゃだめよ」

「はい……」

「それじゃあ好きなだけ休んでいてちょうだい。あたしは隣の部屋にいるから」

余計なことは詮索せず、おばちゃんは優しく笑つて去つていった。図らずとも、彼女と2人つきりになつてしまった。

「……石田さんとか中井さん呼んでよかった？ 担任には伝えてくれるように頼んだけど、2人は知らないかもしれないから」

「いいよ、悪いから……」

妥当な判断だろう。でも、それは勘弁したかった。完全に縁を切ることもできないくせに、いまはまだ平気な振りをして笑うことは難しそうだ。

「吉澤さんもごめん、体育館に戻りたい……？」

本当は具合が悪いわけじゃないから、こうして寝ることに意味はない。ただ、彼女ともう少しくうしていたかった。うん、話をし

てみたかった。

「うっん、あたしがいても邪魔じゃない？」

「全然！」

大歓迎……！

「じゃああたしもゆつくりする」

彼女も茶目つ気がある笑い方をするんだなあ……。

彼女はベッドから少し離れたところに椅子を置いて、保健関係の資料を眺め始めた。手に取った本は、ナイチンゲールの伝記の漫画版だ。白衣の天使か……少なくともあたしより、彼女の方が似合いそうだ。

「吉澤さんは、好きな人とかいる？」

「え？」

あまりに藪から棒な質問に、彼女も驚いたみたいだ。

「ごめん、いきなり。あたしの中でね、吉澤さんてすごく大人なイメージで……だから、なんだろ、普通に好きな人とかいるのかなあ……」

うまく言葉にまとめられない。質問の内容も失礼かもしれない。なにが普通って、つまり言いたいことは……。

「あたし、すぐく子どもっぽいよ。むしろ上野さんの方があたしからすれば大人に見えるよ」

彼女があたしの方に体を向けた。涼しげで綺麗な目をぼんやり眺める。

「好きな人は……恋愛感情でってことだね？ いまはいないかな」
彼女は少し恥ずかしそうに笑った。

「前はいたんだ」

「まあ、それなりにはね。でも……よくわからないの」

「わからないって？」

「人を恋愛感情で好きになるって、どういうことなのか」

ふと、彼女の中味に触れた気がした。そんなふうに打ち明けられたことが意外で とても嬉しかった。

「なんか、あつたの？」

踏み込んで聞いてしまってもいいのかわからない。でもあたしは聞いたかった。彼女のことを知りたかった。彼女が普通に悩みを抱えている女の子だと、あたしと同じ高校３年生の女の子だということを改めて実感したかった。

彼女が少し落ち込んだふうに見えて、あたしは慌てて言葉を付け足した。

「でも言いたくないなら無理には」

「ううん、言いたくないわけじゃないの。聞いてほしいかな。……」

上野さんは付き合っている人がいるんだよね？」

「あ、うん」

「どうしてその人のことを好きだつてわかったの？」

そんな質問を返されるとは思っていなくて、あたしは改めて修一のことを考えた。

「あたしは……家が近所で、小さいころは遊んでもらったりしていて、当たり前前に側にいる人だったの。お約束のように、将来はお嫁さんになるんだって思ってた。でも、中学生になったらそういうつながりつてすごく薄くなつて、全然顔あわせることもなくなっちゃって……寂しいし、誰か別の女の子と一緒にいる姿なんかをみて、すごく悲しかった。いつから好きになつたとかなんでとか、よくわからないけど、その人が笑うとあたしはすごく嬉しくて、その笑顔を一番そばで見たかったの。あたしが嬉しいときもそばにいてほしいと思った。悲しいときも、助けたかったし、助けてほしかった。だから、諦めずにずっと想い続けて……」

彼女の話を聞くはずが、一度喋りだすともう止められなかった。でも、言いながらあたし自身もよくわからなかった。なぜ修一が好きなのか、なぜ修一じゃないとダメなのか……。

なぜかわからない、でも……。

「ごめん、うまくまとめられないや……。でも、いまはその人以外考えられない。だってすごく好きなんだもん」

ただの憧れだとか、悩んだことがなかったわけではない。でも、それが素直な気持ちだ。

「羨ましいな。あたしはまだ、そんな思いになったことがないんだ」と、彼女。

いまあたしたちは、思いがけないほど素直に向き合っている。この間まで遠い存在だった人に、こんなに素直に気持ちをさらけ出しているなんて不思議な感じた。

「誰かを好きになったことがないの？」

「そうなのかな……。以前、告白されて、付き合ったことはあるの」やっぱり。彼女の魅力に気づいたのはあたしやカズが初めてではなかったらしい。

「その人とはね、仲のいい友達だったの。あたしも嫌いじゃなかったし、好感も持っていたから、大丈夫だと思った。でも、好きになれなかった」

「好きになれなかった…？」

「うん…。好きだったんだけど、恋愛感情じゃなかったんだと思う。結局その人のこと傷つけただけで、少し辛い思い出…。それまでも、友達と恋愛話はたくさんしてきたんだよね。誰がかっこいいとか、話せて嬉しいだとか、好きだとか…。何人か好きになった人はいたはずなのに、もしかしたらそれも単なる思い込みだったのかもしれない…。って考えちゃって」

少し、似ているかもしれない。

だから、伝えたい…。

「だから、あたしはなにか足りないのかもしれない…。って」

「そんなことない。人それぞれだもん、それは吉澤さんが悪いわけじゃないよ」

思いがけず大声を出してしまったみたい。

「あたしも、よく悩んだもん。周りの友達たちからも、修一に対する感情は近所のお兄ちゃんに対する憧れだって言われて、絶対うまくいかない、別れるだろうなんて言われて。でも、そのときのあた

しの心と、いまのあたしの心が決めたことだから、そんな先の勝手な予想なんて関係ない。吉澤さんも、前回がたまたまそうなってしまっただけで、次に好きになる人にはのめり込むのかもしれないわけだし、次があつてから本当に好きになれないのかどうか、また考えればいいじゃん。なにかが足りないなんてこともないと思う」

あたしの勢いのある言葉を、彼女はどう受け止めたのだろう？

いつものように　いつもより優しく笑った。

「ありがとう。そう言ってもらえると、救われる」

優しくお礼を言われて、こっちの方が照れてしまった。

「こちらこそだよ。吉澤さんの話が聞けて嬉しかった…」

また少し、あたしたちの距離は縮まったみたいだ。

ひっそり静まり返った保健室で、あたしたちは球技大会を脱け出した共犯者だった。

「あたし、臆病なんだよね…」

と、彼女がつぶやく。

そんなふうには思わない。だって彼女は、いつもまっすぐ立っているから。でも、彼女がそう言うなら、それも彼女の人間らしい一部なら、なんだか愛おしく思えた。

不意にチャイムが鳴り響いた。

「これって4時間の終わりのチャイム？」

「そうだね。お昼をはさんで、それぞれの決勝だけ午後にやるはずだよ。そう言えば上野さん、全然ゆっくり休めなかったけど、具合大丈夫？」

「え、あ、もう全然平気、すっごい元気になった、あはは。お弁当食べに教室戻ろうか」

そう言えばそんな理由でここにいたのだと、あたしはすっかり忘れていた。あのショックも、彼女のおかげで和らいだ。あたしたちはおばちゃんにお礼を言つて、並んで廊下を歩き始めた。

「それにしても羨ましいな、湯本くんみたいな素敵な彼氏がいて」
彼女がニコニコしながら言った言葉を、あたしはしばらく頭の中

で反芻した。

湯本くん　確かに修一は湯本だけど……？

「修一のこと、知ってるの？」

「え？」

今度は彼女が不思議そうな表情をした。

「修一って？」

「え？　あたしの、彼氏……！」

あたしは彼女がとんでもない誤解をしていることに気がついた。

「ちよつと待って！　あたしの彼氏は湯本修一っていう、カズのお兄さんだよ」

彼女は、ぽかんと目を丸くした。

「え……！　ごめん、やだ、すごい勘違い……仲いいからてつきり湯本くんだと」

「違うよー！　うん、でも、誤解が解けたならいいんだけど……」

あたしは呆然としてしまった。彼女は申し訳なさそうに謝ってくれたが、あたしの方が平謝りしたい気分だった。

「ごめんカズ、これからもう少し気をつける……」。

あたしも調子に乗っていたかもしれない　なかいちゃんやしょうこにそう思われたことはどうでもいい。でも、カズと彼女のために今後自重しようと思っただけ。

よりにもよって、好きな女の子からそんな誤解をされるなんて悲しすぎる……。

あたしはせめてもの罪滅ぼしのため、その話題に引つ張り出した。「バスケットとサッカー、決勝に残れたかな？　今日、カズはけっこう活躍していたね」

あたしが保健室に行ったせいで、サッカーの第2試合とバスケットの準々決勝を見逃してしまった。そのことも2人に申し訳なく思った。「そうだね、カッコよかったね。勝っているといいけど」

カズに聞かせてあげたい！　いまその角にいるなんて素敵な偶然が起きてくれたらいいのに。

「いま彼女いないみたいだよ」

好きな子はいるみたいだけど……という言葉は飲み込んだ。それも余計な誤解になったらまずいと思ったから。

「へー」

そこに関する彼女の反応は普通だった。確かに、好きな人はいないと言っていたから仕方ないだろう。

でも、カズのこと素敵だって言っていたし、カッコいいとも言っていた。あたしと付き合っているというところでもない誤解も解けた。あとはカズのアプローチにかかっている。

あたしもこっさり応援するから。彼女に近づきたいがためにカズを応援しようとしていたけど、いまはもっと自然な気持ちで応援できそうだ。

もちろん無理強いなんてしないけれど、彼女がカズのことを好きになってくれたらとても、とっても 素敵だ。

教室に戻ると、なかいちゃんとうかが「大丈夫?」「気付かなくてごめんね」とかけよってきた。あたしは「心配かけてごめん、もう平気」と笑顔で答えながら、彼女とは別れた。

今日は朝からつくづくついていない日だと思っていたけど、いいこともちゃんとあった。

自分を押し殺した場面もあってけれど、彼女の前では素直になれた。

彼女と上辺だけじゃない話ができた。

彼女に近づけた。

それがこんなにも嬉しいのだ。

エピソード14（後書き）

大変更新がおそくなって申し訳ありません。この時期を乗り越えたら、もう少し早く更新できるようになるとは思っていますが……。こんな拙い小説でも待っていてくれる方がいると思うと頑張れます。読んでくれる方、本当にありがとうございます。

エピソード15

どうして、人は人を好きになるのか。

どうして、俺は彼女に惹かれるのか。

そんな哲学的なことはわからない。わかりたい気もするが、それが一番じゃない。

唯一わかることとは、俺はいま彼女と話したいということ。それだけ。

本音を言えばもちろん、それだけではない。もっと彼女のそばにいたい。もっと彼女のことを知りたい。

願わくば、彼女も俺と同じ想いを抱いてほしいと思っている。

昼食休憩が終わり、ほとんどの3年生がただ応援するという目的で体育館に向かう。疲労してきた体をほぐしながら俺もそれに交ざって移動した。

2回戦も準々決勝も苦戦をしいられ、なんとかかんとか勝利することができた。ここまでうまく勝ち残れたのは5人のチームワークの良さもそうだが、微妙な偶然が重なり合ったおかげだ。

例えば2回戦、相手チームはバスケット部の2人がボールを運んで佐倉がゴール下でシュートするという作戦で攻めるつもりだったらしいが、俺の意地がその流れを阻止した。

準々決勝の相手チームは俺たちのチームと同様に全員が運動部で、まさにギリギリのテクニク勝負だったが、シュートの正確さがこちらの方が勝っていた。

だから俺は決勝戦も、楽観視していなければ、特別深刻にも考えていなかった。

ただ。

最後の試合こそ、彼女の視線の先にいたいという思いがある。

最初にあの会話をして以来、彼女と話していない。

ほんの一言「すごいね」と言われる場面を、俺は今ならどんなパターンでも妄想で描けるのに。

現実には思い描くようには行かない。

あてもない期待をしながら、試合後にさり気なく一人で佇んでみても、俺の周りには別の人がやってきてしまふ。遠くに見かける彼女には隙がない。積極的に話し掛けられるほど、おおっぴらにはまだ振舞えない。

後で知ったことだが、準々決勝のとき彼女はレーナに付き添って保健室にいたらしい。

あれもこれも俺の日頃の行いが悪いからか…？

「絶対勝てよ！ 消しゴムなんかじゃ満足しねーからな」

決勝戦が始まる直前に、サッカーが負けてさっきまで不貞腐れていた歩に発破をかけられた。賞品のことはすっかり忘れていた。そんなものは、本当にどうでもよかった。

「言われなくても、やるだけやりますよ」

俺は静かに答えて、コートに向かって歩きだした。

結局、後日3組には大量の消しゴムがやってくることになった。

HRが始まるころ、微妙に気落ちしたテンションで席に戻ったとき、吉澤早美に声をかけられた。

今日の中で2番目にテンションが上がった。1番目は言わずもがなだが朝の一コマだ。

「お疲れさま」

「ん、ありがとう。負けちゃったけど」

決勝戦　なんだか特別な響だが、何か特別なことが起ったわけでもなく単純に負けた。でも、こんなふうに話しかけてもらえるなら、勝っておけばよかった。そうしたら、少し労わるような「お疲れさま」も、満面の笑みの「おめでとう」だったかもしれない。

「でもすごかった。決勝まで行くなんて」

「ほんと、まぐれみたいなものだけど。結局賞品は消しゴムがクラス分だし」

賞品なんてどうでもいいと思っていたくせに、彼女との話題になるのなら本当に何でもいい。

「個人的には、消しゴム買おうかなって思ってたからおこぼれに預かれて嬉しいよ」

彼女がそう言ってくれるなら、消しゴムでも消しカスにでもなんだって感謝できる。

「吉澤さんのお役に立てて光栄です」

ようやく、非常に強かった欲求の一つが満たされそうだ。

彼女の前だと、自然体でいたいのになかなかいられないけれどいま俺は最高に気分がいい。

俺は改めてバレーの試合での彼女の活躍を労い、球技大会の出来事を話題の柱にして、彼女との些細なひとときを噛み締めた。

そこにレーナが席に戻ってきた。保健室に行っていた割には顔色は悪くないようだ。

「もう大丈夫なのか？」

「あ、うん、全然大丈夫。ありがと」

レーナは少し慌てたように急いで返事をした。そそくさと椅子に座ったレーナは、彼女と一瞬視線を絡めて小さく笑った。

ん？

一瞬でのけ者にされたみたい。

いつの間にか、彼女とレーナはどんどん仲良くなっている。やはり隣の席のほうが有利なのだろうか。それとも、保健室で何かあったのだろうか…。

「なんか仲いいな」

また2人は、2人だけしかわからないような視線を交わす。

「えへへ、だってあたし吉澤さんのこと好きだもん」

唐突なレーナの発言に、俺は正直に固まった。

もちろん恋愛的な意味なはずないだろうけれど。

レーナは外見はきつそうに見えるが、実はとても周囲に気を使える人だ。よく言えば優しいし、悪く言うなら 場の空気を悪くするくらいなら自己主張せずに引いてしまふところがある。けれど、人の好意にはとても素直に反応する。

だから、レーナが好きだと言うなら本当に好きなのだろう。

正直なところ意外な組み合わせにも見えるが、俺がもたもたしている間に、女同士友情は芽生えていたらしい。

「ありがとう。あたしも上野さんのこと好きだよ」

少し照れながら、彼女がレーナに向かって言った。

そのときの俺がどう思ったかは 取り立てて言う必要もないだろう。

「でも、苗字のさん付けなわけ？」

俺はらしくないと思いつつも、少し意地悪く言ってしまった。

2人はそこによくやく気がついたらしい。

「そうだよねえ、確かにぎこちないかも。じゃあ名前で呼ぶよ。いい？ 早美」

早美。すごく綺麗な響。

そのときの俺がどう思ったかは ……。

「ええ…なんか恥ずかしいな。…嬉しいけど。あたしはなんて呼んだらいい？」

彼女は本当に照れているようだ。頬がほんのり赤くなって、めっちゃくちゃ可愛い……。

「レーナでいいよ。言いくいならさんとかちゃんとかつけてくれてもいいけど、あたしはレーナって呼ばれ慣れてるし、他の呼び方はあんまり似合わないから。吉澤さん…じゃなくて早美は、普段なんて呼ばれてるの？」

「うーん……部活の友達とかだと、早美とか、早美さんとか、ハヤちゃんとか……ハヤとか……」

「ハヤって、めっちゃ可愛いっ！」

「でも他の人たちがいる前で呼ばれたりすると、我に返って恥ずか

しいんだよね」

俺のもやもやなどお構いなしに、2人は名前について盛り上がっていた。

俺だって……。

俺だって、名前で呼びたい。

レーナと彼女は、お互いの名前を呼び捨てで呼び合うことに決まったようだ。その決定を、俺は苦々しく聞いていた。

「あ、この際さ、カズも仲間に入れてあげようよ」

「あ？」

仲間？

なんの？

もしかして、呼び方が……？

彼女もわからなかったらしく首をかしげたそのタイミングで、担任が入ってきてHRが始まった。

レーナの発言の真意がつかめないまま、俺はもやもやと時間が過ぎるのを待っていた。

HRが終り、球技大会で疲れたクラスの面々はさっさと荷物をまとめて帰ろうとしていた。俺は帰りの道連れを誘われながらも、なんだかんだと言い訳をつけて教室に残っていた。

もちろん彼女と話をするタイミングを計るためだったが、レーナにもさっきの発言の意味を問いただしたかった。

そんなことを考えている間に、次々に人は教室を去っていく。彼女と話していたレーナも、しょうこやなかいちゃんが誘いに来て帰っていた。彼女はバスの時間があるのか、しばらく教室に残っていた。

「バス？」

ようやく巡ってきた再チャンス。

「うん。湯本くんは帰らないの？」

「あー、うん、ちょっと。足にすごく疲労が溜まってるから、自転車こぐのつらそうだから」

「あたしも。明日になったら足とかもつとひどい筋肉痛になると思う。湯本くんみたいに鍛えてないから」

「運動とか、全然しないんだ？」

「中学校からずっと文化部だから。バス通だし、体育ぐらいしか運動する機会ってないもん」

それでも彼女の体はすらりとしなやかで綺麗だけど……。

「吹奏楽部だよな」

「そう。腹筋なら、ぎりぎり人並み程度にはあるかな」

他愛もない話をしながら、横目で他のクラスメイトが帰っていく様子を冷静に観察していた。

この気持ち。

彼女と2人つきりになりたいような、なりたくないような。

中学生じゃあるまいし。

恋をするのが、初めてでもないくせに。

自分の純情ぶりに思わず笑いが込み上げてきた。

他愛のない話は、思いのほか途切れない。彼女が不快に感じていませんように。少しでも楽しいと思ってくれますように。

とうとう、最後の第3者が教室を出ようとしていたとき。

「こんな時間」

彼女が時計を見ながら立ち上がった。

「話し込み過ぎちゃった。27分発なの」

彼女が慌しく荷物を整えるのを、俺は眺めていた。内心、ずっとこの言葉を言うか言うまいか葛藤していたのだ。

「話に付き合ってくれてありがとう。先に帰るね。ばいばい」

彼女は小走りで教室の机の隙間を縫って、あっという間に俺の視界からドロップアウトした。ようやく俺は、さっきから一言も発していない事実気がついた。

うだうだ悩んでる間に、彼女は去ろうとしている。

また、チャンスを逃すのか、俺は。

体は無意識に、彼女を追いかけていた。

いつもすたすたと去っていく彼女を追いかけているなんて、不思議な気分。

「吉澤さん」

階段を下りる一歩手前。少し驚いたように振り返った彼女に向かって、俺は続けた。

「吉澤って呼び捨てにしても、気にならない？」

彼女の真っ直ぐな眼差しにも負けず、俺は彼女の目を見ることができた。

一瞬か。

実際のところ正確な時間はわからないけれど。

ひどく永く感じた。

その間が気まずい。けれど、答えを聞くまでは視線をそらせない。絶対に、そらさない。

彼女がゆっくり口を開いた。

「気にならないよ」

俺の心を射抜いた目が、柔らかく細まった。大げさだとは思いながら。

俺を取り巻く世界が、ほんの少し輝いたように見えた。

俺がその笑顔にだらしく見惚れるまもなく、彼女はくるりと後姿を見せて階段を駆けていった。

「ごめん、じゃあまたね」

そう言葉を残して。

「いや、こつちこそ…」

俺の言葉はおそらく彼女に届かず、階段の踊り場の壁に寂しく跳ね返った。謝るのは俺の方だ。バスの時間があつたのだから、引き止めてしまった。

本当は俺のことも、「湯本くん」より近づいた呼び方で呼んでほしかったけれど……。

とにかく断られなかったことに、安堵のため息が出た。ため息とほぼ同じく、力が抜けてきた。

そう、今日は球技大会があったのだ。疲れているはずだ。でも、今日は。

いい日だ。「最高」はまだ取っておこうと思う　なかなかいい日だ。

明日来るだろう筋肉痛も、レーナに先を越された悔しさも、レーナのなぞな発言も、いまはもうどうだっていい。

本当はもっと欲はある。

今は心の中で。

その日がいつか来ることを願いながら、いまはこのときの勇氣に甘んずる。

いつか声に出して、「早美」と呼べる日が来ることを。

エピソード15（後書き）

ようやく更新できました。お待ちしていて下さる方々、本当にありがとうございます。

エピソード16

友達のスタートっていつからだろう。

最初に話したとき??

友達になろうって言ったとき??

親しげに名前を呼びあったとき??

それとも…?

そもそも友達関係って、どういう関係だろう。

いっしょに行動すること?

携帯のアドレスを知っていること??

悩みを打ち明け合うこと?

それなら…。

あたしと早美が友達かと聞かれたら、ちょっと難しい。

少なくともあたしは早美が好きだし、早美もあたしのことを嫌ってはいないと思う。

でも、あたしたちはそれぞれの席に座っていて隣という以外で、いっしょに行動することはない。

休み時間にトイレに行くのも、お昼を食べるのも、帰るのも、あたしは相変わらずしよことなかいちゃんといっしょだ。時々、そんな自分が情けなくなる。ただ流され、付属することに。

いまなら早美のことが好きと言えるのに、しよこやなかいちゃんの場合は場合によって大好きになったり、二度と顔を見たくなくなったりする。

友達?

誰が、あたしの友達なのだろう。

そして、あたしは誰の友達でいれているのだろう…。

「……自分で自分を奮い立たせるしかないんだからな。弱い自分から目を背けるんじゃないぞ。さあ、出席順にとりにこい」

教室中に緊張のため息がこぼれた。

そう、いまはHR。9月の模試の結果について担任の厳しい言葉を聞いていた。模試が終わった直後にそれぞれ自己採点はしているはずだから、正確な点数に改めてため息がでるところだ。

自分なりに奮起する前に行われた模試だから、結果は芳しくなかったはず…。

「上野」

男子が終わり、しょうこの次にあたしは呼ばれた。

心境は行動に直結　のろのろと前にでる。

「数学、国語、この2つをもう少しなんとかしなさい。このままじや志望校、とても無理だぞ」

「…はい」

その言葉はいまは何よりも重い。
受験。

このままだと修一のいる大学に行けない。

そんなの、受験に挑む意味がない…！

理由はどうあれ、これまでのように投げやりになんてなっていない、あたしはこれまでになく真剣に結果を分析しにかかった。

確かに、あたしの苦手なこの2教科は200点満点だから、他の教科より大幅に点数をロスしている。特に理系のくせに数学ができないなんて終わってる。得意な生物や地理でそこそこ点を取れても、総得点への影響は小さいものでしかない。英語と化学はいたって平均。

どうすれば点数が上がるか。

わかってはいるし、なんとかもしたいんだけど…。

「早美い…」

あたしは隣のエキスパートにすぎるしか思いつかなかった。

「どうしたの？」

早美の菩薩のような微笑みに、沈んだ気持ちはちよっぴり癒された。

「あたし、全然だめなの。数学と国語ってどうしたらできるようになるの？」

あたしのうなるような質問を受け取った早美は、ちよつと困ったような顔をした。

「たぶん、たくさん練習してパターンをつかんじゃえば難しいくないよ。あたしは数学と国語は好きだから、好きだと色々な問題解くのも苦じゃないけど」

「やっぱり練習だよね……。でも嫌いだと勉強する気も起きなくて、どうしよう……」

やっぱりあたしたちって正反对だよね…。

「どんなところが嫌いなの？」
と早美。

「数学は公式を覚えてもどの問題にどの解き方をしたらいいかさっぱり」

「あゝ…なるほど」

「でね、国語は特に評論！ あんなのただの高校生には無理！ わざと小難しい言い方して、偉そうな文章ばかり」

「評論なんて正解探しクイズみたいなもんだろ」

出たな、カズ…！ あたしと早美の邪魔だけでなく、あたしの苦手持論にもケチつけようっての？

「なによ、自分はできるからって。あんな難しい文章読んでもあたしの頭に入ってこないの！」

あたしと早美の会話にカズが絡んでくるなんてもう日常茶飯事だ。早美とカズが話しているところにあたしもよく加わる。ただし、残念ながら数学的な話題だとあたしは聞いているだけになる…。

「俺だって国語は大の苦手。でも評論より小説とか古文の方が曖昧すぎて難しくないか？」

「えゝ…そんなことないよ。あつちは言葉は難しいけど、ストーリー

「は単純じゃん」

カズがは彼女の方に向き直って言った。

「吉澤は国語の中で好き嫌いってある？」

いつの間にか　　たぶんあたしと同時期に　　早美に対する呼び方が変わっていた。

カズも着実に早美に近づいている。

「読んでて辛いのは評論だけど、正解はしやすいからね」

あたしとカズは昔から仲がいいけれど、あんな言い争いはしょっちゅうだ。あたしたち二人の間に入らざるをえない早美は時々かわいそうな立場になる。だけど、困ったように笑っている早美は、普段の涼しげな早美とは印象がかなり違って可愛から、あたしやカズは余計に絡むのかもしれない。

「ほら、やっぱりそうだよ」

「えー、いま早美はあたしの意見に味方してくれたんだから」

あたしはカズの応援ももちろんしているんだけど……早美をカズに取られたくないとも思っている。

矛盾……早美に憧れているからそばにいたくて、だからつい意地になっちゃう。

早美はまずカズに古文の勉強の仕方を、次いで評論の解き方をアドバイスしてくれた。

文章に線を引きながら読むこと。『つまり』は要約、『しかし

』は逆説、選択肢には　×をつけて文章との一致度合いを見る……。

うーん、言っている意味は分かるけど、うまく活用できるか……。ただ、現国の教師に言われるより、早美がそう言ってくれた方がすんなりやってみようって気になるから不思議だ。

早美の細かなアドバイス、綺麗な声を耳にしながら　ふと、あの種の不安が湧き起こった。

早美はあたしのことをどう思っているのだろう。

最近まとわりついている「レーナ」という存在を、面倒くさいと

思っていないだろうか。

こんな風にぐるぐる悩みだしてしまうとなかなか抜け出せなくなってしまう。あたしだけじゃないかもしれない、だけど、人間関係に関することに、不安は尽きない。

早美に嫌われたくない。

でももつと、仲良くなりたい…。

これはただの我がまま？

「ありがとう早美。ごめんね、こんな風に色々頼っちゃって…なんかお返しできることがあればいいのに」

「そんな、気にしないで。質問に答えるのもあたし自身の整理になるんだ。逆に答えられてないことはあたしも適当にやっているところなわけで自己反省できるし」

早美ってポジティブだ。しっかりしているし、本当にすごい…。

「だからお返しなんて気にしないで…」

早美は少し間をおいてから、ちよつと照れくさそうに笑った。

「だったら、前みたいに相談にでも乗ってもらおうかな」

「相談？」

「ん、ほら、恋愛相談とか…？」

傍観者カズは100のダメージを受けた……！　かな…？

こつそり様子を伺うと、カズはまさにピシッと固まっていた。

かわいそうに、いまの言葉はすっかり耳に、目に入ってしまったようだ。早美の言い方が無邪気だったからこそなおさら……。

ただ、聞きたいのに聞きたくない、聞けない……そんな葛藤が硬直した顔からありありと見てとれる。

相談内容の真相を知っているからこそ、カズのことを憐れに思えた。

「やだ、そんなのあたしなんかでよければどんどん聞いて」

カズとの関係は時に早美をめぐるライバルでもあるけれど、やっぱり応援者でもあるのだ。恋愛相談っていつでも誰が好きとかわつてことじゃないんだから、それを教えてあげたいところだけど……。

「と、とりあえず、次の模試の国語は早美に教えてもらったやり方でやってみる。あとは数学なんだよね。あたしも二人みたいに数学ができる人になりたいけど……」

そう、2人は数学のエキスパートで……。

頭の中に、突然何かが降臨した。

一度推敲する前に、あたしはそのひらめきを言葉にしていた。

「カズ、早美、二人であたしに数学を教えてくれない??」

言葉にしてから、後付けの理由が生まれてくる。

「もちろん図々しいお願いだったのはわかってるんだけど、つまり三人で勉強会みたいなのをするってことね。早美がよければカズとあたしの国語も見てくれたらなって……」

早美の発言以来呆然としていたカズがやっと我に返って口を挟んだ。

「それだと俺やレーナにとってはかなりありがたい話だけど、吉澤には利益ないぜ」

確かにあたしは早美といられる上に勉強も教えてもらえる、カズにも悪い話ではないはずだけど……。

「あゝ…その通りだよ。ちょっとあたしたちにむしが良すぎるか……」

早美にますます面倒くさい女って思われてしまつかも…。

「あたしにも利益はあるよ」

明るい言葉に、あたしたちはその話手に注目した。

「あたし、誰かと勉強会するって初めてなの。最近一人で机に向かっても煮詰まり気味だし、きつといい気分転換になるし、何より楽しいと思う!」

早美がそう言うってくれるなら……!

「俺からも化学ぐらいなら見てあげられるかもしれない」

「それすごく助かる!」

すごい…あたしの思いつきが、実現しようとしている……!

「なんか、色々とうまくいきそうな感じだよね……?」

満足気に頷く二人を前に、あたしのテンションも上がってきた。
「そうと決まればさっそく具体的なこと決めよう！」

結局来週の模試に向けて、今週の土曜日の昼からに決定。場所については、図書館では教え合うことができないので、カズの家ということになった。

なんのギブもできないあたしが場所を提供するのが普通だけど、あたしの家は弟と妹がいてきつとうるさくなってしまう。代わりに飲み物と食べ物を持って行くと約束した。

信じられない、こんなに上手くことが回るなんて！

早美が副学級委員長の仕事で行ってしまつと、興奮をまったく隠さないあたしと、正反対のカズが残された。

「楽しみ〜」

あたしが勉強会を楽しみにしているなんて、明日は竜巻でも起こるかもしれない。でも土曜日には収まってくれるならそれでもいいつてくらいだ。

「そうだな」

カズも本当はあたしと同じくらいテンションが高いはずなのに、冷静に振る舞っているのが妙におかしくなってきた。

「早美が来てくれることになって本当によかったね」

「…そうだな」

「あたしのおかげだよね？」

「…そう…って」

カズは上の空な返事を切つてあたしを凝視した。

「レーナ、お前もしかして……」

あくまでこつそり応援するつもりだったけど……もういいや。

「ちよつとは感謝してくれてもいいよ。カズにはなにかとお世話になつてるし」

「え？」

「でもあくまであたしはあたしのためにしてるんだから、いつも味方じゃないからね」

あたしの言葉が理解できていないのか、カズはきょんとしている。

最後にこれだけは言っておきたくて、あたしはにんまり笑って言い切った。

「時にはライバルなんだから」

かわいそうだから、詳しい話はまた後でしてあげよう。色々聞きたそうにしているもん。

でもいまは、早美が戻ってきたから、余計なことと言わない
その方がいいでしょ？

少しくらい、クールな仮面を剥がせた？

エピソード17

どこぞにおわします神様は、真面目に受験勉強に取り組んでいる俺をちゃんと見ていてくれているらしい。

こんな展開になるなんて、思っても見なかった　まあ、妄想くらいは何度もしたけれど。

今日、彼女が俺の家に来る。

吉澤早美が　あいにく、レーナも一緒だけれど。

昨日の夜は勉強そっちのけで部屋の掃除に勤しんだ。やたら真剣に作業をする俺をいぶかしんだ母親が、何事かと問い詰めてきたが、クラスメイトが来るとだけ答えておいた。

レーナは実際のところ兄を訪ねてよく家にくるし、彼女のことはその他になんとも形容できないから嘘ではない。

「彼女」だと言えるはずもなく、「ただの友達」と言うには俺の心がほんの少し抵抗を起こす、微妙なお年頃なのだ。

「それじゃあ母さんも出かけるけど、綺麗なグラスは戸棚に入ってるからね、それで出すのよ。レーナちゃんともう一人の…誰さんかしら…」とにかく粗相のないようにね」

今日は土曜日だが、都合よく母親も出かけるらしい。父親も仕事、兄の修一もバイトで出払っている。

「はいはい、2段目の奥だろ。いつてらっしゃい」

慌しく出ていく母親を笑顔で見送る。もう一人の「クラスメイト」の存在に関して余計な詮索を受けずに済んで、一番の重荷はとれた。俺の心を映すかのように、空は高く気持ちのいい秋晴れである。

今日、彼女が家に来る　別に彼女って、「彼女」ではないからそんなに構えるのも変だよな…。

ピンポン。

俺の心臓がびくりとはねた。

9時40分。

まだ約束の時間には早いけれど…？

心臓に落ち着けと命令しながら、玄関の扉に向かった。

音を立てずに覗き穴からそつと伺うと、レーナが一人で立っていた。ほつとしたのか、残念なのか、お年頃の男子高校生の気持ちは複雑だ。

「なんだ、レーナか」

「びつくりした。なにそのあいさつー」

扉を開けた先には、私服のレーナが大荷物を抱えていた。化粧はバツチリ。派手な柄のロングTシャツにグレイのパーカー、短いパンツから長い脚を出し、華奢なミニールを履いている。手首足首にはジャラジャラと飾り　いかにもレーナらしい装いだ。

「吉澤と、一緒に来るんじゃないかったのか？」

当然彼女は俺の家を知らないなので、彼女とレーナは色々と連絡を取り合って来る手段を考えていたみたいだけれど…？

「早美はバスで来るの。その角のバス停に53分に着くらしいから、迎えに行くわ。その前に荷物だけ運んでおこうと思って」

俺やレーナの家は高校に近いから、確かにそれが最良の方法なのだろう。

「そうか、悪いな。食べ物…山ごもりできそうなくらい持ってきてくれて」

ってなぐらい、特に菓子類が大量にあった。

「これ誰が食べるんだよ」

レーナが甘党だっているのは湯本家でも周知だけれど…。

「親が持つてけってうるさいの。賞味期限ぎりぎりの家の余り物だから申し訳ないけど、早美も甘い物好きだつて言ってたし、大丈夫よ」

レーナの断言に、俺も押し切られるように納得させられた。とり

あえずリビングのテーブルまで運んでしまふ。

新作太ポッキーに流行りの生チョコトリュフ、スナック菓子、ポップコーンは俺の好きなベーコンバター味……。やっぱり彼女も、甘いもの好きな普通の女の子だろうな……。

「カズ、いま、早美のこと考えたでしょ」

図星だ。

「うるせえ、俺の脳内まで見透かすな」

「だってそんな顔してたもん」

俺の想いは、いつのまにかレーナにも知られていたらしい。そんなにわかりやすいのかと、少々落ち込んでしまったが、味方が増えたと考えればそう悲観する必要もない。レーナによれば、レーナの立場はときどきライバル（？）で、だいたいは応援者だそうだ。

気持ちを知られてから、恩を売ってきたり、俺をからかったりしつつ、たまに俺が早美に近くのを邪魔しようとすることもある。厄介なときもあるが、一応感謝はしている。レーナが存在がなかったら、俺はここまで早美に近くことはできなかったはずだから。

「あ、そろそろ時間。迎えに行つて来る」

「俺も行く」

またチャイムの音にびくつくくらいなら、最初から出迎えた方がましだ。

レーナがにやりと笑ったのを尻目に、俺はさっさと玄関に向かった。

俺たちがバス停に着いたちょうどそのとき、彼女を乗せてバスはやってきた。何気ない風を装おつて、その瞬間を待つ……。

降車客は3人。

最後に待ち人はいた。

「早美、おはよ」

「おはよう、玲奈。わざわざありがとう」
私服。

すっかり失念していた。

制服で来るわけがない。その大事なシミュレーションを怠っていた俺の脳は、弾けるようなダメージを受けた。

これが、恋は盲目ってやつ？

女の子の流行のファッションなんて全然わからないけれど、彼女が纏っていたらなんでも最高に見えてしまう。ぴったりとしたジーンズはスタイルの良さを引き立て、七分のカーディガンの胸元から覗くキャミソールと華奢な鎖骨は、彼女の中性的な髪型と相まって妙にどきどきさせられる。アクセサリーなんて1つもつけていないのに、肌が綺麗だから、眩しくて……。

「湯本くん、今日はお世話になります」

彼女がこちらを向いて話しかけてこなければ、ずっと俺の妄想はどこまでも突っ走っていただろう……。

「こちらこそよろしく」

ちゃんと私服についてのシミュレーションができてさえいれば、こんなに動揺せずに気の効いた返答がきただろう、でももうどうしようもない。

「もう、カズってばまたばーっとしてる」

「…否定はしない。まあ、立ち話もなんだし、我が家に案内するよ」
余計な一言を足すレーナをひと睨みしてから、俺はそそくさと歩き出した。後ろに2人が並んで続く。

俺がどうのこうの言う前に、レーナが近所のことを彼女に嬉しそうに説明し始めた。だから、至福のダメージを引きずりつつも落ち着いて歩くことに集中できた。

「ほら、ここだよ」

これもレーナが、まるで自分の家のように言った。父親ががんばって建てた築8年の湯本家は、グレイのシックな外観でそう悪くない。

兄貴とレーナが結婚したらそうなるかな…なんて思いながら、俺は玄関の扉を開ける。

「ようこそ、湯本家に」

「お邪魔します」

少し緊張したような声が答えた。今日彼女と交わす、2度目の言葉だ。

レーナ以外の女の子を家に上げるのは1年ぶりくらいか。

静まれ、心臓…。

聞こえてなきやいいけど。

「スリッパ使って、これ」

「ありがとう。すごく綺麗な家。いいな」

幼い頃の思い出、夢の一戸建てを立てた時の親父の嬉しそうな顔が思い出された。

彼女が 早美が、好意的に見てくれるなら、俺は俺を取り巻くすべてに感謝できる。

人生18年の中で、素直になれる自分に気付いた、なんだかくすぐつたい瞬間だった。

「ねえ、勉強はこの部屋でやるの？ リビング？」

「そうそう、今日のメインは勉強会だった。」

「ん、リビングでもいいけど」

「つてことは、別なとこ用意してたの？」

なかなか鋭いね、レーナ。

「俺の部屋でやる予定だったんだけど、家族がみんな出払ってるから、どこでもいいんだ」

早美を自分の部屋に入りたいような…入れたくないような…。

「ふーん…カズの部屋、小さい時以来入ったことないんだよね」

レーナがしみじみとつぶやく。

その間、早美はもの珍しそうにリビングの風景画に見入っていた。レーナの目が、キラリと光った。

「カズの部屋、見てみたいよね、早美」

自分がその決定に関わるつもりはなかったらしい早美は、弾かれたようにこちらを振り返った。

「突然あがっても迷惑じゃないなら…」

「迷惑なんかじゃないよ」

「じゃあ決まり！」

そりゃあ、昨日一生懸命掃除したから変な物が置いてあるって心配はない。ただ、レーナが妙に張り切っているから、俺的にはこの心臓が最後までもつかどうか少し心配だ。

「えっと、2階なんだ」

内心どぎまぎしている俺を嘲笑うかのように、唐突に時計が10時を知らせる。

「わー、デイズニーの柱時計だ。可愛い」

「母親の趣味なんだ」

確かにうちの時計はかなりラブリーだ。小さい子どももないのに、妙な誤解はされたくなくて、俺は急いで言う。そんなことを早美が気にするというのも思いがりだろうけれど、一々過敏に反応してしまう。

俺の心臓が暴走しているように、いつか俺の身体もその波に飲み込まれてしまいそうで、一言一句油断できない。

階段に足をかけて、一段一段ゆっくり登る。早美は2歩後ろをついて来る。後ろの足音が軽い。

どうか顔が赤くなっていませんように…。

「あ、お手洗い借ります！」

突然、レーナがUターンして階段を降りて行った。

完全に確信犯だ。なんてやつだ…気を効かせているつもりなら、もうちょっと考えてくれ！

「心配しなくてもあたしは場所わかるよ。早美を案内してあげて。後でお菓子持っていく」

「玲奈、わたしも手伝うよ」

緊張しているのは俺だろうな。ただ黙って成り行きを見守ることにできない。

早美も来た道に戻ろうとしたが、レーナの笑みがそれを留めた。

「幼なじみの、彼氏の家でもあるもん。おばさんがどこにお客様用のグラスやお盆があるか、ちゃんと知ってるんだ。あたしのことは気にしないで、先に部屋でくつろいでて」
「でも」

早美が困っている。

俺とレーナがぎこちないと、一番迷惑がかかるのは間に立たされる早美だ。

「レーナに任せればいいよ。俺が用意するよりスムーズにやってくれるから。先に部屋行こう…」

「そうだね。湯本くんの部屋で勉強会の作戦を考えよう」

につこりと笑顔で提案されれば、抗えるはずもない。今日のメインはそれ 甘い雰囲気になるわけない。

でも、早美と何の接点もなかったあのころに比べれば、格段の進歩だ。

こんなに近くに早美がいる。

手を伸ばせば、届いてしまうくらい 危険な距離に。

今日しばらくは、視線を、笑顔を、野郎どもの目にふれさせず、独り占めできる。

「ここが俺の部屋」

俺の本心は、相容れぬ2つ。

もっと近づきたいと、貪欲に願っている。

有意義な勉強会になればと、苦手な古典を何とかできたらとも思う。

さて今日は、いったいどんな日になるだろうか。
期待と不安が半々。

少し、わくわくが優勢らしい…。

エピソード18

秘密の作戦開始。

執行動員はあたしだけ。

もちろん、本来の目的は忘れていない。今日は早美に勉強の仕方を教わる。たまに、ちょっとだけ、あたしはカズの応援者になる。

ダイニングで飲み物を用意しながら、あたしは小さく息を吐いた。2階に二人の気配を感じる。

物音を立てたらいけないような気がする。

なんだか、お化け屋敷のお化け役の気分だ。

カズと早美を二人つきりにして、あたしの方がどきどきしている。いや、やっぱりカズには負けるかもしれない……その辺りの勝敗はわからないけれど、少し申し訳ないと思うから緊張しているのだろう。

カズの心中はわからないけれど、怒ったかな？ 唐突過ぎたかもしれない、まあカズのためだから許して欲しいものだ。あとは早美。早美の気持ちを無視してやり過ぎないようにだけ気をつけよう。それに、あまり長く二人つきりにしておくとか、カズの身が持たないかもしれないから、そろそろ急ぐか。

お菓子の封を開け、皿の上に見目よく盛る。ポッキーはきっちり3人分。グラスに勢いよく氷を注ぎ、オレンジジュースのペットボトルと一緒にお盆に並べる。少々気合いを入れて、その重量感あるお盆を持った。

やっぱり、なんとなく足音は抑えてしまう。

階段を上がりきったとき、早美の驚いた声が聞こえた。

なんだか、楽しそうで、あたしはお邪魔虫かな？ しばらくそのままたちすくむ。

カズの兄弟の話をしていたようだ。カズは名前に漢数字の一が入

っているからか、よく長男だと思われがちだけど、実際は三人姉弟の末っ子。修一の上に、さらに一美ひとみというお姉さんがいる。湯本家は全員名前に漢数字の一が入っている珍しい名前の家族なのだ……って、それはあたしも知っているけど、このままじゃあ盗み聞きか……。

「お待たせー」

あたしは勢いよく扉を開けた。かったのだけれど、両手がふさがっていて無理だった。無理な姿勢でノブをがちゃがちゃさせていると、内側から開いた。

「悪いな、レーナ」

久しぶりに入ったカズの部屋は、壁紙こそ昔のままの白だったが、布や家具が濃いグリーンとグレイでまとめられていて、なんだか大人な雰囲気だった。修一の部屋はもう少し彩色豊かで遊び心がある点でやっぱり違う。

「ありがとう玲奈、重かったでしょ」

と早美。中央の四角いテーブルの奥に座って、微笑んでいる。早美には淡い色が似合うけど、大人っぽい早美がこの部屋にみると、綺麗なお姉さんなな構図ができあがる。

「うっん、平気。カズの部屋もいい感じだね」

「まあな。とりあえずお盆はそっちの机の上に置いて。このテーブルでやるから、飲み物だけこっちに」

カズもさつきよりリラックスしているようだ。ぎこちなさが消えている。あたしの作戦は、うまい方に転んでくれたかな？

「あたしはどっち側に座ればいいの？」

「窓の方で」

「了解」

早美を真ん中に、あたしとカズが両脇を固める。

なんだか照れる。

「みんなオレンジジュースでよかったかな？ あとアイスコーヒーもあったんだけど」

「うん、ありがとう。あたしコーヒー苦手なんだ」

「え、意外」

早美のイメージ　あたしの勝手な　では、ブラックを何のこともなく飲んでいような気がしたけれど。

「砂糖とミルク多めに入れたら飲めるんだけど、ブラックとか、苦くて無理」

「そうなんだあ」

ちよつと恥ずかしそうな早美、可愛い…。

本当の早美を知れば知るほど、元々の勝手なイメージからは勝手に裏切られているはずなのに、ますます素敵に見える。大人な早美にも懂れるけれど、可愛い早美は抱きしめたくなる。

カズは、なんの言葉も挟まなかったけれど、今の情報はしつかり頭に刻んだみたい。

「ところで…」

カズはオレンジジュースをひと口飲んで、カズが口を開いた。

「勉強会のやり方だけど、こんな風に時間割を立ててみた」

手元には、教科名と時間配分が書かれた紙。

「今から2時間国語。教師は吉澤ね。昼から数学と化学を同時進行。今度は俺が教師役。レーナ、昼食の材料も持ってきてくれているんだろ？」

「もちろん！」

「よし、じゃあ作戦に異議なしだよな。先生…お願いします」

カズが茶目つ気のある瞳を早美に向ける。あたしも楽しくなつて早美を見つめた。

「早美先生」

「その呼び方困る…」

困る早美もとても可愛い。カズじゃなくても、あたしもメロメロだわ。あ、変な意味ではなくてね。

「まあ……先生って呼ばれるからには、ビシバシ行くよ」

不意に、先生役の早美はにつこり微笑んだ。そのまぶたの奥には、

きりつと涼しげな目が隠れているようで、あたしはぞくりとした。可愛い早美もいいけれど、鋭い早美も……なかなか……。

カズも同じように感じたらしく、ぎくりと動きを止めた。

「まず玲奈は現国の評論からね。過去問の最初のページを開いて。この問題文、まずは5分で内容を掴めるようになる訓練からするよ」

「え、あ、はい」

「まずはいままでのやり方で読んでみて、どのくらい時間がかかるか計ってみよう。湯本くんは古文の方ね。意味が分からない文章に印をつけながら読んでみて」

「り、了解」

案の定、優しく厳しい早美先生は、あたしたちを少しも甘やかすことなくそれぞれの方面の国語の世界に導いてくれた。

「疲れた……」

「最高に脳を駆使した気分……」

ジュースの氷がすっかり溶けて生ぬるくなるころ、ようやく早美先生から合格の微笑みをもらえた。あたしとカズは机に突っ伏して呻く。

「二人とも、それぞれの文章のすごく読み方が上達したと思う！最後に、この問題だけやってみない？」

もうお堅い文章を読むのはこりこりだけど　早美が言うのなら

……。

「あれ？　この問題、見たことあるような気がする……」

「うん、9月の模試の問題だよ。今回やった読み方で解いてみて。違いが実感できると思うから」

嬉しそうな早美。やっぱり先生というものは、生徒ができるようになる嬉しいもののかな。

「わざわざ、コピーしてきてくれたんだ？」

カズは感慨深げに問題を見つめる。

「自分の問題はメモでぐちゃぐちゃだったから、先生に余りをもらったの。さあ、玲奈は30分、湯本くんは25分で解けるかな？」しばらく、また部屋は静かになった。

ねえ、信じられないかもしれないけど、あたし解けてるよこれ。一度やったことある問題だけど、あのときはわけも分からず、内容も適当にしか読み取れないままだったけど、今は全然違う。著者の言いたいこと、なんとなくわかるもん。

すごい！ カズが言っていた、パズルって気持ちが少し分かる。選択肢のほとんどが、なにかしらの間違った主張が書かれているから、まさに間違い探した。

「湯本くん、終わった？」

「自己採点してみる。ポイントとなる単語をしっかりと押さえておくと、読めるもんだな」

カズが満足そうに微笑んだから、早美もつられて顔をほころばす。

それを目の当たりにしたカズは照れたらしく、早美に不審がられない程度に平静を装って丸付けをし始めた。

うーん、こっちが照れる…。

「玲奈、そろそろ時間だけど大丈夫？」

おっと、のんびり観察している場合じゃなかった。

「もうちょっと待って…」

あたしはなんとか解ききって、先生に提出した。

「集中して考えすぎて頭パンクしそう…」

「お疲れ様。どう？ 手応えは」

「すごく読みやすかった。なんだか単純な間違い探しって意味がわかった！」

「うん、漢字の間違いは3つあるのが点数に響いちゃってるけど、これは書いて覚えれば何とかなるし、それは玲奈は得意だね？ 読解は1つ間違えてるだけだから、すごい進歩だよ。あとは時間かな」

確かに、漢字を覚えるような単純作業は嫌いじゃない。時間配分は確かに課題だ。これだけ正解率が上がると、逆になぜ間違えたかが気になる。

「あ、うん、この間違えてるところ、1と4で迷ったの」

解説を食い入るように見ているあたしのそばに、早美の顔が近づいてくる。

「うん、そこまで著者は断言できているわけじゃないから、1の方が近いかな」

あたしの真横で冷静に分析している早美を見つめて、あたしはとうとう行動を起こした。

「ありがと！ 早美のおかげだよ！」

ぎゅっと、彼女を抱きしめた。早美は柔らかくて、さらさらの髪からはシャンプーのいい香りがする。うわぁ、身長はあたしと変わらないのに、華奢だなあ……。

「玲奈っ、くすぐったいっ」

くすぐったがり屋さんなのかしら？ 悶える早美も……なかなか

……。

「レーナ……」

隣のカズ、ものすごいオーラを出しているカズと目が合ってしまったので、あたしは名残惜しくも早美を解放した。

「でも本当に、こんなにすっきり勉強できたの初めて」

「玲奈のやる気と集中力がすごいからだよ」

カズは相変わらずあたしを睨んでいたので、あたしはそっちを見ないようにした。

「ごめんね、だって抱きつきたかったんだもん。」

「お腹すいたね。お昼にしょ」

それからあたしたちは仲良く焼きうどん作りに励み、デザートには早美が持ってきた有名店のゼリーを食べ、疲れ切った脳に休息を与えた。

「レーナ、覚悟しておけよ」

「え？」

食事の後片付けの最中、早美がお手洗いにいった隙についてカズが小声で言った。あたしはようやく午後の先生役が誰だったか思い出した。

「どうか…お手やわらかに」

「いやまさか。レーナの数学のためにがんばりましょー」

それはその通り。あとは数学さえなんとかすれば、修一と同じ大学への道は開けるはず！

でも……。

「早美に教えてもらいたかった…」

「それ贅沢。早美……吉澤だって今日何かしらの苦手を克服する権利あるんだから」

そうだよ、カズも、早美って呼びたいよね……。

「お前、今関係ないこと考えてただろ」

さすがカズ、あたしの心を読み返したわけね。

「うん、早美って呼びたいんだろうなって」

カズは少し間を置いて返事した。

「そりゃあね。呼びたいし、呼ばれたいし、メアドだって知りたいし、抱きしめたいし……」

「根に持つてるわね。同姓の特権よ。悔しかったら女になってみなさいっての」

「遠慮しとく。女になったら、早美とカレカノになれねーし」

ぐ…正論だ。

「せめてメアドくらい聞けばいいのに。早美はダメなんて言わないと思うけど？ あたしときもあっさり教えてくれたし」

「同姓が聞くのとそうでないのではけっこう差があるだろ。男が聞く場合、下心があるって勘ぐられるのも嫌だし。それに、受験生だし、頻繁にメールできるわけでもないし……」

うーん、暗い……。

「下心、バツチりあるんだからしょうがないじゃん」

「ないとは言わないけど……もう少し純粹なの」

カズとはずっと仲がよかったけど、こんな話をするのはそういえば初めてだ。

彼の兄である修一との関係を相談するのは近すぎて気が引けたし、カズに彼女がいるときは、あたしなりのその彼女への遠慮もあつてなんとなく距離を置いていた。異性と恋愛関係の話をざっくばらんにできるには、まだ少し幼かったんだと思う。

今こうして語り合えているのは、あたしたちが大人になったからか、相手が早美だからか…。

「もう十月になるし、席替えもあるから…」

「そっか……」

あの席でいられる時間は残りわずかなのだ。あたしもカズも、また早美のそばになる確率なんてかなり低いだろう。

なんとかして接点を保とうとするカズの気持ちはよくわかる。物理的な距離は離れてしまっても、少しでも近くにいたい。それはあたしも同じ。

「メアドの件はあたしから話を振ろうか？」

「いや」

何か吹っ切れたように、カズはつぶやいた。

「自分で聞く」

時間は一時半。早美が戻ってきたのを機に午後の勉強を再開することになった。

「飲み物とお菓子持つてくから先に行つてて」

早美の「玲奈ばかり」を遮って、あたしは笑顔で手を振る。

あからさまなお膳立ては嫌がられそうだけど、このくらいならナイスパスでしょ？

「行こう、吉澤」

カズのほんの少し硬い声が早美を導いて、二人は階段を上ってい

く。

さて、なんて言い訳をつけて遅れていこうか。お菓子をまき散らしたことにでもすればいいかな？ それとも、修一からのメールに返信？

カズと早美、二人をみていたら、なんだか無性に修一に会いたくなってきた。あたしたちの関係は、こちらからアプローチをしまくっていた。あんな風に修一があたしのことを想って緊張していたことってあったのだろうか。

カレカノになる前のどきどき、嫌いじゃない。もちろん、お互いのことをたくさん知った今の関係にも満足しているけれど。

二分経過、そろそろかな？

グラスに氷を再投入してオレンジジュースを注ぐ。お菓子の皿にはチョコレートを盛る。あれだけ食べた後だから、大盛りは見た目にもげんなりするだろうから控えめに。

フライングしてつまんだトリュフチョコは、ビターテイスト基本にほんのり甘みが広がって、あっという間に溶けていく。甘さを追いかけて、また口に入れてしまう。

癖になるこの感じ、早美みたい。

カズ、がんばってよね。

うまくいつて欲しいし、応援している。でも、無理強いはだめ。

あたしの大好きな早美を傷つけたら許さないから。

エピソード19

華の高校生。

受験生。

恋。

将来。

早美。

自分。

どれも大事。

今できることは、バランスを取りながら全力を尽くすこと。

11月に入ると、すっかり冷え込んだ気温とは対照的に受験のムードはいっそう熱を帯びる。

センター試験まで2ヵ月を切っている。クラスの休み時間などの雰囲気も、落ち着きなく殺伐としていた。話題はもっぱら第一志望校と足りない点数について、私立はどれだけ受けるか、そんな話もちらほら。受験勉強の進度の探り合いがあちこちで行われ、他人に左右されて一喜一憂する友人たちがいる。

俺だつて焦らないわけではないが、滑り出しがよかったからか、苦手科目が克服できつつあるからか、まだ落ち着いていられた。

苦手科目が克服できたのは、先週の土曜日のおかげだ。

宝物も一つ手に入れた。ボタン一つで早美とつながれる、便利なもの。

レーナの言った通り、早美はなんのためらいもなくアドレスを教えてくれた。赤外線で短くやりとりをして、夜に俺がなんて送ろうかと悶々と悩んでいる間に向こうからメールが来た。内容は、勉強会の会場を貸したことで、化学を教えたことに対してのお礼だった。後で知ったことだが、早美はレーナにも似た内容のことを送ったら

しい。その平等さが少し憎らしくて、翻弄される。

最後に「おやすみ」を送るときなんて、次があるのかどうか不安に苛まれ、なかなかボタンを押すことができなかった。

俺から始めなければ、次なんてあるはずがない。

「迷惑かも」や、「受験生だし」という臆病風なのか正論なのかはつきりしない考えが、俺をさんざん揺さぶって、次のないまま3日目を迎えた。

ただ 彼女を理由に、勉強が手につかないなんて言い訳を絶対にしたくない。するわけにはいかないから、勉強は自分のペースで精一杯やっている。それが俺の意地。

今日 宝物を宝の持ち腐れにしたまま、席替えというイベントがとうとうやってきた。

6限目の数学が始まる前の休み時間は、この特等席でいられる最後の休み時間だった。窓側の壁に背中を付けて、右側に早美を感じていられる最後の……名残惜しむように、なんだっていいから話題を探していた中で、以前からの疑問のひとつを投げかけてみた。

「どうしていつもこの席なんだ？」

そう問いかけると、早美は少し考えてからにつこり笑った。

「うん。どうしてだと思う？」

早美と仲良くなるにつれて、彼女のことが少しずつだが、わかってくる。

最初のイメージ通りなのは、しっかりしていて大人っぽくて、潔いところ。けっこう照れ屋で、困った顔で微笑んでいる早美は、きつと他の野郎どもは知らない。できるなら、見せたくない。そして時々意地悪なクイズを出してくる子どものように実に楽しそうに笑う早美は、ここまで仲良くなれば知ることができない早美だ。

「やっぱり特別な理由があるんだ？」

「あ、うーん、そうでもない……けっこう単純な理由」

「やっぱり窓側っていうのは見晴らしがいいから？」

「うん、それは当たり前。もうひとつ理由があるけど」

そのもうひとつの理由はいくつ答えを言ってみても当たらなかったもので、もうひとつの疑問に移る。

「どうして一番後ろじゃないのか、ずっと気になってんだ」

いつの間にか早美本人を気にしていた　そんなことはもちろん言わずに。

「俺が思うに……」

当たっていないこと祈りながら、俺はその考えを口に出した。

「そこから、好きなやつが見えるとか……？」

「え？」

「……いや、その……前の道路の向かい側の店とかに、好きな人がいるのになって……」

声に出してしまってから、じわじわと後悔が押し寄せてきた。

実はそうと言われたら、俺はどうするのだろう？

笑って話題を続けらるのだろうか？

早美の前では、時々どうしても考えなしな自分になってしまう。

いつもはもう少し、冷静でいられると思うのに……。

「まさか。違うよ、それだとちょっとロマンチックだね。でも、もつとつまらない理由」

よかった……違って。

俺はぎこちない笑みを、なるべくぎこちなく見えるように浮かべる。

「そっか。もう降参……教えて？」

これ以上、心臓に負担をかけたくない。

「でも……聞いたら呆れられそう」

なんだか早美の声色に元気がなくなってきた。渋る様子を見せる早美は、暗に拒絶を表しているような気がして、俺は少し焦った。

「ますます気になるし」

ちよつと強気に詰め寄る。

困ったように笑う早美。

席が離れてしまつたら、こんな風に話すことはできなくなるかもしれないのだから…。

「お願い」

俺の押しが効いたのか、早美は観念したようにぽつりと言った。

「実はね、めんどくさいからなの」

「え、めんどくさい…?」

めんどくさい　なんだか早美に……。

「湯本くん、わたしに似合わない言葉だな、なんて思っただけ?」

「う…思つた」

すごい…早美とも意志疎通ができてる……　ってそれっていいことなんだが、想いがばれそうで焦るべきなのか……。

「やつぱり。湯本くんは絶対、わたしのことをいい風に誤解しているんじゃないかと思うの」

早美がため息をつく。どうやら俺は、がっかりされたらしい。

「だって吉澤は…」

言い出したはいいが、後が続かなかった。早美を見ると、俺がいま語ろうとしている、俺が抱いている早美のイメージは、彼女には不満らしいことがわかる。確かに、他人に勝手にレッテルを貼られるのは、気分は良くないだろう…。

「えっと…」

「いい風に見てくれるのはうれしいんだけど」

一旦言葉を切つて、彼女は言い添えた。

「そんなにできた女じゃないのに」

静かな言い方が、早美の周りを独特の世界に変える。辛辣で、自分を戒めるようないい方。

目には見えない帳が、二人の間に一瞬で降りてきたような気がする。

それが二人の決定的な距離のようで、このままではどんなに近づこうとしても永遠に届かないと暗示しているかのようなだった。

いままでの早美とは

訂正

俺が抱いていた早美のイメージ

とは違う一面に触れたのだ。

俺の知らない早美。

どううやら「そんなにできた女じゃない」早美。

いつものように綺麗な横顔を見つめる。いまは少し沈んだ表情をしている彼女に向けて、俺はゆっくり言葉を吐いた。

「じゃあ」

だから、恋はなんとかっていつのか。

「本当の吉澤を教えて」

もっと、知りたい。

表面も、裏側も、全部。

ときどき詰まってしまうのは、俺がまだガキで、受け止められないかもしれないと怖くなるから。けれど、そんなこともさっさと超越して、もっと知りたいと思っている。

それは本当。

窓の外に目を向けていた早美が、なにかを考え込むようにしてゆっくりこちらを向いた。

あの、見透かすような真っ直ぐな目が俺を見る。

俺の中では、たくさんの思いを込めて言った言葉だった。

彼女に、早美に、どこまで伝わったかはわからないけれど、これが俺の本心だから、言って後悔はない。

教えて…。

「あのね、後ろがいいのは」

ぼつりと。

「好き勝手しやすいから。でも、一番後ろの席だとプリント回収の仕事がある」

早美が言う。

「うん、あるね」

「あれ、苦手なの。この狭い教室には40個も机が並んでいて、間を通るのに一苦労なのに、うちの学校はロッカーがないから荷物を机の横にかけるしかない。だから余計に狭くて荷物にぶつかったり、

机の上の荷物を落としちゃったり…歩くたびに何かトラブルが起こりそうなところが、すごく苦手なの」

「なるほど…」

なるほど、早美の主張は的を射ていて納得できた。彼女は人混みを嫌いそうだと、想像がついた。なんとなく、だから一人でスタスタと歩くのかもしれない、そんなところまで想像は飛ぶ。

「あゝもうごめん、つまらない理由で…」

ちよつと慌てて言い添える早美は、照れて戸惑う早美と同じく、俺が知っていた彼女になっていた。

「いや、めっちゃ合理的な考えだなんて感心した。俺なんてただ、一番後ろだと教師の目が一番届かないだろうなってことぐらいしか考えないし。…もしかして俺、窓際のもうひとつの理由もわかったかも」

新しい早美の一面は、ますます俺を彼女に惹き付ける。

もうとつくに、俺は彼女に囚われている。

「荷物を吊るす場所が壁際だと気兼ねなくて便利だから？」

「大正解」

イタズラが見つかってしまった子どものように笑う早美はやっぱり可愛くて……。

「オススメだよ、ここ」

「確かにいい席だよな。でも俺たちは選べないから、偶然に期待するしかない。タカの代わりに学級委員長にでもなっておくべきだったか」

そうしたら、早美ともつと早く接点を持っていたかもしれない。

「でも、窓際の後ろから一つ前の席はひとつしかないからね、ケン力になっちゃうかも。もし湯本くんも席を選べる人だったら、きつとわたし、教えてなかったよ」

いまの俺だから、教えてもらえたわけだ。起こらなかった過去があつてこそ今の今ならば、今の方が断然いい。早美の秘密をひとつ、違う一面ももうひとつ知れた今の方が…。

それに、もし席を選べたとしても、気持ちがばれるのが怖くて、どうせ近くの席なんて選べない臆病な自分が想像できて、一人苦笑する。

「運命の女神様、どうかお願いします…ってね」

「あ、ごめん、やっぱりわたしはまたここにしちゃったの」
今朝担任に聞かれたそうだ。

「わかってる。そこは吉澤の特等席だよ」

早美は廊下側もいいよと言ってくれたけれど、本当になりたいのは……。

「俺の狙いは別のところ」

彼女の近くなら。

どこでも。

つまり早美のことだったら、早美だったら　もう何でもいいのかもしれない。

そう考えると、複雑な気持ちと暖かな気持ちが同時に押し寄せてきた。

囚われている。

苦しくて、心地よい。

チャイムは授業の始まり　最後の休み時間の終わり。

ずっと席を外していたレーナが戻ってきた。

「玲奈、どうしたの…？」

早美が聞かなければ、俺がそうしていた。そのくらい、レーナの様子がおかしかった。さっきまでは、俺たちと明るく喋っていたのに。

「うつん、なんでもない…」

それは俺にだって嘘だとわかる。

「玲奈、無理には聞かないけれど、つらいなら我慢しないで」

早美の真剣な言葉は、レーナに届いたのだろうか…？

「ん、ありがと、大丈夫なんだけど、ちょっと…」

何かを堪えるように、途切れ途切れに話すレーナ。

教師が遅れてやってきて、慌ただしく授業の開始が宣言される。

タカの号令で、クラスの全員がけだるくその場から立った。

レーナもそれに従ったので、俺たちはもう口を挟めなかった。具合が悪いなら保健室に行くなど手があるが、そういうものではないのだろう。

「後で、話して。絶対」

早美がそつと囁きかけると、レーナは小さく頷いた。

唇を噛みしめているレーナはひどく痛々しかった。

受験、恋、友情 高校生に暇はない。

エピソード20

こんなに簡単に、人の気持ちは変わってしまう。
立場も。

こんなにもろくて、儂くて　そもそも最初から、偽りだったの
かもしれない。

「かもしれない」なんて、今さらかしら？
あたしはずっと感じていたし、そんな場面を不本意ながら立ち聞
きしてしまったこともあったはず。

あのときから　もしかしたらずっと…？

知っていたのに。

あたしは。

弱いから。

目を背けていた。

授業が終わって、HRの前に席替えをした。早美は変わぬことな
くあの席を選んでいた。彼女の特等席。

カズは廊下側の一番前の席になった。扉付近だから落ち着かない
し、冬は寒そうだとぼやきながら、机を移動し始めた。その後ろ姿
は悔しげだった。

あたしは、今の席から右に3つほど平行移動した場所だった。理
系女子の悩みどころ、前後左右、ついで斜め、あまり話したことが
ない男子に囲まれてしまった。

どのみち、ひそかな望みはかなわなかった。

ほんの一ヶ月前には予想なんてできなかったほど、あたしたち3
人はなかなか関係を築けていた。性別、性格、趣味…同じ理系だ
というのに得意な科目さえ全然違う3人だったけれど、もちろん色

々な水面下の思惑もあったからだけど、なんだかうまくいっていたのだ。

今さら。

気づく。

あたしは毎日の短い休み時間が本当に楽しかったのだ。

一緒にお昼を食べ、トイレに行き、同じ興味を持つ話題に花を咲かせている、仲の良い友達だと思っていた人たちと一緒にいるよりも……だ。

HRが終わるとすぐに補習が始まる。今日の補習はどうしても身が入らなかった。

あたしのことを、カズと早美は心配してくれていた。すごく伝わってきた。でも、いままでのように振り向いたり、横を向いたりするだけで、気軽に話しかけることができた距離ではなくなってしまうのだ。

早美は真剣に向き合おうとしてくれたのに。

その言葉や態度が、どん底のあたしを救ってくれたのに。

あたしは早美の顔をうまく見れずに、カズの制止も無視して、補習の終わりと同時に教室を飛び出していた。

結局、逃げ込んだ先は 湯本家の修一の部屋だった。

「……おいしい」

「俺の作る特製ココアは姉貴御用達だからね。落ち着いた？」

「うん」

「理由、話せそうか？」

いつもはバイト三昧の修一だが、急な電話出てくれた修一はたまに家に来た。というか、やっかいなレポートの提出が控えているから、今週は会わないことにしていたはずだった。

「……ごめんさない。すぐ帰るから……」

「いいよ、レポートも目処がたったし。珍しい、玲奈の緊急事態だ

ったみたいだからね。…何があつたんだ？」

修一は鷹揚に笑って、あたしの頭をなでてくれた。

自分で言うのも何だけど、あたしはあまりわがママを言わない彼女だと思ふ。長女として、幼い兄妹の面倒を見てきたから、聞き分けのよさは長年の賜物だ。でも修一は、そんなあたしを甘やかしてくれる。

最初は子ども扱いをされているんだと思ったけれど、ようやくその扱いがあたしの我慢をほぐしてくれているのだと感じられるようになった。

だから、ますます修一のことを好きになっている…。

「あのね……結論だけ言つと」

「うん」

あたしは一呼吸おいて、言葉の一つ一つをゆっくり吐き出した。

早美が教えてくれた。長くて厄介な問題に出会つたら、解いているうちになにをしているのかわからなくなってしまうから、結論を先に言ってから始めよう、って。

「なかいちゃんとしようこから、ハブられたの」

「…その理由はわかつているのか？」

修一の促しに、あたしはうなずいた。

「昼休みに、あたしがうつかり、三人で勉強会をしたことを話しちゃつたの」

勉強会　先週の土曜日、ここ湯本家であたし、カズ、早美の三人で行われものだ。絶対に秘密、なんてつもりはなかったけれど、なかいちゃんやしようこには言わない方がいいと思つた。その理由は、たぶん言つてしまったら　抜け駆けしたとられてしまいそうだったからだ。そして実際、予想通り二人はあたしを非難した。

「あたしたちにも声をかけてくれたらよかったのに」

「だいたい、なんでその三人なの？」

その言葉の裏に潜むもの。

なかいちゃんとしようこは、あたしが吉澤さんをダシに使って、

カズにちよっかいをかけていると思っっているのだ。

あたしもうつかりしていた。先週の土曜日、二人にシヨッピングに誘われたのに、先約を理由に断ったのだ。そのとき気まずさから嘘の用件を言ってしまった。

だから、これはあたしの自業自得なミス。正直に言わなかったあたしも悪いのはわかっていけるけれど…。

そのときの二人の表情が、裏切られた、という悲しみが交ざったものだったら、あたしのいまの心境も、また違っていたかもしれない。

でも、二人の表情には、憤りの中に、確かにあるものがあつた。

嬉しさ。

彼女たちは正当な理由を見つけ、嬉しそうだったのだ。

カズというイイオトコと仲が良いあたしを、嘘つきで、男好きで、最低な女と蔑むことができる正当な理由を…。

そんなふうに見てとったのは、あたしのこの目も歪んでしまっているからかもしれない。

弱さを言い訳にして、真実から目を背けていたから。

これは報いなのだろうか…。

これが　ハブられた事実があたしのこれまでの弱さの報いならば、それは言い訳なく受け止めたい。

いまなら、受け止められる。

いまだって、ハブられたことがシヨックなんじゃない。

いつかこうなるか、いつまでも薄っぺらな関係のまま続いていたかのどちらかだろう。

ただ、あたしが落ち込んでいるのは、シヨックだったからなんじゃない。

あたしは…。

「あたしは、カズにちよっかいをかけているなんて誤解も、解けな

くていいと思ってるの」

溢れだす水のような思いを、その言葉で一旦止めた。

修一に、あたしの思いは伝わっているだろうか…。

修一に伝わらなかったら、一体誰に伝えられるだろう。

確かめたくて、改めて修一の顔を見上げると、いつもの包み込むような表情に出くわした。

「玲奈は、誤解を解くことで、吉澤さんや一哉に彼女たちの悪意が向いてしまわないかと心配しているんだな」

「うん…」

そうなのだ…。

ただの女としての妬みで、あたしという憂さ晴らしができる存在が欲しかっただけなのか、それともカズという存在にこだわっているのか、二人の真意ははつきりしない。しょうこはタカが好きらしいから、なかいちゃんのカズのことを好きなのかもしれない。それならまだ、納得できるけれど、ますますベクトルはこんがらがる。「どんな理由にしろ、二人がカズに何かをするとは思えない。ただど…」

早美は…。

カズが　遊び人ばいのにクールでスマートな湯本一哉が　綺麗だけどこいかに優等生な吉澤早美を　好きだなんて…。

あたしが、カズの早美に対する想いを知っていて、さらに応援しているなんて…。

二人には、絶対想像できないだろう。

あたしだって、小さいきっかけから早美という人を知った。いまでもこ心酔しているけれど、タイプが違うからと線を引いていたままだったら、絶対に気がつかないまますれ違っていた人だった。

気がついて　気がつくことができて、本当によかった　心から思う。でもきつと、周囲の人はそんなふうに思わない。

「きつとカズの方が好きなんて、考えないと思う。だから、早美がカズを狙っているとか、そんなふうに思われて…嫌がらせされた

りなんかするくらいなら…」

「自分だけつらいままでいい…って？」

修一の言葉に、あたしは黙ってうなずいた。

いままでのあたしなら、誰かのために自分をつらい立場におくなんて考えもしなかった。けれどいまのあたしなら、早美のためにできる気がした。

あたしの憧れで、救いでもある人。

あたしの友達。

彼女もそう思ってくれるなら、もう一歩進んだ関係になりたい。

「弱い自分から、さよならしたいの」

早美のおかげで、あたしは自分と向き合うことができた。

だから…。

「玲奈。その覚悟はすごい」

修一は一瞬間をおいて、続けた。

「ただし、覚悟することが間違っていると思っただけ」

予想外の言葉に、あたしは啞然とした。

「…どうして？」

あたしは食い入るように修一を見つめる。

頑張れと、背中を押してくれると思っただけ…。

「玲奈は、吉澤さんと親友になりたいと思っている。そして彼女にもそう思っただけだと思っただけ。それなのに、玲奈は吉澤さんの意思をまったく確認せず、彼女に何も知らせないというやり方で彼女に嘘をつくんだ」

「それは…だって、早美はあたしのいざこざとは関係ないじゃない。巻き込みたくないわ！」

「でも、親友になってほしいと思っているんだろ？ 俺は玲奈の話からしか、その吉澤さんを想像できないけれど、彼女も玲奈に心を開いていると思うな。俺なら、親友がほしい目にあっていたら心配だし、なにか助けになれないかと思うよ。自分を頼って、相談してきてほしいと思う」

「あたしは…」

また。

見つけた。

あたしの弱さ…。

厄介なことに巻き込んで嫌われるくらいなら、自分だけ我慢すればいい。

そう言って、また逃げようとする…。

「だから、玲奈に必要な覚悟は、楯になる覚悟じゃなくて、大切にしたい人と向き合う覚悟だよ、きつと」

修一はいつも優しい。

甘やかしてくれて、楽しませてくれて、ほっとさせてくれる。

時々　すごく厳しい…。

「大丈夫。玲奈は自分と向き合える。彼女もきつとわかってくれるよ」

その存在は、いつもあたしに勇気をくれる。

「うん…」

修一にぎゅっと抱きついて、あたしは心から言った。

「ありがとう…」

今度こそ、本当の意味で弱さからさよならしたい。

こうして支えてくれる人がいるいまならきつと、できるから…。

「あ…でも」

はた、と思った。

「うん？」

「早美に全部言っとなると、カズの想いも言っちゃうことになるから…」

それはいくらなんでも、カズに申し訳ないと思った。それはあたしの口から言っべきではないことだ。

「あゝそうだな…。それは、ぜひ当人と相談しよう」

「カズと？」

「そう、一哉と」

修一は、につこりと微笑むと、ドアの方に向かって呼びかけた。
「入ってこいよ。人の彼女に、ここまで恋路を心配させている弟くん」

「は？」

困惑するあたしの目の前で、ドアはゆっくり開いた。そこには無然としたカズが立っていた。

「え？　なんでここに…」

「ここは俺の家でもあるんだけど」

それもそうだ。当たり前前の質問をした自分に赤面した。

「それはそうだけど、なんでそこに立ってるのよ。……いつから？」

「結論から言うと…から」

「ほとんど最初じゃん…」

カズはぼつりと言ってから、その表情をなんとも形容し難いものに変えていった。驚いたらいいいのか、憤ったらいいいのか、どうしたらいいのかわからないという表情だった。

「全然気づかなかった…。修一、教えてよ！」

気まずさからあたしが当たるも、修一は飄々と答える。

「悪い。でも、一哉も当事者だから、知った方がいいと思ってね。そうたる？」

「ああ…。知らずにいたらと思うと、ぞっとする」

カズは言葉一つ一つを噛み締めるように言った。心なしか、睨まれた。

「なによ…。だって、あたしだけの問題かもしれないわけだし。カズが関係してるのかどうかはつきりしなかったし…」

「そうやってなんでも一人で抱え込もうとするのがレーナの悪いところだ」

責められて悔しいけれど、少しくすぐったかった。

「なかいちゃんやしようこちゃんのこと、あの二人がどんなつもりなのか、俺もよくわからない…。けど、俺が早美のことを好きな

せいで、彼女に迷惑がかかるかもしれないなんて……冗談じゃねえ」
カズの内部に、青い炎が垣間見えた気がした。

「落ち着いて、当事者のお二人さん。これから二人は同盟者だ。仲良くいこう。さしずめ『二人のラブリーアイドル吉澤早美のために
なにができるか考える会』ってとこかな。不服はあるか？」

「「名前が微妙」」
声がそろった。

「仮名称だよ、そこはほつとけよ。これから…二人の女の子がどんな行動にでてくるか、早美ちゃんに何を伝えて何を伝えないか、そして三人の関係はどうなるのか…。いよいよ受験真つ直中だつてのに、お前たちはこの微妙な人間関係に立ち向かっていかなければならないんだから」

修一の言葉に、あたしはこれからのことを思った。

受験真つ直中。でも、あたしたちの人生は、それだけが目的じゃない。日々の生活があつて、そこに感情がうごめいて、次への動力になっているのだ。

見なかったこと、聞かなかったこと、知らなかったこと　なかつたことにはできない。
目は背けない。

カズも、色々なことを考えたみたい。瞳の奥から訴えるものがあった。
つた。

「まずは、早美ちゃんにどこまで伝えるかだが…」

「勝手に早美ちゃんとか言ってるじゃねえ、エロ兄貴」

「ふん。どうせ本人の前じゃ名前さえも呼べないガキに言われたくないね」

「なんだと…」

ちよつとちよつと！　そういう兄弟けんかは後でやってほしい！
「二人ともうるさい！……あたし、早美ともつと仲良くなりたいの。そして、カズとうまくいってくれればいいと思ってる。もちろん早美の気持치가最優先」

「…俺だって、同じことを思ってる」

あたしたち三人の視線が交錯する。

いまここに、同盟だか、なんとか会だかが発足した。

アドバイザーの修一はともかく、あたしたちは当事者で、願いがあ

あたしたちの中の真の当事者である早美は、こんなことになって
いるなんて想像すらしていなだろう。あたしたちがこの先どうな
っていくのかなんて、誰にもわからなくい。だから不安で、だから
期待できる。

どうか、明日早美と話ができますように。

謝れますように…。

席は離れてしまっ

てけれど、この関係はそんなにもろくないって

信

じたい。

このあいだまでのあたしなら、明日学校なんて行きたくなかつた
だろうけど。

いまは、希望がある。

だからあたしは、明日を楽しみにしている。

エピソード21

もし俺の想いが、彼女に迷惑がかかるというなら。

俺はこの想いを諦めるのだろうか。

嫌いだと言われ、わずかな望みもないとわかったら、やはり諦めるべきだろう。

そうではなくて、周囲の思惑が絡んでのことだったら、どうだろう。

それは、諦めれるものなのだろうか…。

レーナと、レーナを送るために兄貴が家を出た後、俺は自分の部屋に戻ってケータイを開いた。

メールのツール、宛先は、吉澤早美。

内容は…レーナのこと。

元気のない顔をして戻ってきたレーナを俺たちはかなり気にしていた。しかし、密かな願いも虚しく、席替えによって三人は離ればなれになってしまった。補習終了後、逃げるように教室を飛び出して行ったレーナを、俺は見送ることしかできなかった。

あの後早美も急いで教室を出たが、追いつけなかったらしい。玄関で途方に暮れている早美を見つけた。

「…玲奈、大丈夫かな？」

バカレーナ…と俺が思ったのも無理はない。心配ごとを抱え込むことは、周りに余計に心配させることになるのだ。

「たぶん、兄貴に会いに行ったんじゃないかと思う。あいつの泣き場所みたいだし…。レーナ、今は色々と混乱してるんだろう」

「うん。明日は話してくれるといいんだけど…」

そうつぶやく早美は、いつもの外見の高潔なイメージとは違い、友達を心配する普通の高校生で……。

ここが玄関でなかったら　それ以前に、俺が正当な早美の彼氏
だったら　抱きしめていた。

抱きしめて、大丈夫だと励ましたかった。
スラリとした背の高い早美も、俺の腕の中にすっぽり収まるよう
な気がした。

さらさらな髪からは、どんな香りがするのだろう……。

なんてことを考えている場合ではないわけで……　なんとか妄想を
追いやる。

「兄貴にもそれとなく聞いてみるから、吉澤もそんなに落ち込まな
いで」

「うん……」

思えば、球技大会の日の体育館と、教室の隣の席以外の場所で、
初めて彼女と喋った。

お互いが別の人といるときなど、話しかけないようにしていたが、
元々俺と早美が話すことに制約なんてない。

勝手に俺が、線を引いていたのだ。

周囲の思惑も気にはなるが、そんなことを気にしては、早美
との関係は何も始まらない。

わかっていたはずだ。俺から行動しなければ、約束しなければ、
次はない。

片思いならではの　たくさんの人たちが、一度は経験したこと
があるだろう　切なくて、虚しくて、甘い気持ち。

迷惑がかかるくらいなら、諦めるべき……？

まだ、想いを伝えてもないくせに、そんなことを考えるのは愛で
もなんでもなくて、ただの逃げだと思う。

レーナも協力してくれる。状況は悪くない。時期は微妙だが、先
のばしにしたって、未来が重なるとは限らない。

心も体も正直で、徐々に膨らんできた想いは、この器から溢れだ
したがつている。

俺が勇気を出せばいいだけ。

だから、メールするくらいでビクつくな…俺…。

『兄貴と話して、レーナも落ち着いたみたい。明日、レーナ自分から話すって』

送信。

机の上に問題集などを出して、勉強の準備をする。さっき母親が帰ってきたみたいだから、あと30分ほどで夕食だろう。先に風呂に入るべきか…。

色々と考えているうちに、すぐ返信が来た。

『メールありがとう。おかげであたし自身が落ち着いたよ。明日、玲奈を待つね』

明日。

レーナは早美と話す。

俺の想いを抜きに。

レーナと早美の友情はきつとうまくいく。早美はなんだかんだつらい立場におかれるレーナを救ってあげられると思う。

あとは、俺との関係は。

自分で行動すればいいだけ。

昨日の明日、今日。

俺が教室に行くと、早美とレーナは笑顔で迎えてくれた。

席はもう離れてしまったが、レーナがああ早美の席の近くの窓際にたたずんでいた。俺の新しい席は、教室のドアのすぐそばだが、荷物だけおいて二人に近づく。

早美とゆっくり話すとすれば、朝がいいだろうとアドバイスしたのは俺だ。レーナはちゃんと朝早くに教室に行き、目的を果たしたようだった。俺も、いつもより少しだけ早く家を出た。

「おはよ」

「おはよ。昨日は心配かけてごめんね」

「色々ありがとう、湯本くん」

晴れやかな表情の二人に言われ、俺は小さく肩をすくめる。

「俺はなにもしてないよ。二人でちゃんと話したんだろ」

玲奈が、勇気を出したのだ。そして早美は受け止めた。

「えへへ。今日お弁当、早美と食べるんだ。早美のお勧めの場所教えてもらうの。カズも一緒にどう？」

いままで早美とレーナは、そういう場面で一緒に行動していたわけではない。はしゃぐレーナの様子を見て、俺もなんだか嬉しくなった。

「今日はせっかくだし二人でどうぞ。次から合流させてもらう」

今日だけはレーナに早美のそばを譲る。でも次からは、退くつもりはない。

「明日の模試のために、漢文をちょっと教えてもらうんだ」

それも羨ましいが…。

「…次のときは、俺のために教えて」

今日は、譲る。

「了解」

屈託なく笑う早美のそばにもう少しいたい。レーナも同じように思っているだろう。昨日までの位置関係が懐かしいが、新しい関係も始まっている。

だから、そう悲観しない。

朝のやりとりの後から、レーナは前向きにがんばっていた。

移動教室のときなど、ひとりぼっちになって気まずさや不安がないはずはないだろう。

二人の女子はあからさまにレーナを避け、端から見ても嫌な感じだ。

それにも関わらず、俺や他の野郎に対するときは満面の笑顔なのだ。事情を知っているこちらが引いてしまうのも、仕方がないというものだ。

「ゆもくーん」

だから、渦中の二人に突然呼び止められたときは、正直身構えて

しまった。

ちょうど、俺が一人で廊下を歩いていたときだった。

「最近、レーナや吉澤さんと仲良いよね。…なにかあったの？」

これは……。

どういづつもりの質問なのだろう…。

なかいちゃんとは相変わらず、無邪気そうに下からこちらを覗き込んでいるし、隣のしょうちゃんも、につこり好意的にこちらを見ている。

レーナ側の誤解はあえて解かない…それがいまのところ『吉澤早美なんとか会』の約束ごとだ。

「…レーナは別に、昔から仲良いよ。吉澤は…お互いわからない問題とか、教え合ってるだけだけど？」

なんでそんなこと聞くの？　みたいな雰囲気を出して、俺は薄く笑って答えた。

「あ、そうなんだー」

「最近あの二人、ゆもくんになつたりだよー」

あの二人…？

それはレーナだけではなく、早美のことも指している…？

「まあ、かわいい女の子になつたりされて、嫌がる男はいないけどね」

目の前の二人のことについて言つたつもりはないが、なかいちゃんとしょうちゃんがどのように受け止めたかはわからない。俺はそんな二人を後にして、さっさと教室に戻った。

あの探るような目、媚びるような仕草の前にいると、気分が悪くなる…。かわいい女の子は、それなりに好きだったはずだが……。

教室で視界に入ったレーナは、暗い顔もせず、しっかり背筋を伸ばしてそこにいる。

昔から知っていたレーナの成長に、俺は目を見張った。

俺も、成長できるだろうか…。

「カズ、変わったよな」

椅子に座ると同時に、隣の席から声がかけられた。

にこにこしながら話しかけてきたのは井上俊太。

女子たちの思惑にはまったく気づいていないような感じが、なんだか妙に俺をほっとさせた。

俊太は俺の想いを知っているから、早美に関することで隠す必要はない。

「俺が？ 変わったかな…？」

「変わったと思う。最近吉澤さんといい感じだし」

にこにこ ニヤニヤなのかもしれないが、俊太の笑い方は嫌らしくない。

「そうだな…ちょっと進展あり」

そういえば、あれから俊太にはなにも言っていない。俊太はからかうでもなく、俺を翁のように見守っていてくれたようだ…。

「おや、なにになに？」

「……メアド交換した」

「おお…！ って、遅くない？」

「自分でも思ってるって…。しかし、この一步は人類にとっては単なる一步でも…以下省略」

「実際は逆だって。でも、よかったな」

俺は頷いた。

早美とは、確実に距離は縮まった。

「応援してるから」

そう受け合う俊太の横を、教室に入ってきたなかいちゃんとしようこちゃんが通り過ぎる。

女の子二人の動きも、気にはなるが…。

「まあ、勉強と平行して頑張るよ」

「うわ…嫌味な発言来た」。俺にもっと勉強頑張れって言ってる？」

「深読みだつての。まあ、明日重要な模試だけど」

「うわ、甘酸っぱい話題からいきなり現実に戻しやがって…」

俊太は深々とため息をついた。受験生の１１月の反応としては妥

当だ。

俺はまだ幸せなのだろう。ちゃんと勉強にウェイトを入れている。なんとか、バランスよくやれているから……。

翌日。

土曜日だというのに、高校生たちはそろそろと学校に集まってきた。二日間かけて、センター試験のプレ模試を受ける。

大学進学を諦めている人間以外、すべての高校生が受ける。俺のように塾や予備校に通っていない生徒にとっては、学校で開催してくれる模試ありがたいものでもある。気分的に、両手をあげて喜ぶほどではないが……。

一日目は文系科目だ。早美からコツを教わった国語は、なかなかの手応えを感じて終えられた。レーナも嬉しそうにしていたから、思いがけずできたのだろう。

わずかな昼食の時間を挟んで午後のコマが開始され、ようやく一日目が終わる。

「カズ、帰んねーの？」

ぐったりした俊太に誘われたが、俺はまだ教室に残った。

「ねえ、カズ、国語できたよね！」

早美の席のそばには、実の上機嫌なレーナがいた。

「ばつちり。さすが吉澤先生だ」

早美も、レーナのキラキラ感謝光線を受けて、嬉しそうに笑った。

「二人がこんなに早く苦手科目を伸ばしてくるなんてびっくり。わたしもうかうかしてられないね」

「じゃあ明日の数学、勝負な」

早美の目もキラリと光る。

「あ、負けないからね」

「俺のセリフ」

挑戦的な早美も、かつこよくてかわいい……。

「あたしも負けない…って言ってみたいけど、そこまで身のほど知らずじゃないし…」

と、レーナが膨れた。

俺たちは模試を話題にひとしきり盛り上がった。お堅い話題かもしれないが、野郎どもとする話より実がある。

すると、レーナが珍しい提案をした。

「ねえ、甘い物でも食べに行かない？ お勧めのケーキ屋さんあるんだ」

なるほど、この三人では初めての試みだ。きっと楽しい時間になるだろう。

「ごめん…わたし今日はちょっと無理なんだ」

俺のテンションは柄にもなく上がったが、隣の早美は心底申し訳なさそうに言った。

「えー…残念…」

「うん…美容院の予約、4時から入れてて」

レーナは一瞬しょんぼりしたが、すかさず提案した。

「早美、明日は空いてる？」

「空いてるよ」

「じゃあ明日行こう！」

「いいの？」

どんだん話しを進める二人を、俺は黙って見守っていた。

レーナはまったく俺の予定を確認しなかったが、どうやら三人で行くことにはなっているらしい。

なんだか……。

デートみたいだな……こぶ付きだけど…。

そう考えると顔がにやけてしまいそうになり、俺は黙って口筋を引き締めた。

バスの早美と歩きのレーナを玄関で見送り、俺も自転車置き場に向かった。

どうやら俺は、わくわくしているらしい。明日の理系科目は割り
と得意だし、早美は髪を切ってくるといふ。ケーキ自体はそこまで
好物じゃなくても、一緒に食べに行くという行為にテンションが上
がる。

元々、レーナと一緒にいるのは楽だったが、そこに早美が加われ
ば、俺は早美の一挙一動に振り回される。それは心地よい緊張感が
あり、もどかしくもある。

もっと、先に進みたい。

早美を独占したい…。

俺は自分の自転車の前で立ち止まった。

ただ、この関係も、悪くはない。

この距離感でいれば、早美はずっと笑っていてくれるだろう。傷
つけることもない。この関係を壊したくない。これも、逃げか
…？

自分の中の想いに葛藤し、その葛藤は直接行動につながる。

慇懃にサドルに股がり、のろのろとペダルをこいだ。

俺は…。

早美自身も、早美の心も、両方手に入れたい。

でも笑っていてほしい。傷つけない。

そのためには…。

「俺のこと、好きになってくれたら一番なんだよな…」

想いは思いがけず、音となって空気中を漂う。

恋する人々が、狂おしい想いの中で何度考えたことか。

俺がたどり着く先も、なんの特別さもないところ。

ただ、胸を張って言えることは、彼女に対するこの想いは、誰よ
りも特別だということ…。

いま、俺、恋してるんだな…。

改めて自覚すると、やっぱり少し照れくさかった。

脳内を切り替えるように頭を思いっきり振る。

端から見れば変なやつだ。仕方ない。健全な高校生だもん…。

頭を振り止めたその時、俺の視界に意外な人物の姿が飛び込んで来た。

俺の先の路地を歩く二人組。
なかいちゃんだった。

そして隣にいたのは、男。

それも……タカこと、高橋貴行。

俺のよく一緒にいるメンバーで、いわゆるイケメン。女の子に不自由なく自由に、特定の彼女はいないというおいしいやつだ。

タカ自身、なかいちゃんたちとは仲がいいから、一緒にいても不思議ではない。しかし二人きりで、しかもレーナに関するゴタゴタを背景に見ると、とても不自然に見えた。

レーナがハブられた理由に、なかいちゃんが俺のことを好きだからかもしれないという憶測もある（驚くべきことに、その事実を知っても俺は無感動だった）。そして、レーナによれば、しょうこちゃんもタカのことが好きはず。

それなら、あの二人と一緒にいる理由は…？

そうこうしているうちに、二人は路地を曲がり、その姿は見えなくなってしまうた。

自転車に乗っている俺は追いかけることもできたが、なんの確信も根拠もないままに二人を尾行することに、戸惑いがあった。

ただ、なんとなく。

嫌な感じがする。

胸騒ぎ。

でも、なんの根拠もない。

しばらくその場で悩んだが、俺は自転車を自宅の方へ向けた。

杞憂であればいいけれど…。

エピソード22

ほんの少しでも、あたしが強くなれたとしたら。

早美のおかげ。

早美がいてくれたから。

弱かったあたしを、そのまま受け止めてくれた。

強くなるうとしていたあたしの背中を押してくれた。

だからいま、あたしは笑顔でいられる。

前を見て、進んでいける。

日曜日。

あいにく、今日は休みじゃない。あたしたち高校生は、この寒々しい朝もマフラーに顔をうずめながら、学校に向かう。模試二日目は理系科目が待ち受けている。

数学でどこまで点数を取れるかが、今回のあたしの勝負どころだった。昨日の国語と地理は手ごたえがあったから、今日の科目も悪くなければ、自己ベストを更新できるかもしれない。それも、微々たる更新ではなく。

受験生。明日も明後日も……本当の春が来るまで、ずっと受験生なのだ。

でも、気持ちは前向きだ。

少し緊張しながら教室のドアをくぐれば、そこは受験生だけがいる空間。

「おはよ。空気、ピリピリしてるね」

すぐその席で化学のテキストを眺めていたカズに、あたしは何気なく声をかけた。

得意科目だからといって、天狗にならないところが慎重なカズらしい。

「受験生の11月なんてこんなもんじゃないのか？ 余裕だな」

「余裕なんかないわよ。あたしなりに頑張るって決めたんだから」
にやりと笑うカズを横目に、あたしは人と机を避けながら自分の席にたどり着いた。

教室の後ろのドアの付近から嫌な視線を感じたが、もう気にならなかった。

気にしないと決めたのだ。あたしは鞆を置いて、いつもの場所に向かった。

「おはよ。かわい」

「おはよう」

早美の席のそばは、あたしの大好きな場所だ。

「けっこう切ったんだね」

昨日の予告通り、早美の髪はさっぱりショートになっていた。長めの前髪が、サラサラと風になびく。後ろ髪は襟足に届くかどうかの短さで、あたしが早美に興味を持ちだしたところと同じくらいだった。綺麗な少年っぽい雰囲気、涼しげな魅力が増している。

「首元がちよつと寒い」

白いうなじに思わず目がいく。

別に……女の子をそういう対象で見ているわけじゃけれど、妙にドキドキしてしまう。早美の彼氏になる人は、どんな気持ちで彼女をみるのだろうか。

あたしが男だったら、これだけ近くにいれば絶対にくらくらしちゃう……。

「その髪型、あたし好きだよ。早美の神秘的な眼差しが引き立てられるし」

「なにそれ」

早美が笑うと、あたしも元気になった。

予鈴が鳴って、教室は慌ただしくなった。名残惜しいけれど、早美の席から自分の席に戻り、最後のあがきをする。

最初は数学から。諦めきっていない分、余計に緊張してしまう。

リラックス…リラックス……。

筆記用具の用意をして、その時を待つ。

ほんの少し。

不安があるとすれば 早美に依存しすぎていないか、だ。

早美に迷惑をかけていないか、時々不安になる。

つい、顔色をうかがいそうになってしまう。

自分らしく振る舞えなくなる またそんな瞬間が来てしまうかもしれない。

これがあたしの、完全には消えてくならない臆病さ。弱さ。

早美と、そんな関係にはなりたくない。

友達でいたい……。

だから、ただ逃げるんじゃないで、向き合っていきたいと思う……。

それまで考えていたことは一旦除けて、開始のチャイムと共に、

あたしは思考を完全に数学に切り替えた。

「終わった…」

そんなつぶやきがあちこちです。開放的な意味と、絶望的な意味と、両方聞こえる。

理科の二科目も無事終えて、あたしの疲労はピークを振り切っていた。頭をこの上なく使ったせいか、体は糖分を求めていた。

けっこう、できたと思う。もちろん手が出せない問題はいくつもあったけれど、確実にできなきやいけない問題はできた。自己採点を早くしたいと、初めて思った。

この感動を早く伝えたくて、あたしは席を立った だが、移動しなくても、そこにはすでに早美がいた。

「お疲れ様」

早美も、いつものスラッとした雰囲気よりも、柔らかい雰囲気を纏っていた。テストが終わってほっと一息きたいと思うのは、あた

しだけではないみたいだ。

いつもはあたしが早美の席に行くのに、今は来てくれた…。そんな些細なことが嬉しくて仕方なくなる。

「疲れたよ」。でも、ちよつと手応えあるんだ。できたところがほんとに合ってるか、すごい気になるの」

「数学で勉強会でやったところと同じ問題だね。あれできた？」

「（３）は無理だったけど、できたよ」

ずいぶん受験生らしくなったと思う。

「腹減った」

カズもやってきて、お馴染みの会話が繰り広げられた。

「あたし今回、物理やっちゃったかもしれない」

と、早美。

「難しかったよな。特に大問４と５」

クラスメイトがお腹を空かせて我先にと帰っていく中は、あたしは会話に加わりながらも、二人の様子を近所のおばあちゃんのように見守っていた。

そこに、カズのお腹が盛大に鳴った。

「限界。甘い物もいいけど、メシが先じゃないか？」

今日は約束の日。話題のケーキ屋に行くことになっていたけれど、確かにお昼を食べるのが先決そうだ。

「あたしもなんでもいいから食べたいよ。早く行こ」

早美も笑顔で頷く。テスト後の開放感と、これからのイベントに、あたしの心はすっかり舞い上がっていた。

「上野、ちよつといいか」

ところが、そこに水を注す声が耳に入った。

驚いて振り向くと、担任が手招きをしてあたしを呼んでいた。

何か、悪いことをしたっけ？

あたしは慌てて思い当たる節を探した。確かにスカートは短いし、化粧はしているけど、それはあたしだけではないはず…。確かに今の現在の教室では、あたしだけかもしれないけれど…。

「この間言っていた大学の募集要項のことだ。今ある分だけならやれるぞ」

「あ…今行きます」

理由が思い当たって、あたしは早美とカズを振り返って言った。

「ごめん、ちよつと行ってくる。先に二人で行ってて」

我ながら、ナイスアシストじゃない？

「どこに行ってるって言うんだよ」

微妙な緊張感を醸し出しているカズが、すかさず言った。

「どこでもいいよ。とりあえず駅前方面かな？ あたしもすぐ追いかけるからさ」

「玲奈の用事って、進路の話？」

今度は早美が聞いてきた。

「うん。保育士の免許をとれる大学を探してたの」

そういえば、あたし達はまだ、お互いがどの大学を志望しているのか話したことがなかったはずだ。

「玲奈、保育士になりたいんだ？」

カズは少々意外そうに言った。

あたしは子ども好きに見えないってわけ？

「もう、詳しくは後で話すよ。とりあえず担任の行ってくるね。そんなに長くかからないと思うけど、また連絡するね」

「わかった。先行くね」

早美の返事を聞いて、あたしは安心して一足先に教室を出た。その足で職員室に向かう。

すでに目には見えない二人の様子を、あたしは目一杯想像していた。

二人つきりにされて、カズはどうリードするだろうか？

早美が嫌な思いをしないことだけ、祈っている。

担任からいくつかの大学の資料をもらい、わずかに面談もして、あたしは気を引き締めて職員室を出た。

今回、この資料をもらっ運びになったのは、色々な意味で自分と向き合えるようになったからだ。

いまさらだけど、興味がある分野に、進路を変えようとしている。もともと子どもは好きだし、弟や妹の世話をやくのも言うほど嫌いではない。小さなギャングっぷりには圧倒されるけれど、その予測不可能なパワーと個性はとても興味深い。だから、保育士や幼稚園の先生という進路選択を、いつのまにか考えるようになった。

修一のそばにいたいからというだけで、大学を選ぶのではなく、ちゃんと自分が将来やりたいこと見越して、決定しないといけないと思った。

幸い家から通える距離に進路の合う大学はあるから、家族の負担にもそこまでならないし、修一と大学は違っても、近くに住んでいたらなんとか会えると思う。

ただし、国立大学だから……偏差値はもっとあげなくては……。そこは担任にもしつかり釘を刺された…。

でも、明確な目標が決まれば、なんだか前に進もうという力がより働くような気がする。

あとは、勉強して、自分の目標を自分で叶えるしかない。

険しい道のりかもしれないけれど、挑んでみようという気になれた。これも、きつと、早美のおかげだ。

時間を確認すると、早美たちと別れてから、まだ10分ほどしか経っていなかった。思いの外、早く用件は済んだのだ。

二人はどの辺りまで行っただろう？ もちろん、距離的な意味で…だ。

微笑ましく歩いている姿を想像すると、つつい頬がにやけてしまっ。

あたしはケータイを取り出しながら生徒玄関に向かった。

カズにどんなメールを送ろう 『あたしも合流させていただいてもいいですか？』かな…？

玄関は閑散としていた。遠くに、部活動の掛け声が聞こえる。

日曜日なのにやるなんて、よほど大会でも近いのか……。

いざ、送信ボタンを押そうとして　影に溶け込むように座り込んでいた人物に気づいた。

「びつくりした……！　……先に行っただんじゃなかったの？」

早美と歩いている姿を思い浮かべていたはずの、その人がここにいる。

一人で……。

「あれ……？　早美は……？」

あたしは続けて言い添えて……カズの様子に気がついた。
落ち込んでいる……？　いや、怒っている……？

「ええつと……早美は……帰ったの？」

余計なことを言いそうになる口を制御しながら、あたしは状況を把握しようと慎重に尋ねた。

カズがなにかしでかしてしまったのだろうか……？

カズは、何かに耐えるようにしてそこにいた。明らかに様子がおかしかった。

「カズ……？」

「早美は、まだ校舎内にいる」

「あ、そうなんだ……。じゃあ、なんなのこの状況は？」
とりあえず胸をなで下ろす。そして再び尋ねた。

この　先に行っていたはずの早美とカズのうち、カズは玄関で負のオーラを纏い、早美がまだ校舎に残っている　という状況の、理由を。

「これ」

カズが力なく差し出した四つ折りの紙を、あたしは慎重に受け取った。しばらくカズの説明を待ったが、それ以上何も言わないカズを見限って、あたしはその紙を開いた。

「これって……？」

そこに書かれている意味は、わかる。角ばった文字が綴られた文章。

早美宛の、呼び出し状……。

「いわゆる、告白のだな」

カズの言葉が、あたしの頭の中でリフレインする。

告白　誰かが、早美に　……。

ようやく、状況を理解した。

「なに、それ……カズは、行かせたわけ？」

最後のセリフは思いのほか、強くなってしまった。

責める響きを含んだあたしの言葉を受けて、カズが顔を上げる。

「引き留めればよかったって言うのかよ？　なんて言って？　この誰とも知らないやつのことなんてほっとけて！？」

カズの鋭い言葉が、あたしの沸騰しそうだった頭を急速に冷やした。

ほんの少し、彼のもどかしさと、自己嫌悪する気持ちがあった。

ああ、だから……。

カズは落ち込んでいるのだ。そして、自分に怒っている。

「早美は、そういうの無視できる子じゃないと思うから……」

きつと早美も、カズに対する思いはどうあれ、決断に悩まなかったはずはない。

「……ごめんね、無神経な言葉だった」

荒んでいたカズの目が揺らいで、掠れた声が絞り出される。

「俺こそごめん。完璧な八つ当たりだった。でも、どうすればよかったのか……」

口元で両手を組んで、言葉を飲み込むカズを、あたしは黙って見つめることしかできなかった。

カズと早美がうまくいってほしいと願うのは、あたしの勝手な思いだ。

カズのことは応援している　けれど、それに応えるのは早美の意思。

早美の好みを聞くとか、時々お膳立てをするとか、できることは多少あるけれど、言い方を変えればそのぐらいしかできない。

早美の気持ちを聞いてしまったら、何かが簡単に変わるのかもしれない。

けれどそれは……。

幼馴染と、親友の間で、あたしは見守ることしかできないし、それしかしてはいけない。

二人の思いが重なればいい。

でも、それは、願うことしかできない。

だからあたしは、静かに願いを重ねる。

誰かの、願いが叶って…。

みんなが幸せになれますように……と。

エピソード23

緊張を隠しながら、他愛無い話をする。

早美は特に、チョコレートよりも生クリームが好きらしい。バナナよりはストロベリー派。和菓子もなかなかいけるらしく、つぶあんの方が好き。栗が入っていれば最高に好き、らしい。

現実的な数々の情報は、俺の頭のメモリーにしっかりインプットさせていく。宝物が増えていくみたいに満たされる。

一緒に歩くこの廊下が、どこまでも続けばいいのに。

すれ違う人もなく、まるで遠い夢の世界の出来事のようにだった。

まだ少し騒がしい生徒玄関が、これを現実だと唯一知らしめてくれる存在だ。

ずっと望んでいた。ありふれた高校生の日常の一幕のように、早美と歩きながら話をしすることを。

いま確かに、俺の隣には早美がいる。

俺が好きになってしまった女の子が、俺の隣を微笑みながら歩いている。

気分は最高。いまのところ。

いつのまにか生徒玄関にたどりついていた。

内心浮かれきっていた俺は、そのときようやく動きを止めた彼女に気がついた。

「どうしたの？」

あるとき、気づかない振りをしていれば。

彼女に泣きそうな顔などさせなかったかもしれないのに……。

「うん……」

歯切れの悪い返事をした早美に、俺はそっと近づいた。

俺に真横に立たれて、行き場を失った彼女の右手には、白い紙切れがあつた。

「なに？」

俺はまだ、早美の表情に気がつかなかつた。夢見心地だったのかもしれない。

覗き込んで、最初に声を挙げたのは俺だった。

「呼び出し？」

「…やっぱりそうかな」

早美の戸惑つたような声に、突然夢から覚めた。

「男の字だね」

強張つた声は、俺の声。

「そうみたいだね」

早美は冷静に答えている。浮かれられても、俺はどうしようもなかつたけれど。けれど……。

「心当たりは？」

「ないよ、そんなの……」

俺も、思い当たらない。

「今つてことなんだろうな」

「そう……かな」

今日初めて視線を合わせたように、俺たちはぎこちなく見つめあつた。

「いたずらつて可能もあるけど。……どうするの？」

そうであつてほしいと、俺は願わずにはいられない。

「どうしようかな」

早美は、冷静だつたけれど、いつもの潔さはなかった。途方に暮れたような顔をして、紙を見つめる。本当に迷っているのだろう。

下駄箱に手紙とは常套手段なのかもしれない。ただ、差出人の名前もなく、人気のない更衣室に呼び出すという行為は、客観的に見ると気味悪がられても致し方ないだろう。

だから、行かなくてもいいはずだ。

俺は祈るような気持ちで早美の横顔を見つめた。

「行くべきかな…って思う」

お互い何も言わない時間が流れ、早美がそう口火を切った。

「うん」

早美の決定に、俺はただ、でも否定の言葉もなく、頷いた。

本音は、行かせたくない。

本当に告白なら 俺以外の野郎の前に早美を立たせたくない。

彼女の真摯な眼差しを、その男に浴びせてほしくない。まして、OKするなんてことは…。

「いたずらかもしれないし……どのみちすぐ戻ってくるから、玲奈と待っててくれる？」

「ああ…」

それは、誰であつてもOKするつもりはないということだろうか…？

「新しい彼氏って、俺たちに紹介する可能性は？」

俺は、自分で自分の首を絞めた。

自覚はある、ただ、確約が欲しくて、愚かな問いをした。

「それはないよ」

早美は小さく息を吐いた。呆れているようにも、悲しんでいるようにもとれた。

「受験生だし。それどころじゃないでしょう」

俺は確かに、そうだねと答えた。

行くなと引き留める勇氣もなく、いたずらだろうと彼女を貶めることもできず、ただ彼女の意見を肯定した。

受験生だから、いま早美は誰とも付き合うつつもりはない もち

ろんそこには俺も含めなくてはならないのだろう…。

いま、ここで。

俺の気持ちを伝えることは、早美をどれだけ困らせるだろう。

俺だけ例外だと思い込めるほど、自分に自信があるわけではない。きつと、困った顔をされて、気を使わせて、悲しませるかもしれない…。

だから俺は、早美を見送った。

様々な理由をつけたようで、本当は、この関係を壊したくないという守りに入った。

レーナに非難されるまでもない。

俺は後悔している。

「あたし、様子を見に行ってくる」

レーナが唐突に言った。

思いのほかレーナが早く戻ってきたので、早美を見送ってからもうも時間はたっていないはずだった。

「のぞき見？」

俺は投げやりな気分で言った。

「心配だもん。早美が彼氏を作ってくるなんて心配はしてないわよ。でも、相手が変わなやつで無理やり言い寄られてたりしたら助けてあげないと」

俺の返事も聞かず、レーナは玄関に背を向けて歩き出した。

「おい、レーナ」

「カズはこなくてもいいわよ」

レーナは腹を立てているわけではなさそうだったが、その言動からどうやら俺はわずかに見放されたらしいことがうかがえた。

「…悪かったよ。吉澤を行かせたこと、すごく後悔している。だから俺も行く」

レーナは歩みを止めないまま、小さくため息をついた。

「別に、カズに対して怒ってない。その場で告白しろだなんて、言わないわよ……。ただ、なんとなく自分が……早美がそんな手紙を

もらったときに、そばにいれなかったことが悔しい。タイミング悪かったなあって思っちゃって」

レーナなりに、思うことはあるらしい。レーナは俺を応援してくれているが、早美の方が優先だとは公言している。それは俺も納得している。

早歩きをしながら、俺たちは手紙に書かれた呼び出し場所、体育更衣室に向かった。

「受験生だし、彼氏を作る気はないってよ」

「だからさらに落ち込んでるんだ？」

「……そうだな」

ずいぶん身勝手な落ち込みようだ、自分でも苦笑した。

「でも、そう言われたら告白なんてできないよね」

レーナのフォローに、俺は心の中で感謝した。

「いま告白しても、早美を困らせるだけだろうな」

「でも、受験が終わったら……」

進路の話は、まだお互いにしていない。今日、昼飯を食べて、お茶をして、たわいなく話せたらと思っていた。

受験が終わったら、同じクラスでもなく、同じ学校でもない、別々の場所になるかもしれない。

あまり考えないようにしていた、小さな恐怖。
でも。

「受験優先」

俺はもう一度言う。

「吉澤の言うとおり、俺もそう」

離れ離れになりたいわけじゃない。もちろん離れ離れになれば、早美との接点はもつとすくなくなる。

だからといって、早美や自分の人生を投げやりにしたくはない。早美にも、自分を支えてくれている家族にも、とても顔向けできない言い訳になつてしまふと思った。

「レーナだって、だからその資料貰ってきたんだろ？」

「わかった？」

「昔のレーナなら、間違いなく兄貴と同じ大学に行くって騒いでた」
「まあね。あたしだっていろいろと、自分のことを前向きに考えているんだから」

思いがけず本音を話せたせいか、さっきまで俺とレーナの間にあったぎこちなさは和らいだ。

「まあ、まずは本当の春にたどりつかないとな」

「そうだね……」

目的の場所は近づいていた。

はかったように、俺たちは足音を抑えた。更衣室の入口は20mほど先に迫っていた。

『どうしよう？』

と、声をひそめるレーナ。

『どうするつもりで来たんだよ……？』

様子を見る、とは言ったものの、本当にのぞき見をしたいわけではない。

『うーん……あんまり考えてなかったんだよね』

更衣室の入り口が見えた。

違和感 ……。

『あれ？ 確か更衣室って、いつも』

匂いがこもるとい理由で、扉を開けっ放しにしているはずだった。もちろんのぞかれないように、中にパネルが置かれて目隠しになっていた。

今日に限って、違和感を覚えるクリーム色の扉が目についた。

嫌な予感がして、俺は走っていた。

けたたましい足音が、静かな廊下に響いた。

「早美！」

扉を開くと同時に、彼女の名前を呼んでいた。

「……もとくん、危なっ……」

薄暗い室内に、一瞬目が暗み、早美の切羽詰まった声がしたと思

つたら 人の気配がすぐそこにあった。

「な……」

何かが振り下ろされる風音がした。直後、右肩に鈍い衝撃があった。

「ぐっ」

「湯本くん！」

もう一度、早美の声がした。

彼女は、どこにいる？

打たれた右肩をかばうように体をひねりながら、目を凝らしたが、パネルが視界を遮り、早美の姿は見えなかった。

おそらく更衣室の奥にいるのだろう。

「ふん！」

荒い息遣いが聞こえた。

すぐそばに、ニットの覆面をした男が、バットを握って次の行動に移ろうとしていた。顔は隠されているが、制服を着ていることから同じ学生だとわかる。

くりぬかれた目の部分と、口の部分から、不気味さと生々しい必死さが伝わってきた。

「てめえ……」

バットをもう一度構えさせないために、俺は反射的に体当たりを食らわせていた。

覆面の男は一度扉の枠に当たり、廊下に転げ出た。俺も重心がぶれて、その場に崩れた。

「きゃっ！」

レーナの悲鳴だった。

俺を追かけて、突然覆面男が転がり出てくるところに出くわしたのだ。

「レーナ、逃げろ！」

覆面男と俺が体制を立て直したのはほぼ同時だった。男はレーナに気付いたが、すぐ後ろに俺が迫っていることもわかっていたらし

い。

立ちすくむレーナの目の前で、俺は男につかみかかった。思うように右腕が上がらないことに苦戦したが、相手の腹に確実な一発を食らわせた。

「カズ、危ない！」

せき込む男にもう一度つかみかかろうとして、俺もようやく気がついた。

銃刀法違反としか言いようのないナイフが光る。男は右手にバット、左手にナイフを握りしめ、こちらをうかがっていた。

「お前、誰だ」

答えるとも思えなかったが、聞かずにはいられなかった。

この場にそぐわない、怪しい覆面をした男の荒い呼吸音が廊下に響いていた。

唐突に、更衣室のもうひとつの扉が開いて、人が滑り出てきた。同じく覆面をした男だった。

形勢的に不利になると一瞬を焦ったが、もう一人の男はそのまま反対側の方向へと駆け出した。手には、武器ではなく、小型の機器らしきものを持っていた。

俺たちと対峙していた男も慌ててそれを追うように走りだした。

「待て！」

追いかけようとする俺に向かって、男は容赦なくバットを投げつけてきた。

「カズ！」

レーナが悲鳴のような声を挙げる。

なんとか避けたが、バットが鎮まるころには、二人の男の姿は遠のいていた。

「湯本くん！」

早美の声が近くで聞こえた。

「早美…」

俺はそちらを向いた。更衣室から出てきていた彼女は……。

「早美！ 大丈夫！？」

レーナが駆け寄る。

うん、大丈夫、大丈夫なの……。そんな声が聞こえた。

「レーナ、早美を」

最後まで言わず、俺は走り出していた。

なぜ。

誰が。

どうして早美を。

許せない。

なんとか無事だったようだ。

最悪ではなかった。

でもそれが、なんの慰めになる？

なぜ。

どうして早美を。

許せない。

早美がなぜ傷つかなければならない。

俺が引きとめていれば。

愛おしい人すら守れなかった自分が一番許せなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4347d/>

よしざわはやみ

2010年12月6日22時40分発行